濟定檢省部文

新修國史

廣島高等師範學校教授 及川儀右衛門著

初學年用
實業學校用

43040
教科書文庫
4
210
44-1939
20000
72700

昭和十年四月一日六
文部省檢定濟
實業學校歷史科用

資料室

教科書文庫
4
210
44-1939
2000072700

新修國史

用年學初

〔用校學業實〕

廣島高等師範學校教授
及川儀右衛門著

野星書店藏版

広島大学図書
2000072700

4c
210
HB14

例言

一、本書は昭和十二年公布の教授要目に準據し、實業學校初級用の國史教科書として編纂したものである。

二、著者は初年級に於て課せらるべき國史の主要な任務が、(一)既有の知見を整理統括し、我が國の特質を明かにし、(二)國史の體統にもとづき時代の觀念を明確にし、(三)それぞれの鄉土との連關に留意せしめ、(四)外國史に入るにさきだち、對外關係の變遷を考慮しつゝ、國民的自信への教養を志す點に存することを信じ、本書を構成する根本の眼目をこゝに置いた。

三、記述を簡明にして理解をたやすからしめ、またあまりに多樣の史實をならべるよりも、むしろ根本的なものについて、考へ味ひながら學ばしめることは、著者多年の實際研究にもとづく結論

広島大学
教
72700
図書

である。特に國民たるの志操・心意の修練については教材叙述の兩方面から深く留意した所である。

四、初年級の生徒をして、具體的直觀的な理解を得しめるため、本書の挿畫は、なるべく各時代の時代相や生活狀態を知るに足るものを中心とし、また史蹟もつとめて各地の著名なものをとつた。生活のうちに歴史を見、鄕土のうちに歴史を見ることが、少しでもできたならば幸である。

五、本書を使用して生徒の教養に當られる場合には、少くも文部省『尋常小學國史』を併讀して、重要な史實の理解を確かにすると共に、新しい知見の開發を全うせられんことを希望する。

昭和十二年七月

著者識

新修國史 初學年用〔實業學校用〕

目次

第一篇　上古……一

第一章　神代……一

第二章　神武天皇の御創業……四

第三章　皇威の發展　上代の國民生活……七

第四章　文物の傳來……一三

第五章　蘇我氏の專權及びその滅亡……一八

〔上古史大要〕……二〇

第二篇　中古……二三

第六章　大化の改新　律令の制定……二三

第七章　奈良の都……二八

第八章　奈良時代の文化……三三
第九章　平安京……三八
第十章　教學の刷新……四一
第十一章　藤原氏の攝關政治……四三
第十二章　平安時代の文化……四六
第十三章　武士の興起……五〇
第十四章　院政　源平二氏の興起……五四
第十五章　平氏の專權とその滅亡……五八
〔中古史大要〕……六三
第三篇　近古……六四
第十六章　鎌倉幕府の創設……六四
第十七章　承久の變　北條氏の民政……六七
第十八章　鎌倉時代の文化……七〇
第十九章　元寇　兩皇統の交立……七五

第二十章　建武の中興……七九
第二十一章　吉野の朝廷……八六
第二十二章　室町幕府の創立……九〇
第二十三章　室町時代の外交と文化……九三
第二十四章　室町幕府の失政　應仁の亂……一〇〇
第二十五章　群雄の興起……一〇三
第二十六章　織田・豐臣二氏の尊王統一……一〇七
第二十七章　西洋文物の傳來　安土・桃山時代の外交と文化……一一五
〔近古史大要〕……一一三
第四篇　近世……一一四
第二十八章　江戸幕府の創立　封建制度……一一四
第二十九章　江戸時代の外交　鎖國……一一八
第三十章　元祿の世相　經濟の發達……一一三
第三十一章　文教の復興……一一六

第三十二章　江戸幕府の中興……一四〇
第三十三章　江戸幕府の衰運……一四三
第三十四章　尊王思想の勃興……一四九
第三十五章　大政奉還……一五四
〔近世史大要〕……一六〇
第五篇　現代……一六三
第三十六章　明治維新……一六三
第三十七章　明治時代の內治外交……(一)……一六四
第三十八章　明治時代の內治外交……(二)……一六九
第三十九章　明治時代の文運の發達……一七七
第四十章　大正・昭和時代……一八〇
〔附錄〕系圖……一
國史年表……一

天照大神

素戔嗚尊

出雲要地圖

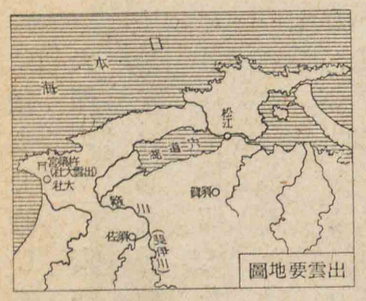
新修國史

初學年用〔實業學校用〕

及川儀右衞門著

第一篇上　古代

第一章　神代



天照大神

わが大日本帝國は、皇祖天照大神(アマテラスオホミカミ)が、その基(モトヰ)を御定めになつた。大神は、御德が極めて高く、農業養蠶などを御ひろめになり、民に衣食の道を敎へ給うた。大神の御弟素戔嗚尊(スサノヲノミコト)は、とかくあらあらしい御行ひが多く、大神の新嘗(ニヒナメ)の宮殿や、神衣を織らしめ給ふ機殿(ハタドノ)をも汚(ケガ)し給うたから、神々に追はれて出雲(イヅモ)島根に赴(オモム)き、天叢雲劍(アメノムラクモノツルギ)を得て、天照大

大國主命

出雲大社

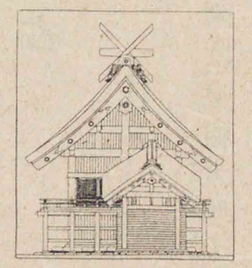
島根縣大社町にある。大國主命を祀る官幣大社、圖は本殿で古代建築の風を傳へる大社造である。

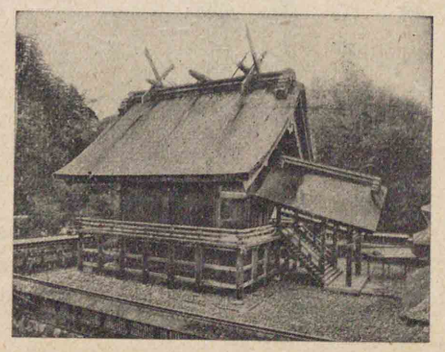
領地獻上

天照大神の御神勅

神に獻上し給ひ、また朝鮮半島にも往來せられたと傳へられる。

大國主命 素戔嗚尊の御子大國主命は、出雲を中心として廣く土地をひらき、醫藥の法を教へて、民福をはかられたので、人々深くその恩德に服した。時に天照大神は、御子孫をして、この國を安らかに平らけく治めしめんとおぼしめされ、御使を出雲につかはし、その旨を大國主命に諭し給うた。命は、御子事代主命とはかり、謹みて大命を奉じ、その領地を悉く獻上して、自ら杵築宮に退かれた。後この宮に大國主命をまつり、出雲大社といふ。





皇國の基礎 こゝに於て天照大神は、御孫瓊瓊杵尊に神勅を下し

三種の神器

可愛山陵

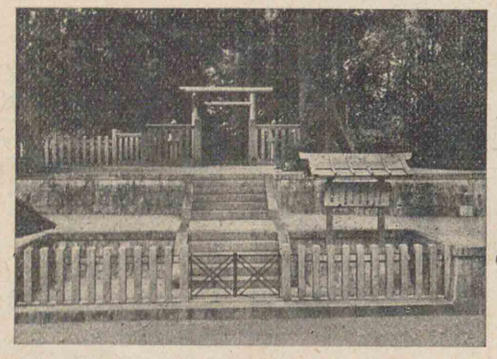
鹿兒島縣薩摩郡可愛山にある。瓊瓊杵尊を葬り奉る。

天孫降臨

豐葦原瑞穗國はわが子孫の王たるべき地なり。汝皇孫ゆいて治めよ。寶祚のさかえまさんこと天壤とともにきはまりなかるべし。

と仰せられ、更に八咫鏡に天叢雲劍・八坂瓊曲玉をそへて授けられ

この鏡を見ること我を見るが如くせよ。



とのたまはせ給うた。天壤とともに動きなき帝國の基礎は、實にこの神勅によつて定まり、三種の神器は、この後永く皇位の御しるしとしてつた。かくて瓊瓊杵尊は、御神勅をかしこみ神器を奉じ、天兒屋根命・太玉命等、多くの神々を從へ、日向宮崎に御降りになつた。これを天孫降臨と申し奉る。これから御三代の間、この地におはして、わが帝國を治め給ひ、深く恩德を國民にほどこさ

神代

御東遷

神代皇室御系圖（一）

伊弉諾尊
伊弉冉尊
天照大神（アマテラスオホミカミ）
素戔嗚尊
天忍穗耳尊（アメノオシホミミ）
大國主命
瓊瓊杵尊
事代主命
五十鈴媛
彦火々出見尊（ヒコホホデミ）
鸕鷀草葺不合尊（ウガヤフキアヘズ）
神武天皇

ひ、神武（ジンム）天皇の御代から人皇（ニンワウ）の代と稱する。

我が國體　かくて神勅のまゝに君臣の分が定まり、萬世にわたりゆるぐことなき尊い國體が確立（カクリツ）し、御歷代の天皇は、皇祖皇宗の旨を奉じて、安國と平けく統治し給ひ、國民もまたみなその心を一にし、皇室を中心として忠勤をはげみ、國内は一家の如くに相親しみ、國運日に月にさかえ、以て今日の大御代に及んだ。

第二章　神武天皇の御創業（ゴソウゲフ）

大和の平定　神武（ジンム）天皇は、瓊瓊杵尊の御曾孫（ゴソウソン）で、人皇第一代におはします。天皇は、中央の要地にうつつて、萬民を安んぜんとし給れた。これまでを神代（カミヨ）といれた。

宮崎神宮

宮崎市北郊にある官幣大社で神武天皇をまつる。もと天皇御宮居の跡と傳へられる。

大和の平定

橿原宮

ひ、御みづから諸臣をひきゐて日向を發し、海路瀬戸内海を經て、東に向はせられた。かくて多くの年月と御困難とをかさねて、浪速（ナニハ）大阪市に御つきになり、進んで大和（ヤマト）奈良に入らうとせられた。時に長髓彦（ナガスネヒコ）といふ土賊（ドゾク）が、饒速日命（ニギハヤヒノミコト）を奉じて勢強く、皇軍を生駒（イコマ）山に防ぎ奉つたから、天皇は道をかへて、紀伊（キイ）和歌山にまはり、道臣命（ミチオミノミコト）等のみちびきにより、險路を經て、ゆくゆく諸賊を平げ、再び長髓彦を攻め給うた。そこで饒速日命は、長髓彦に君臣の道を諭し、天皇の大命を奉ぜしめようとしたが、聞入れなかつたので、やむなくこれを殺して天皇に服し、ついで大和地方は全く平定した。

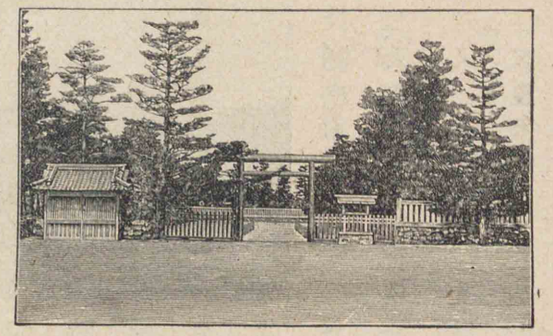
天皇御卽位　かくて天皇は、まづ都を畝傍（ウネビ）山の東南橿原（カシハラ）にさだめて皇居を建て、おごそかに卽位の大禮を行はせ給うた。こゝに

神武天皇御東遷要地圖

紀元節

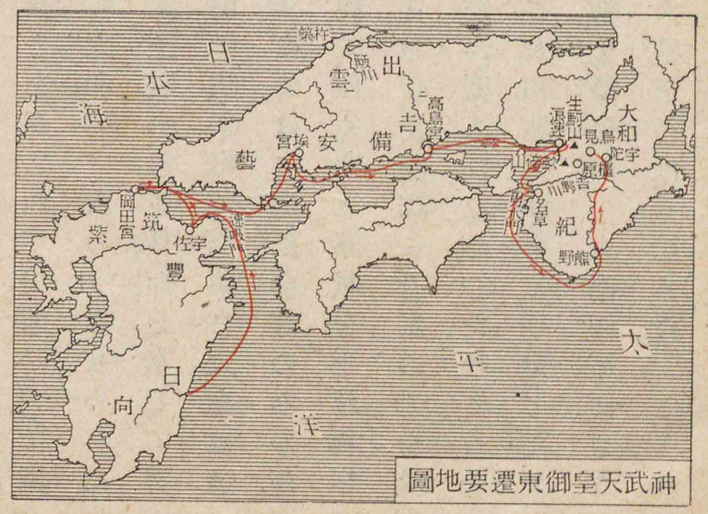
畝傍山東北陵

奈良縣高市郡白檀村にあり神武天皇を葬り奉る。鳥居の向つて右側に見えるのが御陵である。



於て肇國の大業はじめて成り、後世この年を紀元元年とし、御即位の日を紀元節と定め、國をあげて之を祝し奉る。また事代主命の御女、五十鈴媛命を皇后とし給ひ、鳥見山中に於て、あつく皇祖を祭り、神勅の御旨を全うせんとせられた。

天兒屋根命……天種子命—中臣氏
天太玉命……天富命—齋部氏
天忍日命……道臣命—大伴氏
饒速日命——可美眞手命—物部氏
祭事・民政
軍事・守衛



神武天皇御東遷要地圖

祭と政

地方政治

御政治 この頃の政治は、神を祭ることが中心で、いはゆる祭政一致であつたから、天種子命・天富命に祭事をつかさどらせ、また道臣命・可美眞手命に軍事をつかさどらせ、地方には國造・縣主を置いて、それぞれの政治を行はしめた。

第三章 皇威の發展 上代の國民生活

皇大神宮の起

神武天皇から約五百年を經て、崇神天皇が御立

皇室御系圖（二）

一 神武天皇—二 綏靖天皇—三 安寧天皇—四 懿德天皇—五 孝昭天皇—六 孝安天皇—七 孝靈天皇—八 孝元天皇—
- 九 開化天皇—
  - 大彦命—武淳川別命
  - 吉備津彦命
- 一〇 崇神天皇—
  - 豐城入彦命—□—□—御諸別王
  - 豐鍬入姫命
  - 垂仁天皇—
    - 景行天皇—
      - 倭姫命
      - 一三 成務天皇
    - 日本武尊—一四 仲哀天皇—一五 應神天皇
  - 彦坐王—丹波道主命

賢所

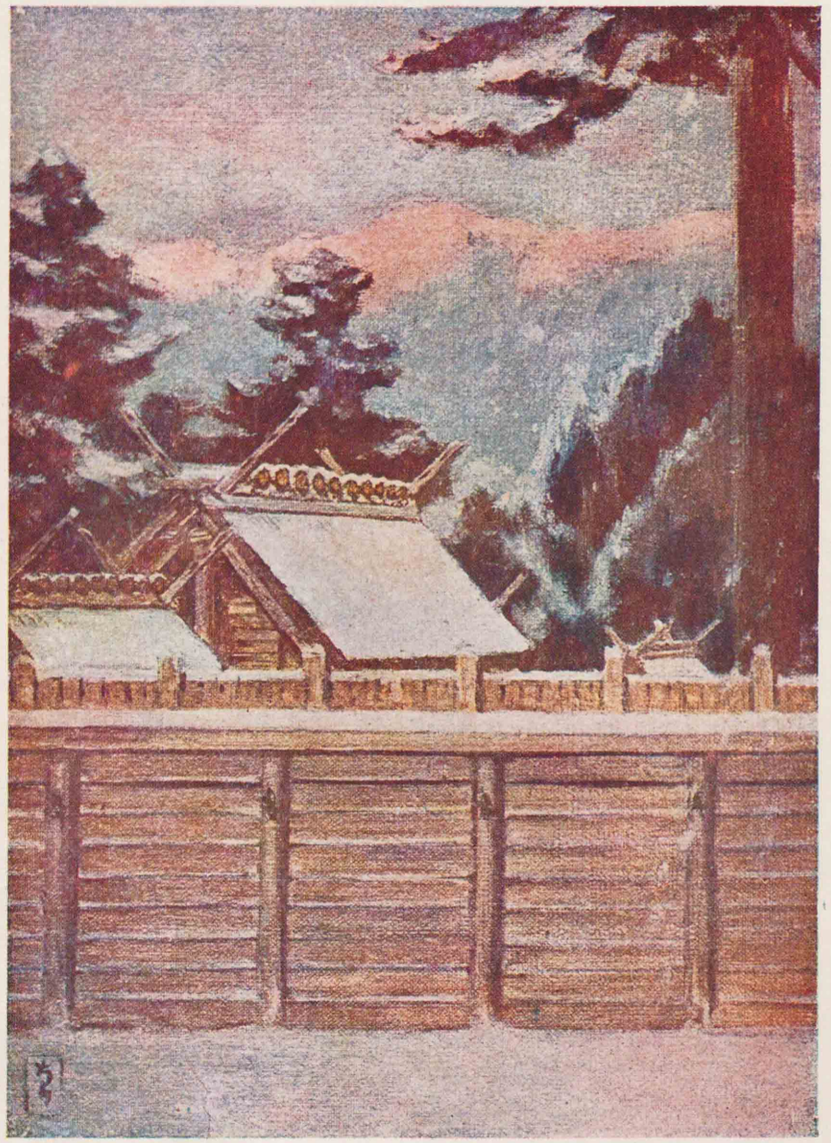
皇大神宮

四道將軍

ちになつた。天皇は、敬神の御心深くましまし、神器を宮中に奉安するのを畏多くおぼしめされ、御鏡に御劍をそへて、大和の笠縫邑にうつし、御鏡を御神體として、天照大神を祀らしめ、別に鏡・劍をまねてつくり、八坂瓊勾玉と共に宮中にとどめ、皇位の御しるしとして給うた。この時新につくられた御鏡は、後に宮中の内侍所(賢所)に奉安し、御代々の天皇は、あつくこれを祭らせられた。次の垂仁天皇は、更に伊勢三重の五十鈴川のほとりに宮を建て、御鏡・御劍をうつし奉り、皇女倭姫命をして祭らしめ給うた。これ卽ち皇大神宮で、後に内宮と稱し、今もなほ昔ながらの宮殿風な建築を傳へてゐる。

皇化地方に及ぶ

崇神天皇は、遠い國々にはなほ皇化が及ばないのを見そなはし、皇族を北陸・東海・山陰・山陽の四道につかはし、その地方を鎭め、國民を導き給うた。これを四道將軍といひ、その御子孫は各地に土着せられ、皇威はひろく遠方にも及び、君民の關係は、



皇大神宮　(中澤弘光筆)

熊襲と蝦夷

日本武尊

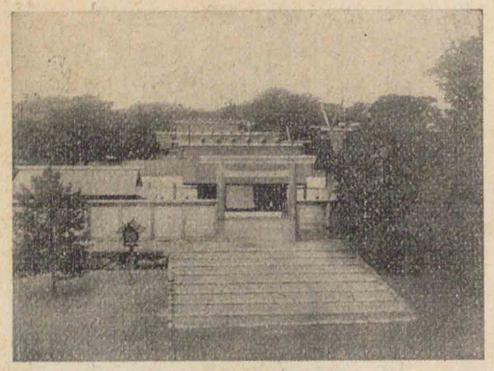
蝦夷

今の北海道アイヌ人の生活を示す。

熱田神宮

名古屋市南區にある官幣大社、草薙劍を主神とし天照大神・日本武尊等をまつる。

一層親密を加へた。然るに九州南部の熊襲（クマソ）と、東北地方の蝦夷（エゾ）今のアイヌの祖先とは、共に文化が開けず、屢〻そむいて世をさわがせたので、景行天皇は、熊襲を親征せられ、ついで皇子日本武尊（ヤマトタケルノミコト）をして、熊襲と蝦夷とを討たしめ給うた。尊はまづ九州に下り、熊襲の長川上梟帥（カハカミタケル）を誅し、後東下して蝦夷を服し、日高見國（ヒタカミノクニ）今の阿武隈川下流地方をいふまでも平定せられた。尊は歸途、伊勢に薨じ給ひ、尾張（愛知）にとゞめ置かれた草薙（クサナギ）の神劍は、今の熱田神宮にまつり奉る。天皇は、御諸別（ミモロワケ）王をして、東國を治めしめ、また尊のつれ歸られた蝦



夷を諸國にくばり、あつくこれをいたはられたから、いつしか同化して忠良な臣民となつた。

國力の發展

崇神天皇は、深く心を民事にとゞめ給ひ、『農は國の大本なり』とおほせられ、多くの池や溝をほらせて、農業をすゝめ給ひ、諸國に船をつくらせて、交通の便を開かれた。されば世もおひおひに開け、政務も漸くしげくなつたので、始めて人口をしらべて租税の法を定め、男には狩の獲物(弓弭の調)女には織物(手末の調)などを納めさせた。垂仁天皇も亦大いに産業を興し給ひ、詔して殉死の古風を禁じられた。かかる皇威發展の後をうけて、成務天皇は、專ら内治をとゝのへ給ひ、武内宿禰を大臣とし、また國造・縣主などを増置せられたから、皇化あまねく地方に及び、國力が次第に盛になつた。

租税の法

武内宿禰

朝鮮半島の服屬

朝鮮半島の南部には、小國が分立して、早くか

古代朝鮮半島要地圖

三國

好太王の碑

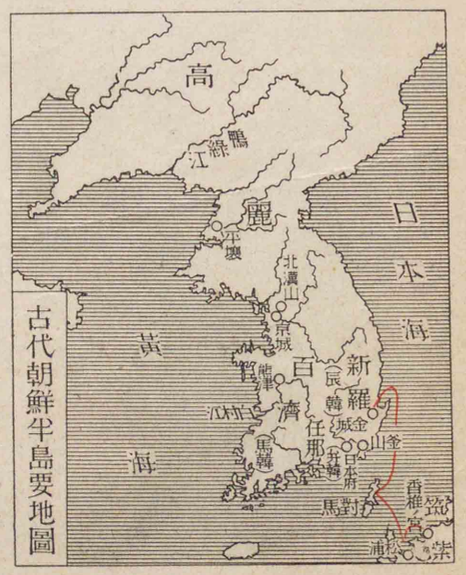
高句麗第十九代の英主好太王の功績を記した碑で今滿洲國の輯安縣にある、その一部に倭が辛卯年(一四〇一年)海を渡り百濟・臣・新羅を破りたことが刻まれてある。

任那の日本府

新羅

神功皇后の新羅親征

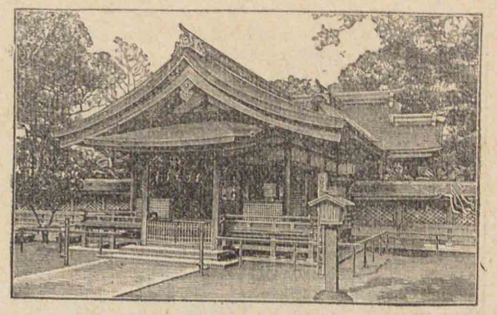
らわが國と交通したが、後新羅・百濟等の國が起り、北部の高句麗(高麗と共に、三國と呼ばれた。崇神天皇の御代、大加羅といふ小國が、東境を新羅に犯され、わが保護援助を仰いで來たので、わが國は鹽乘津彦をつかはし、これをたすけ、ついで國號を任那と稱し、日本府の基を開いて、これを治めた。然るに新羅は熊襲と結びこれをそゝのかして亂を起させたから、仲哀天皇は、神功皇后と共に熊襲を親征せられた



古代朝鮮半島要地圖

香椎宮

福岡市外香椎にある官幣大社で仲哀天皇等をまつる。天皇の御本營の跡と應神天皇の跡とがある。社側にある。



か、香椎の陣中で崩御せられた。こゝに於て皇后は、大臣武内宿禰とはかり、軍をひきゐて新羅を親征し、これを降し、後百濟・高句麗も相ついで來貢したから、朝鮮半島はわが國に服屬し、國威は海外までもかゞやくに至つた。

上代の國民生活

この頃國民の生業は、農業や漁獵を主とし、生活は極めて質素であつた。上下一般に神を敬ひ祖先を尊ぶ心があつく、君父をあがめ、その陵墓を廣大にし、葬祭を手あつくした。これ等の古墳から發見せられる埴輪や、器具・裝飾品などは、上代の國民生活を知る材料として、甚だ大切なものである。衣服は男女とも絹・麻等でつくつた筒

敬神

上古の服裝

男子の狩獵姿女子の麻糸をつむぐ姿で徽古館陳列人形による。

風俗

家

埴輪の家で奈良縣磯城郡城島村で發掘せられたもの、高さ約五〇糎東京帝室博物館に陳列せられる。

袖の上衣に、男は褌（今のズボンの如きもの）女は裳（今のスカートの如きもの）をつけ、美しい玉類をつらねて身のまはりを飾つた。食物は穀類・野菜・魚鳥を用ひ、これを素燒の土器にもり、家は地を掘り丸木の柱を立て、藤葛を以て結び合せ、茅を以て屋根をふき、床の上には敷物をしいた。

王仁

第四章　文物の傳來

學問の傳來

朝鮮からの貢船は、應神天皇の御代から、相ついで來航したが、朝鮮は早く支那の影響をうけてゐたから、その文物を傳へて、我が國文化の進歩をたすけた。應神天皇の御代、百濟の王仁が召されて來朝し、論語・千字文などの書を獻じ、稚郎子皇子は、つ

神功皇后木像
奈良市外の藥師寺に傳へられたもので平安時代初期の作と考へられる。

記錄の役

弓月君

織縫の進歩

仁德天皇

工藝の傳來

學問と共に工藝も傳來した。應神天皇の御代、支那の人弓月君が、多くの人々と共に歸化し、養蠶・紡織の新法を傳へ、また百濟から織工・鍛工・酒造工等が來朝したが、天皇は、更に阿知使主を支那につかはし、織・縫に長じた工女を御招きになつた。その後弓月君の子孫は、秦氏を賜はり、山城（京都府）に居り、阿知使主の一族なる漢氏と共に、織物など我が工藝の進歩をたすけた。

産業の發達

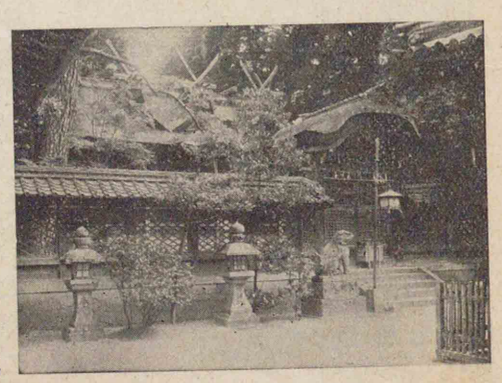
仁德天皇は、深く國民を愛し給ひ、海陸交通の要地

呉服神社
大阪市の北方池田にある。應神天皇の朝に來朝した織女が住んだと傳へられる地に宮を建てゝまつつたものである。

雄略天皇

豐受大神

である難波（大阪市）に都して、農業をすゝめ交通の便を開き、秦氏の子孫を諸國につかはし、養蠶・機織の技を教へ、また租稅を免じて民力の休養を御はかりになつた。ついで雄略天皇も、産業に御心をかけられ、皇后が宮中で蠶を養ひ、民に手本を示されたから、絹織物の産出がにはかにふえ、貢物が朝廷にみちみちた。そこで新に大藏が建てられ、またこの頃樓閣の建築をも見るに至つた。

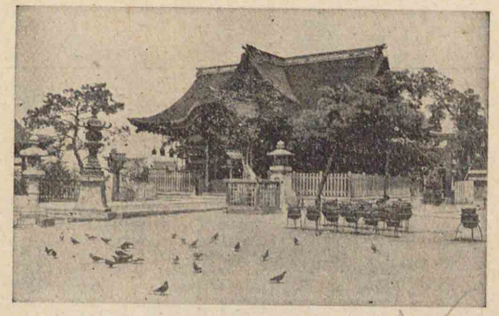


農桑の神である豐受大神を、丹波（今の丹後）（京都府）から、皇大神宮に近い山田にうつし祭つたのも、天皇

皇室御系圖（三）
一五 應神天皇
一六 仁德天皇
一七 履中天皇
一八 反正天皇
一九 允恭天皇
二〇 安康天皇
二一 雄略天皇
二二 清寧天皇
二三 顯宗天皇
二四 仁賢天皇
二五 武烈天皇
稚郎子皇子
市邊押磐皇子

高津神社

大阪市にあり仁德天皇をまつる。天皇の高津宮の跡は詳かでない。



百濟の聖明王

聖德太子

佛教と美術

の御代である。

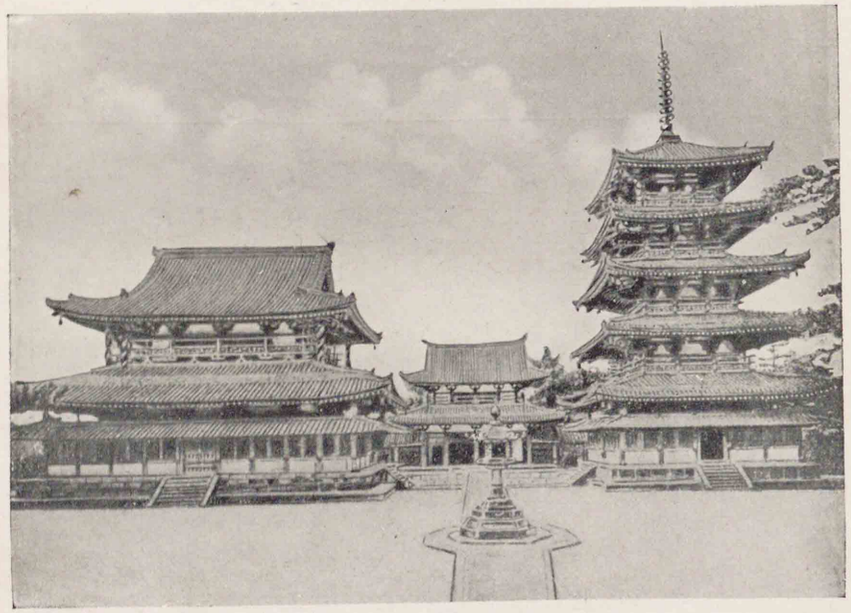
佛教の傳來

佛教は、もとインドの釋迦が開いた宗教で、早く支那に入り、ついで朝鮮半島に傳はつた。欽明天皇の十三年、百濟の聖明王は、使をわが國につかはし、佛像・經文を獻上した。この頃朝鮮半島では、新羅・高句麗の國勢大いにあがり、やゝもすればわが國にそむき、任那・百濟を犯したので、任那・百濟は、つとめてわが國の保護を仰ぎ、これに當らうとした。かくて佛教傳來するや、その信仰につき、賛否の論がわかれ、勢力家の間に烈しい爭ひをも生じたが、

三 用明天皇の皇子聖德太子が信奉せられて、御自ら經文を講じ給ひ、四天王寺・法隆寺等多くの寺を建て、佛教の興隆を御はかりになつた。

さればこの後佛教大いに榮え、造寺・造佛などの職工が朝鮮か

法隆寺の美術



五重塔　中門　金堂

壁畫の一部

金銅釋迦三尊

法隆寺は奈良縣生駒郡法隆寺村にあり推古天皇の御代に創建せられた。金堂は五間四面（間とは正面の柱と柱との間、面とは側面の柱と柱との間をいふ）の重層で五重塔と東西に並び、その南に四間三面の中門が立つてゐる。圖は講堂の前から南方中門に向つて寫したもので、莊重で釣合よき千古の建築美を示すものである。釋迦三尊は鳥佛師の作に成り、金堂内に安置せられる金銅佛で、中央の釋迦が座像で高さ一三六糎餘（四尺五寸）、向つて左が藥王、右が藥上菩薩である。樣式・手法すべて支那の後魏の風と相通ずるものと考へられ、光背には造像の由來を記した文をほりつけてゐる。金堂の壁畫は壁の上に胡粉のやうな白いものを塗り、その上に線と色の濃淡とを以て描いたもの、鳥佛師の作と傳へるけれども、もう少し後世のものであらうと推せられる。

聖德太子御像

帝室御物の御畫像による。中央が聖德太子で左右はその子の王子山背大兄王と殖栗王であると傳へられる。

冠位

憲法・曆法　國史

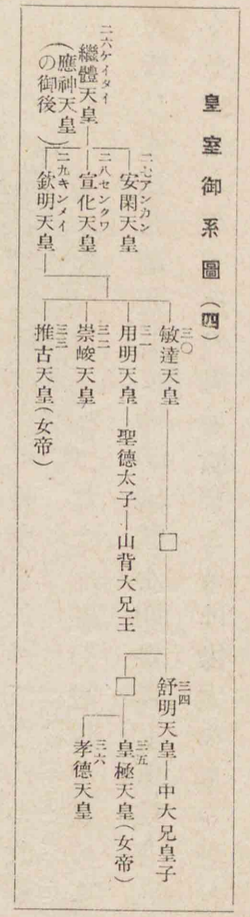
ら渡り來り、高句麗の僧曇徴は、推古天皇の朝に來つて紙・墨・繪具などの製法を傳へ、繪畫も巧になり、わが國にも鳥佛師の如き名高い佛工が出て、いはゆる推古時代の美術工藝を發達せしめた。

聖德太子の御政治

推古天皇は女帝であらせられたので、御甥聖德太子を攝政として、政治をすべさせ給うた。太子は天性聰明にましまし、ひろく學問・佛教を修めて、深く政治に御心をそゝぎ、我が國の美風に外國の長所を加へて、多くの改革を行はせられた。即ち冠位を定め、これを諸臣にたまひ、憲法を制定して、わが國體を明かにし曆法を定め、國史をつくらせ給ふなど、その御功績まことに偉大なものがおはした。この頃支那には、隋といふ國が起り、その文化も開けてゐたので、太子

支那との國交

は小野妹子を隋につかはし、國交を御開きになつた。これ日・支兩國國交の始めで、この後も國使や留學生が送られ、隋亡びて唐起るや、いはゆる遣唐使によつて、唐から制度・宗教・學藝などが、直接に傳來し、わが制度文物の改新をたすけ、益々固有の美風を發達せしめた。



遣唐使

第五章　蘇我氏の專權及びその滅亡

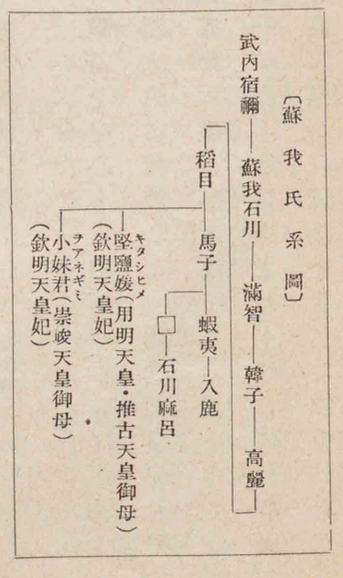
大臣と大連

大臣家

上古は、人々各その家職を世襲して皇室につかへまつり、家柄の高下により、自ら勢力にも强弱があつた。武内宿禰は、景行天皇以後、久しく朝廷につかへて大臣となり、その一族大い

大連家

に榮え、殊に蘇我氏が最も勢力を得た。大臣と並んで、大政をたすけ奉る大連は、仲哀天皇の時、大伴武持が始めて任ぜられ、そののち大伴・物部二氏が大連となり、いづれも名家で實力もあり、つひに大臣・大連兩家對立の姿をなすに至つた。



物部大連家の滅亡

蘇我氏の無道

佛教のわが國に傳はるや、大連物部氏は、これが禮拜に反對し、大臣蘇我馬子のために滅ぼされ、これから蘇我氏ひとり權をにぎることゝなつた。馬子の子蝦夷、孫入鹿に至り、無道の行ひ多く、殊に入鹿は、聖德太子の御子山背大兄王を攻めて、御一族を滅ぼし奉り、己が家を宮門と呼ぶなど、皇威をはばからなかつたので、やがて政道がみだれ、貴族專權の弊が甚しくなつた。

入鹿の無道

中臣鎌足の像
奈良縣多武峯談山神社所藏の畫像による。

蘇我大臣家の滅亡

かくて蘇我大臣家が亡び、皇威ますますかゞやくに至つた。

上古史大要

わが帝國は、はやく既に神代から、皇室を中心として形づくられ、國民は心を一にして皇業をたすけ奉り、國運次第に發展した。神武天皇が、大和に都をさだめられてから、第十三代成務天皇に至るまでこの地を中心として內治をとゝのへ給ひ、國內の統一が成り皇化あまねく地方に及び、民力も大いにのびた。されば次の仲哀天皇から以後充實した國力が自然

中臣鎌足の忠誠

この時に當り中臣鎌足は、深く蘇我氏の專權をいきどほり、英明の聞え高き中大兄皇子とはかり、皇極天皇の四年、入鹿を大極殿に誅したが、まもなく蝦夷も、その家を燒いて自殺した。

にあふれて、皇威は朝鮮半島にも及ぶに至り、百濟・任那などは、わが國の保護をうけたから、從つて彼我の交通もしげくなつた。その結果應神天皇以後、漢學・佛教・工藝など、大陸に發達した文化が盛に傳はり來り、わが國民はよくこれを採用して、國運の進歩をたすけた。かくて朝鮮半島の形勢がかはつて、その經營が次第にむづかしくなつたにもかゝはらず、わが國世運の進歩が著しく、殊に聖德太子や中大兄皇子など、英明にわたらせられた皇子がおはして、天皇をたすけ奉り、政治上・社會上に改新の歩を進められた。

年號
官制

第二篇 中古

第六章 大化の改新 律令の制定

改新の必要 皇極天皇について、御弟孝徳天皇が御立ちになり、中大兄皇子を皇太子とせられた。これまで家職を世襲して來た社會の制度は豪族が次第に多くの土地・人民を私有して、勢をほしいまゝにし、人材の進路をふさぎ、ひいて國家の統一をも妨げるやうな結果を生じた。こゝに於て大臣・大連兩家の滅亡を機とし、大いに新政を施し聖德太子の御志を全うし給ふことゝなつた。

新政の大要 孝徳天皇は、御即位の年始めて年號を定めて大化と稱し、新に官制を定め、内臣及び左大臣・右大臣を置いて百官をすべしめ、また地方の國造・縣主を廢して、新に國司・郡司を置き、いづれも世襲をやめ、人々の才能によりこれに任ずることゝした。ついで諸豪族の私有してゐた土地・人民を悉く朝廷に返上させ、これを公地公民とし、人口をしらべて戸籍をつくり、人毎に一定の田地(口分田)を授け、死すれば朝廷に收める班田收授の法を立て、民をして衣食に不足することなからしめた。租稅については、新に田地に課する租、公役に民をつかふ代りに米・布などを納めさせる庸・絹・綿など各地の產物をみつがしめる調の三種とし、國用をさゝへた。これ等の制度は、中大兄皇子が内臣中臣鎌足とはかり、さきに唐に留學して歸朝した僧旻・高向玄理を用ひ、おもに隋唐の風を參考として立てられたものであつた。

戸籍
班田收授
稅制

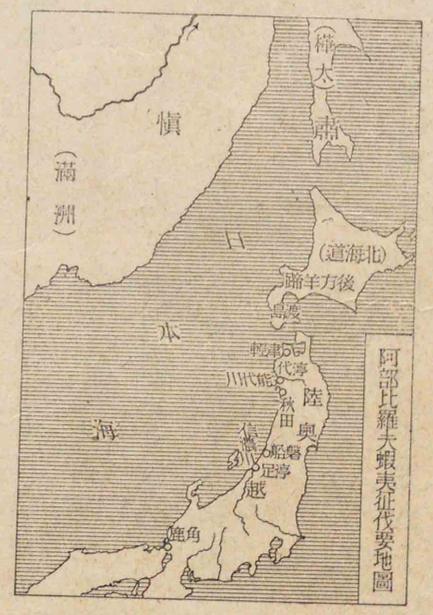
政治の一變 大化の新政は、肇國以來の大革新で、中大兄皇子は、『天に雙つの日なく、國に二人の王なし。この故に天下を兼併せて、萬民を使ふべきはたゞ天皇のみ。』と仰せられ、人々にさきだち、その御所有の土地・人民を朝廷にたてまつり、新政の實行を促し給う

集權統一

大化の改新

た。されば世のさまが一變し、天皇を中心として集權統一の實が擧げられ、皇祖神勅の御精神は、いよいよ明かにせられた。世にこれを大化の改新といふ。しかもみなこれ國利民福を進めんがためで、國民にいささかも不便なことがあつてはならないとの大御心から、詔して朝廷に鐘をかけ箱を置かしめ、民をして思ふ所を訴へしめ給うた。

阿倍比羅夫蝦夷征伐要地圖



東北地方の開發

孝徳天皇

齊明天皇

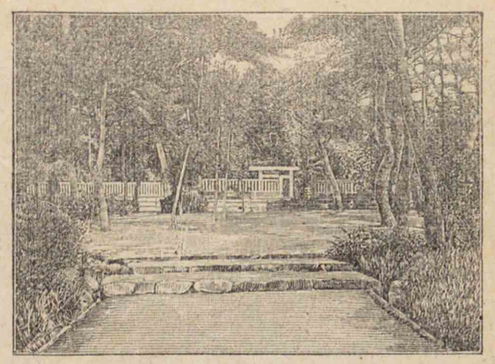
阿倍比羅夫

皇の崩後、皇極天皇が再び御位に卽かれ、齊明天皇と申し、中大兄皇子が皇太子として、大政を御たすけになつた。天皇の御代、阿倍比羅夫は、兵船をとゝのへ、今の秋田・津輕から北海道地方の蝦夷を從へ、各地に郡司を置き、蝦夷人をも選んでこれに任じた。比羅夫は、更に肅愼をも討つたが、肅愼は今の樺太から滿洲國邊にかけて住んでゐたもので、この後日本海方面の蝦夷はおだやかになり、持統天皇の御代には、佛敎を信じて僧となるものもあらはれた。

肅愼

天智天皇御陵

京都市東山區山科にある。

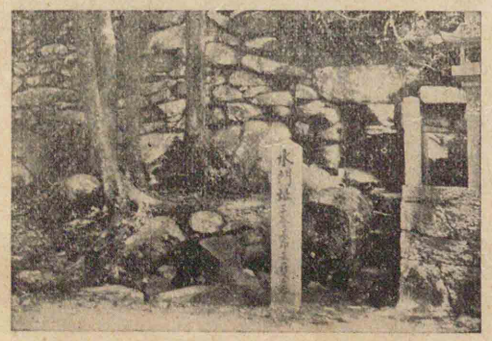


基山城址

佐賀縣三養基郡にあり太宰府の南方に當る。天智天皇の御代に西國の防備のため築かれたものである。

天智天皇の御政治

これよりさき朝鮮半島に於ては、新羅が次第に强盛となり、欽明天皇の御代、任那を攻めて日本府を滅ぼし、齊明天皇の御代には、唐の援をかりて、百濟を攻略せんとした。天皇は百濟の請を許し、これを援けんとして筑前の行



談山神社　奈良縣多武峯にある。藤原鎌足をまつる別格官幣社である。

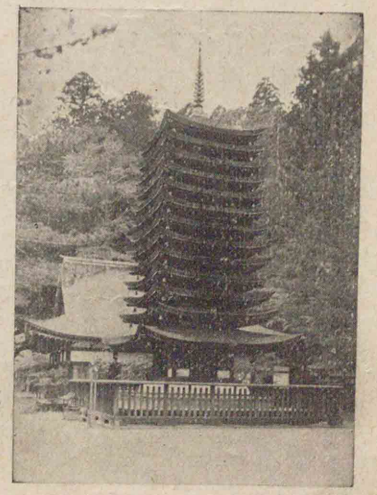
朝鮮經營の中止

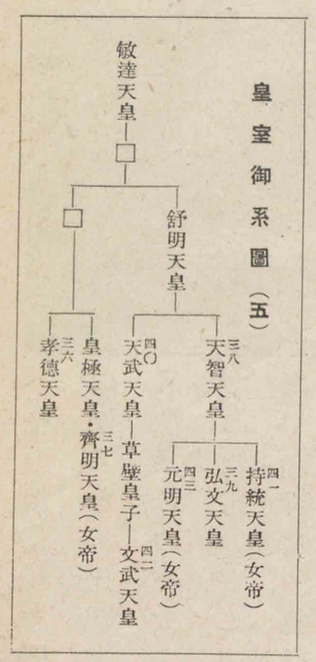
近江令

學校

國防・外交

宮に崩ぜられ、中大兄皇子が即位せられ、天智天皇と申す。天皇は時勢にかんがみ、朝鮮半島の經營を中止せられ、大いに内治をとゝのへ給うた。即ち都を近江の大津にうつし、中臣鎌足に命じて近江令を修めしめ、學校を起して、改新の大業を進められ、又、海外の形勢に鑑み、國防に御心を注ぎ給ひ、水城等を築いて西國の防備を固め、唐と好を修めて國交を復されたから、盛にその文化が傳來した。時に多年天皇をたすけ奉つた鎌足が、病にかゝつたので、天皇は深くその

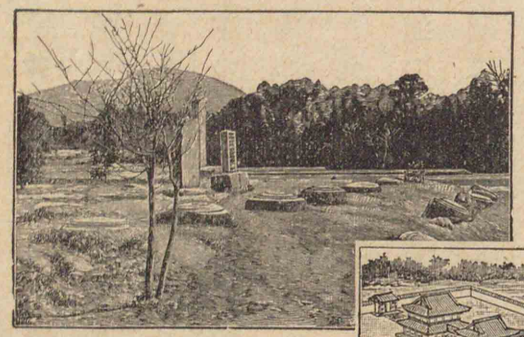


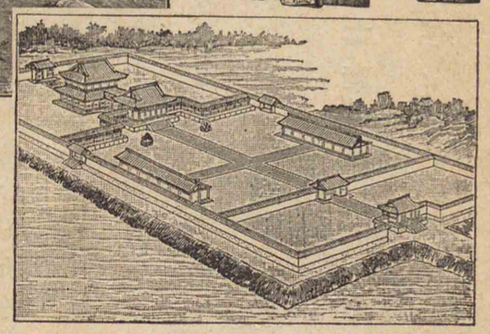


藤原氏

太宰府　太宰府は今の福岡縣筑紫郡太宰府町附近に置かれた。正殿・都府樓の跡と瓦片とを示したものである。復原圖は後世の想像畫である。

律令





律令といふ。律は刑法、令は官制税法などを定め、主として唐の制度を酌み採り、わが國風をかんがへ合せて成つたもので、天皇を中心とする集權統一の制度が確立し、永くわが政令の根本となつた。

大寶律令　文武天皇に至り、忍壁親王・藤原不比等の子鎌足に命じ、天智天皇の御定めになつた法令の改正に當らしめ、大寶元年にできあがつた。世に大寶

功勞を賞して、藤原の氏を賜ひ、その子孫が朝廷に仕へて、大いに榮えることゝなつた。

官制

太政官印
大さ方七糎餘である。

兵制

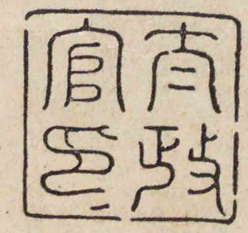
學制

刑法

元明天皇

律令の大要

大寶令によれば、中央政府には神祇官・太政官の二官があり、神祇官は神を祭ることをつかさどり、わが國敬神の義をあらはし、太政官は政務をつかさどり、太政大臣以下の官を置き、中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內の八省をすべた。また諸國には國司・郡司を置き、九州には太宰府を置いて、九州の政治や外國交通のことをつかさどらせた。この外徵兵の制を定め、京に衞府、諸國に軍團を置き、學校は官吏養成を目的とし、京に大學、諸國に國學を設けて、身分あるものゝ子弟を入學せしめ、刑には笞・杖・徒・流・死の五種があり、特に君父に對する罪を重くして、忠孝の道を勵ました。



第七章　奈良の都

奈良の都

四三 文武天皇崩じて、御母元明天皇位につき給ふ。この頃、政令は中央集權の制となり、また海外との交通も開けて來たので、天皇は都を奈良にさだめて、帝都を經營せられた。即ち今の奈良市の西方に當り、唐の都城の制を參考し、一層規模を整備し、四方に羅城をめぐらし、正北部に大內裏を設けて、宮城と諸官省とを置き、その南に朱雀大路を通じて左京・右京に分ち、これを平城京といひ、この

平城京

皇室御系圖（六）

- 持統天皇（女帝）
- 天智天皇
  - 弘文天皇
  - 四三 元明天皇（文武天皇御母）（女帝）
    - 施基皇子
      - 四九 光仁天皇
- 舒明天皇
  - 天武天皇
    - 草壁皇子
      - 四四 元正天皇（女帝）
      - 四二 文武天皇
        - 四五 聖武天皇
          - 四六 孝謙天皇・四八 稱德天皇（女帝）
    - 舍人親王
      - 四七 淳仁天皇
    - 忍壁親王

後、光仁（四九）天皇まで七代・七十餘年間の帝都となつた。故に世にこの時代を奈良時代といふ。

聖武天皇

聖武（四九）天皇は、あつく佛教を信じ給ひ、これをひろめて國土を安らかにせんとおぼしめされ、國毎に國分寺・國分尼寺を建て、特に奈良には東大寺をつくり、壯大な大佛を安置し給うた。御在位二十五年の間、その御政治は仁愛を旨とせられ、奈良時代の極盛期であつた。

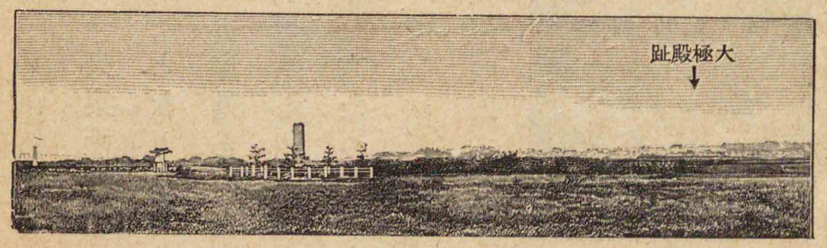
東大寺・大佛　東大寺の大佛殿は即ちその金堂で高さ四七米、後世修造に當り縮小せられたほどである。今の大佛は元禄時代に修復したものであつて、高さ一六米餘に及ぶ。

聖武天皇國分寺・國分尼寺

平城京大極殿址　奈良市の西生駒郡都跡村にある。田圃の間に散在する地點が大極殿の址で、俗に芝地ともいひ、大黒面の芝とも高い小丘をなす。

光明皇后

聖武天皇の皇后は、藤原不比等の女で、光明（クワウミヤウ）皇后と申す。皇后もあつく佛教を奉じ給ひ、御慈悲（ジヒ）の



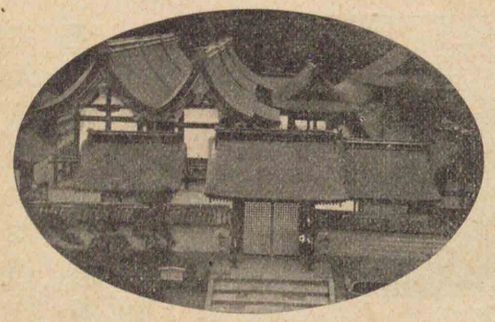
施藥院・悲田院

十一面觀世音　奈良市外の法華寺に安置、光明皇后の御姿をうつして造つたものと傳へられる。

光明皇后御筆蹟　皇后は藤原不比等の第三子で比等おはしたかから藤三娘と書れたのである。

宇佐神宮　大分縣宇佐町にある官幣大社で應神天皇等をまつる。正面に見えるのが西門で、西方に見えるのが本殿、後方に向つて右方に見えるのが拜殿で、神社の西方から見たものである。

御心深くおはしまし、宮中に施藥（セヤク）院、都には悲田（ヒデン）院を置き、貧しい病者や孤兒（コジ）・老病者などを救はせ給うた。藤原氏の氏寺なる奈良の興福寺も、この頃から次第に榮えた。



和氣清麻呂

かくの如く佛教は、皇室のあつい保護をうけて、大いに興つた。そしてインド・支那等から名僧が渡來し、わが國でも行基（ギヤウキ）の如きは、學德共にすぐれ、ひろく諸國をめぐり、佛教をひろめ、公益に力をつくした。しかし上下の尊信をうけるにつれ、その分を忘れてわがまゝな僧侶も出で、稱德天皇の御代、僧

藤三娘

道鏡
和氣清麻呂
和氣清麻呂の墓
京都の高雄神護寺にある。
隼人塚
鹿兒島縣國分驛附近にあるもので古來隼人の塚と稱し石塔・石像がある。
隼人
南方諸島

道鏡は天位にのぼらうとの野望をいだくに至つた。幸に忠誠の心深き和氣清麻呂が、大命をうけて宇佐八幡宮にいたり、神教をうけて歸り、一擧にその野心をくぢき、我が國體の本義を明かにした。ついで、光仁天皇は、道鏡をおとして下野に流し、佛教の隆盛により、國用不足の後をうけ、深く政治に留意し給ひ、民力の休養をはかり給うた。

皇化の普及

さきに元正天皇の時、九州南部にゐる隼人の亂を平げたが、この種族には朝廷に仕へて、宮門を守る者もあつた。またこの頃までに、今の種子島から沖縄諸島も、我が國に服し、ひとしく皇恩に浴するに至つた。たゞ新羅は勢をたのみ、とかく無禮のふるまひが多く、淳仁天皇は、これを征せんとして果されなかつたが、今の滿洲國に起つた渤海は、聖武天皇の御代から、たびたび使者をつかはして來貢し、以て平安時代の初めに及んだ。

新羅
渤海
南都六宗

第八章　奈良時代の文化

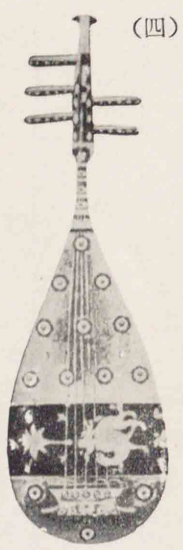
隋唐文化の影響

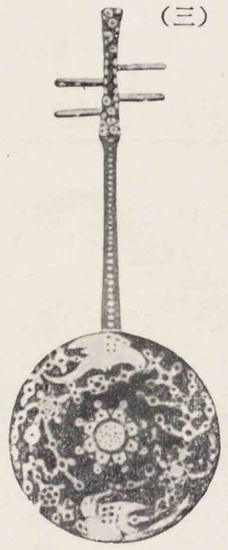
奈良時代は、遣唐使のもたらし歸つた隋唐文化の影響をうけ、わが文化が著しく發達した時代である。當時唐は、世界の強大國で、その文化が頗る發達してゐたから、東洋諸國はひろく唐の影響をうけたのであつた。

美術・工藝

聖武天皇の御代を中心として榮えた佛教は、唐から傳へられた法相宗・華嚴宗等のいはゆる南都六宗で、寺院は七堂伽藍の美觀をそなへ、建築・彫刻など美術・工藝が著しく進歩した。時

奈良時代の文化


(四)


(三)

(一)

(二)

(六)　(五)

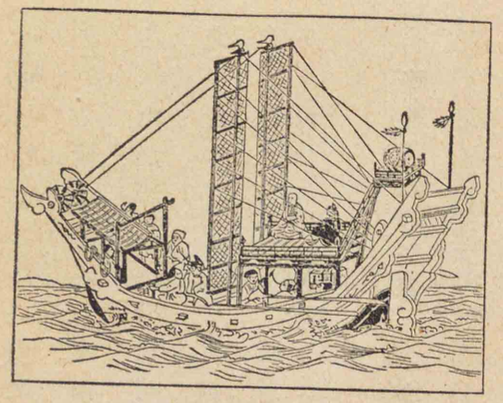
天平時代

藥師三尊

奈良縣郡山町近郊の藥師寺金堂にの安置せられるものは嚴密にいへば奈良時代に持統天皇の御代にできあがつた物として考へる。傳來の初唐の樣式を採つてわたしもの世の滿圓熟の國で醇流の界傑作鑄銅品である。

遣唐使の船

弘法大師行狀繪卷による。帆の特異なべく、ゝ態を見るべく、ゝ橋船の上にある二人の遣唐使は空海とあるとは體船の式を支那船の合の式をとかり割つた。



の年號により、美術史上この時代を天平時代といふ。東大寺・藥師寺・唐招提寺などはもつとも榮え、圓滿豐麗古今第一と稱せられる多くの佛像を安置し、とくに東大寺の境內にある正倉院は、聖武天皇の御物を中心とし、織物・刺繡・漆器・硝子器など、當時の代表的な工藝品ををさめ、世界にもあまり例のない寶庫として名高い。

文學の發達

唐風の影響は漢文學を發

（一）は紺琉璃盃で紺色の硝子製のもの、口徑約八五糎（二寸八分）高さ一一糎餘（三寸七分）で、千年以前に製作せられた硝子器は世界でも稀有のものであり、（二）は螺鈿裏圓鏡で圓い銅鏡の裏を螺鈿貝殼の眞珠をなす部分を細かくきり漆にはめて飾りとするもの）で裝飾したもの、（三）は螺鈿紫檀阮咸で全長一米、胴徑三九糎餘（一尺三寸）、紫檀の胴に龜甲と貝とを交へ用ひて裝飾した樂器、（四）は螺鈿紫檀五絃琵琶で全長約一〇八・五糎（三尺五寸八分）、横徑表面約三〇糎（一尺）、貝と龜甲とを交へ用ひた螺鈿で、龜甲の下には彩文があり、いづれも正倉院御物である。（五）は奈良時代の男子の朝服（朝廷の公事に着用するもの）、（六）は女子の盛裝を示したものでそのもてる樂器は箜篌（一に百濟琴）といふ琴の一種である。

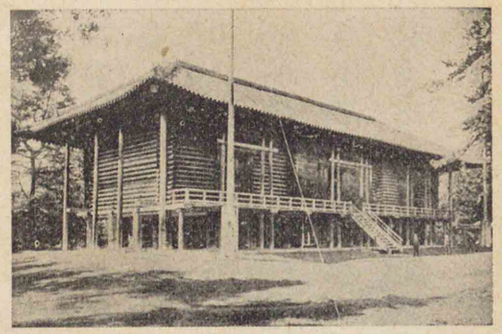
正倉院

奈良の東大寺にある。三角材をたゝみ重ねてつくつたいはゆる校倉造である。三倉に分れて御物が藏められてゐる。

和歌

柿本人麻呂の像

後水尾天皇の御宸筆の像を摸したもので歌道の上から長く尊ばれたものであつた。



達せしめ、有名な學者を出した。吉備眞備・阿倍仲麻呂は、元正天皇の御代唐に留學し、その文名唐の大家と並び稱せられた。やゝ後れて石上宅嗣は、わが國最初の圖書館芸亭を開き、淡海三船は懷風藻といふ詩集をつくつた。和歌も大いに發達し、この時代にさきだち、歌聖とよばれた柿本人麻呂が出で、ついでこの時代に山部赤人・大伴家持などがあらはれ、これ等の人々の歌を集めて、萬葉集がつくられた。わが國最初の歌集で、雄健な歌が多いが、漢字をあてゝ書きあらはされ、世に萬葉假名といふ。

海行者美都久屍、山行者草牟須屍、大皇乃敝爾

古事記
風土記
日本書紀

許曾死米　可弊里見波勢自。（海行かばみづくかばね　山行かば草むすかばね　大君の邊にこそ死なめ　かへりみはせじ）　大伴家持

圖書の編修　この頃漢文が巧みに綴られ、また漢字を用ひて國語をあらはすことが行はれたので、種々の圖書が編修せられた。元明天皇は、太安麻呂に命じて、稗田阿禮のそらんじてゐた古史（上古から推古天皇まで）の傳へを書取らしめられた。これ卽ち古事記で、わが國に現存する最古の史書である。ついで諸國に勅して、國々の形勢・物產・古傳などを記した風土記をたてまつらしめた。元正天皇に至り舍人親王に勅し、諸家に傳はる古記により、日本書紀を撰ばしめられたが、神代から持統天皇までの古史を漢文で書いたもので、この後、平安時代の中頃までに編修せられた續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄と併せて六國史といひ、わが國の正史として尊ばれる。特に日本書紀は、朝廷に於て屢〻進講のことあり、我

鑛業
和同開珎
農蠶業
奈良時代の男女の風俗
正倉院御物の尺八の繪によつたもので唐風化せられた當時の風俗をしのぶに足るものである。

が國體を明かにするものとして、最も重んじられた。

產業の進步　大寶令では、國民が私に銅・鐵などを採ることを許したが、元明天皇の御代、武藏國秩父から和銅を獻じ、聖武天皇の御代には陸奥（今の宮城）から黃金を出した。されば始めて和同開珎といふ貨幣をつくり、その流通をはかり、市を中心とする商業の發達をたすけた。更に元明天皇は、民に陸田を開き麥類を植ゑしめ、また養蠶をすゝめ、錦を織ることを敎へ給ひ、聖武天皇は開墾地の私有を許して大いに新田を開かれた。光仁天皇の御代には常平倉を設け、穀物をたくはへて凶作にそなへ、產業が次第に發達した。

風俗　かくて世の開明におもむくと共に、風俗も一般に華麗になつた。衣服は男女共に袖ひろく

桓武天皇

平安京

裾長く、模様も花やかになり、官吏・貴族などの家は、寺院と同じく屋根を碧瓦でふき、柱を赤く塗るなど漸く美しくなつた。しかし唉く花の匂ふが如き都の盛況にひきかへ、地方の文化は未だ開けなかつた。

第九章　平安京

平安京

光仁天皇[四九]について、御子桓武天皇[五〇]が御立ちになつた。天皇は御英明にましまし、國政を一新して國運の發展をはからんとおぼしめされ、和氣清麻呂等の議を用ひ、延暦十三年、都を今の京都の地にうつし、これを平安(イアン)京と稱し給うた。新都は平

皇室御系圖（七）

- 光仁天皇
  - 桓武天皇[五〇]
    - 平城天皇[五一]
    - 嵯峨天皇[五二]
      - 淳和天皇[五三]
      - 恒貞親王（ツネサダ）
      - 仁明天皇[五四]
        - 文德天皇[五五]
          - 惟喬親王（コレタカ）
          - 清和天皇[五六]
            - 陽成天皇[五七]
            - 光孝天皇[五八]
              - 宇多天皇[五九]
                - 醍醐天皇[六〇]
                - 齊世親王（トキヨ）

平安京圖
1：75,000
0 5 10 15町

大内裏圖

内裏圖

桓武天皇御像

東京帝室博物館所藏の御畫像による。カンムリハウカマ冠・袍・袴・キョシヤク裾・笏など束帶の御裝ひである。

平安時代

平安神宮

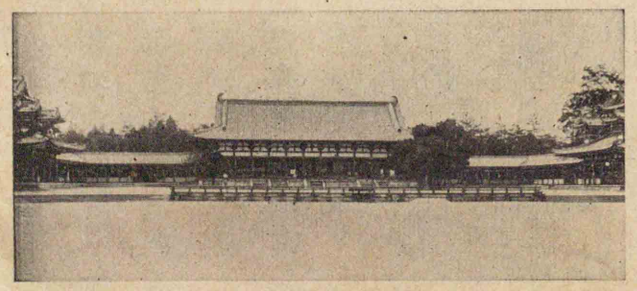
京都市にある官幣大社、桓武天皇をまつる。中央が拜殿、東は青龍、西は白虎の樓で古の大極殿（天皇政をきき給ふ所）を模したものである。

鎭守府坂上田村麻呂

城京よりも規模がやゝ大きく、これから明治二年に至るまで、凡そ一千七十五年の間、歷代の天皇概ねこゝにおはし、そのうち初め四百年間は、政令がこの都から出たので、世にこれを平安時代といふ。

蝦夷の平定

これよりさき蝦夷に對しては、聖武天皇の御代に、陸奥宮城に多賀城を築いて鎭守府を置き、また出羽今の秋田に秋田城をつくつて、これに備へた。桓武天皇に至り、武勇のほまれ高き、坂上田村麻呂阿知使主の子孫を征夷大將軍とし、これを鎭めしめた。田村麻呂は進んで蝦夷の根



膽澤城址

岩手縣膽澤郡佐倉河村にある。現に方八町と稱せられ平城である。

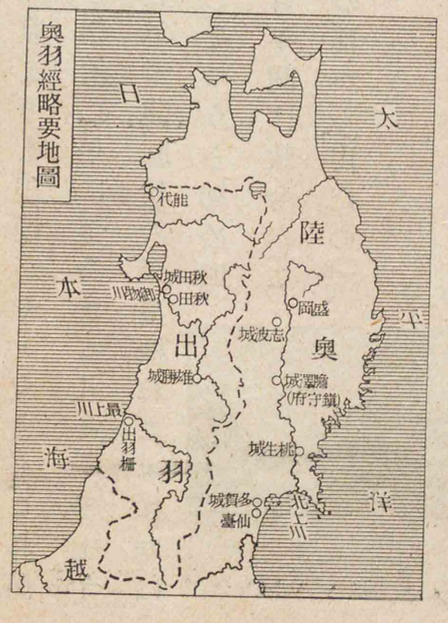
藏人所

檢非違使

奥羽經略要地圖

據地をつき、膽澤城を築いてこれに備へた。こに於て蝦夷の勢が衰へ、後この城に鎮守府を進め、蝦夷を治めたから、北邊のわづらひも、漸くその跡を絶つた。

嵯峨天皇　嵯峨天皇に至り、時勢の變化を察し給ひ、新に藏人所を宮中に置き、重要書類をあつかはせ、また檢非違使を置いて、京都の警察裁判のことをつかさどらしめた。これ等を令外の官といひ、律令制度もおひおひに改められた。



第十章　教學の刷新

教學の刷新　桓武天皇は、都を平安京にうつされて、國政を刷新し給ひ、平城天皇を經て嵯峨天皇に至り、殊に御心を政治にとゞめ給ひ、深く學藝の發達を御すゝめになつた。されば宗教・學藝も亦、かゝる時代の風をうけて隆盛を極め、舊風を一新して最もかゞやかしい發達をとげた。

佛教の新宗派　平安時代の初め、佛教界には最澄傳教大師・空海弘法大師などの高僧が出で、新宗派を傳へ、奈良時代の佛教の弊風を刷新した。最澄は、桓武天皇の御代、比叡山滋賀に延暦寺を起し、後、唐に入り、歸朝して天台宗を傳へた。空海は、最澄と共に唐に渡り、歸朝して眞言宗を傳へ、紀伊和歌山の高野山に金剛峯寺を開き、また嵯峨天皇から、京都の教王護國寺今の東寺を賜はつた。空海は博學多能の人で、

天台宗
眞言宗

書畫・詩文に長じ、學校を建てゝ子弟を教育し、諸國をめぐり公益事業にも力をつくし、上下の尊信があつかつた。この二宗派は、いづれも人々に尊信せられ、奈良時代に起つた神佛調和の思想を進め、やがて神佛同體の説さへも起つた。

神佛同體説

學藝の發達

平安時代の初期には、やはり漢文學が盛に行はれ、殊に嵯峨天皇は最も學藝を好ませられ、詩文・書道をよくし給ひ、勅して詩集を撰ばしめ給うた。されば小野篁・都良香など、詩文の名家があらはれた。大學の制も備はつたが、藤原氏の勸學院・橘氏の學館院など、貴族が特にその一族のために私立學校をも起すに至つた。

漢文學

學校

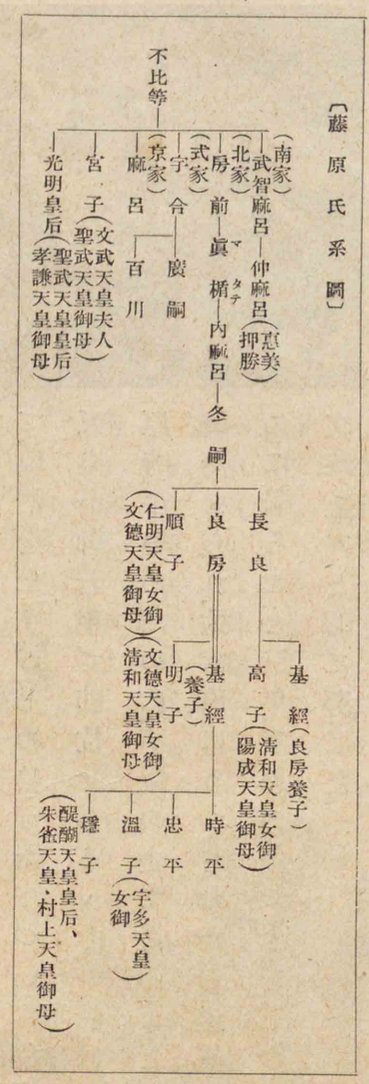
第十一章　藤原氏の攝關政治

藤原氏の榮え

藤原氏は鎌足・不比等の功により、一族が次第に榮えて、朝廷に重く用ひられ、つひに良房に至り、文德天皇の御代、太政大臣に任ぜられ、ついで外戚として清和天皇の攝政となつた。人臣で太政大臣や攝政となつたのは、良房が始めである。宇多天皇に至り、詔して天下大小の政務は、まづ藤原基經に白し、その手を經て上奏せしむることゝし給ひ、關白の稱起り、この後藤原氏は、代々皇室の外戚として、天皇御幼少の間は攝政となり、御成年の後は關白として、重要な政務にあづかり、一門の勢力を固め、大い

良房の攝政

基經の關白



宇多天皇

配所の菅公

去年の今夜清涼に侍したことを思ひ紫宸の配所で恩賜の御衣を拜戴しつゝ皇恩をしのぶ、北野天神縁起絵巻による。

時平の讒奏

醍醐天皇

延喜・天暦の治

醍醐天皇は、御成長の後親しく政をとり、學問をすゝめ給ひ、また御仁愛の心深くおはし、ある寒夜に御衣をぬがれて、貧しい民の寒苦を思ひやらせ給うた。 されば都は花の如く榮に權を振ふことゝなつた。

菅原道眞

宇多天皇は、藤原氏の勢力を抑へんとおぼしめされ、基經の薨後は關白を置かず、學者の家から菅原道眞を登用して、政治をたすけしめ給うた。 ついで醍醐天皇が、御若年で即位せらるゝや、道眞は藤原時平等のために、不臣の企てあることを讒奏せられ、太宰府にうつされた。 道眞こに居ること三年、皇恩のあつきをしのび、文筆を友として薨じた。

延喜の聖代

榎寺址

福岡縣太宰府町にある菅公居住の跡といはる都府の南館である。

醍醐天皇御像

京都府醍醐三寶院にある御畫像による。

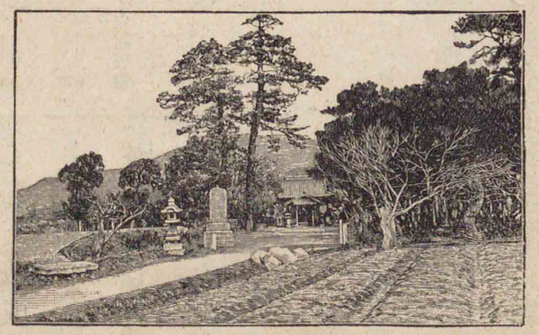
天暦の治

藤原道長

えたので、世にこの御代を延喜の聖代と稱し奉る。 ついで村上天皇も、亦深く御心を民政に用ひ給ひ、ある時老臣が、延喜の御代とくらべて『たゞ主殿寮が多くの燈火を用ひ、率分堂の前に草が生えるやうになりました。』と奏した直言を愛し給ひ、一層政治に御勵みになつた。 されば世よく治まり、延喜の御代と並べ稱して、天暦の治と申し奉る。

藤原氏の專權

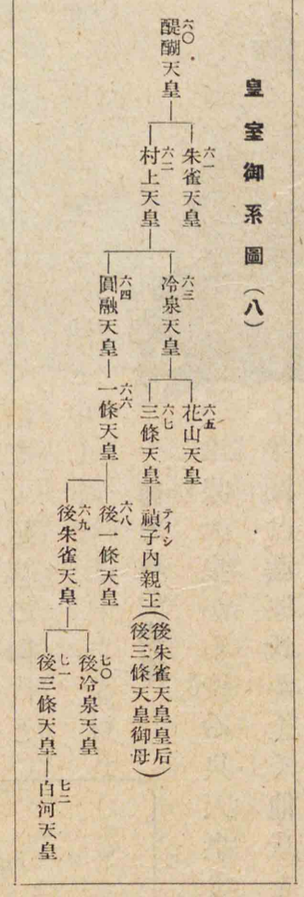
冷泉天皇から後冷泉天皇まで、八代百餘年間は、藤原氏が全く他氏をしりぞけ、政治を私して專權を振つた。 殊に道長は、才器人にすぐれ、榮華の極に達し、『この



藤原氏の極盛

世をばわが世とぞ思ふもち月のかけたることもなしと思へば。』と詠じ、これをほこつた。かくて多くの土地を領有し、その富は皇室をもしのぎ、善美をつくした法成寺を建て、諸國に令してこれが工事をたすけしめ、また子頼通も、宇治に平等院をいとなみ、專横のことが少くなかつた。

皇室御系圖（八）



第十二章　平安時代の文化

國風文化の發達

平安時代に入るや、外來の文化も漸次國風化せられる傾向をあらはしたが、殊に宇多天皇の御代、菅原道眞の議により、遣唐使を廢止し、公の交通が絶え、ついで醍醐天皇の御代に唐が亡びたので、支那風の影響も衰へ、大いに國風をあらはすに至つた。概して太平久しくうちつゞき、貴族が中心勢力をなしたので、優美で柔弱な風が著しかつた。

遣唐使の廢止

國文學の隆盛

平安時代に入り、假名が次第に發達し、國語を書きしるすことが容易になつたので、延喜の頃から國文學の發達が目立つて來た。即ち紀貫之は歌文をよくし、土佐日記を著はし、また醍醐天皇の命を奉じ、古今和歌集を撰んで上り、この後和歌勅撰のことが屢々行はれた。藤原氏が競うてその女を宮中に入内せしめんとするや、才女を選んでこれに侍せしめたから、自ら才女を輩出せしめた。中にも一條

假名

國文學

紫式部の像

滋賀縣石山寺所藏の畫像によつたもので、この時代の女子の正裝たる十二單衣をつけてゐる。

勅撰和歌集

女流文學

天皇の御代に紫式部は源氏物語といふ小説を著はし、清少納言は枕草子といふ隨筆を書きのこし、永く國文學の模範と仰がれる。この外才女の名を後世に殘すものが少くない。

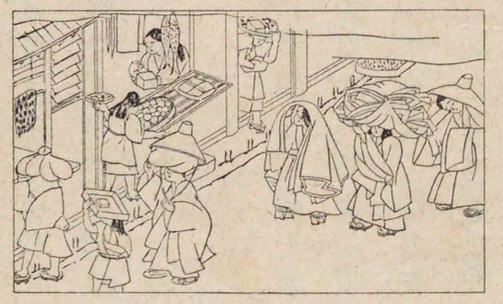
美術工藝

美術工藝も、溫和・優美でけだかい國風をあらはした。佛教も次第に國風化し、花山天皇の頃、惠心僧都が出て淨土教の基を開き貴族は盛に阿彌陀佛を信仰し、その御堂を建てることが行はれた。藤原頼通の建てた宇治の平等院は、最も壯麗なものゝ一つで、今はその御堂である鳳凰堂が殘つてゐる。その趣ある建築は、名工定朝のつくつた本尊阿彌陀佛宅磨爲成のかいた壁畫極樂の圖や、その他の裝飾と共に當時の最もすぐれた藝術である。

淨土教
鳳凰堂

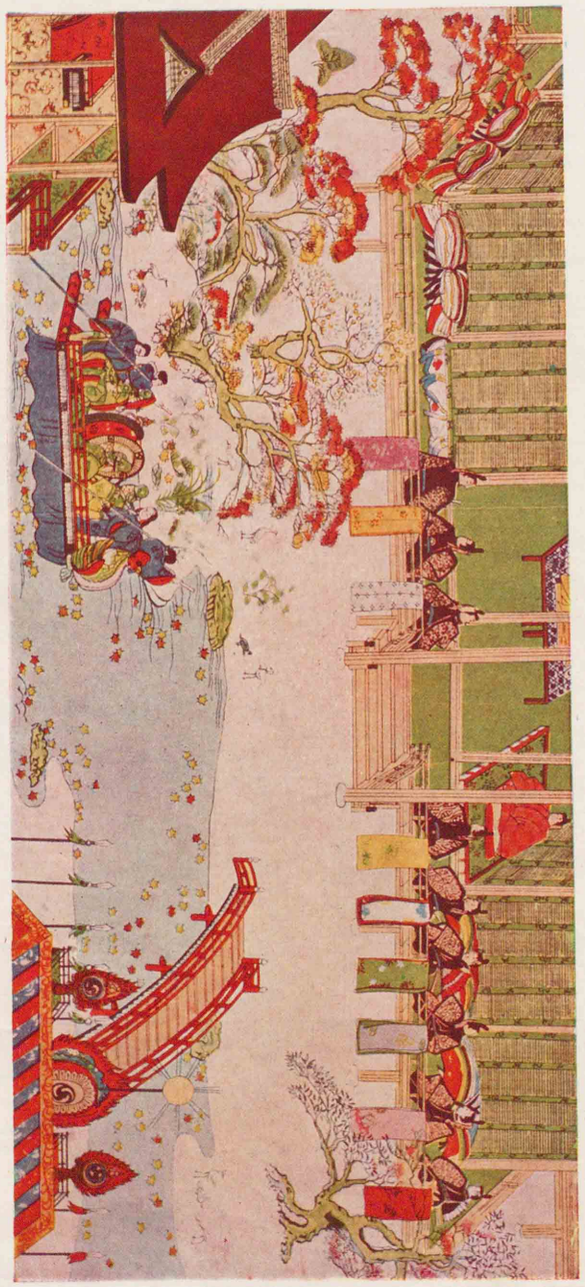
風俗

一般に京都の貴族は、榮華にふけり風



店屋の有樣

東京帝室博物館所藏扇面寫經に依る。平安時代の市場を示したものである。中央に百人一首の類、左方に八百屋・魚屋・革細工・薄衣・帽子・笠・荷物・運搬人・婦人・子供・外出・貴族・市・朝鮮人・中央つゞきの頭巾・風呂敷・何せ今日は何を思はせる。

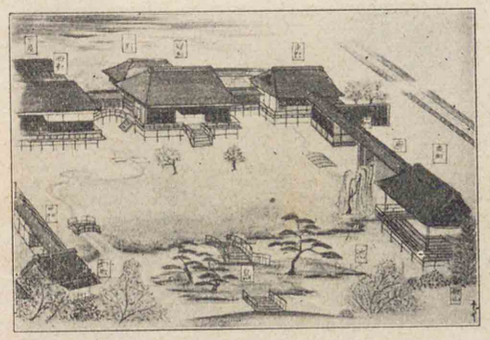


藤原時代貴族の遊樂

藤原頼通の邸を中心とする貴族生活の有様を描いた想像畫である。正面の寢殿に居並ぶ公卿・女房の華麗な服裝、向つて左方の隅にある釣殿、やゝ隔たつて樂人をのせた鷁首の舟、中島に設けられた幄舍の屋根、舞臺などがわづかに見え、平安時代貴族の優雅でのどかな生活が偲ばれる。

寢殿造
衣服
遊藝
農業
工藝
商業貿易

寢殿造の圖
唐風の建築から國風化したもので平安時代の貴族の邸宅、中央の寢殿が主人の正室である。



流遊樂を事とした。その邸宅は寢殿造で、庭園に花木・泉池を配し、衣服は華美を競ひ、男子の束帶、女子の十二單に至つては、優美のかぎりをつくしたもので、詩歌・管絃・碁・雙六などの遊びにふけり、文弱に流れ風儀もみだれ、一般に生活は不健全であつた。

産業

農業を發達せしめた。[五〇] 桓武天皇の御代に綿・[五一] 嵯峨天皇の御代には茶が輸入せられて栽培せられた。貴族の榮華につれて、各種の工藝が進み、殊に染織・蒔繪など華麗を極め、商業はやはり市を中心とし、店屋(小賣)・邸家(問屋に當る)があり、支那・朝鮮との貿易も行はれ、難波(大阪)・兵庫・博多の港が榮えた。

第十三章　武士の興起

地方政治みだる

藤原氏が權を專らにするや、律令の制は次第にゆるみ、班田收授の法も、陽成天皇の頃から殆ど空文となり、勢力ある貴族や大社寺は、多くの土地を私有し、莊園と稱して國司の支配をうけず、租稅をまぬがれるやうになつた。

莊園

地方政治みだる

六孫王神社　京都市にあり源經基をまつる。

加ふるに藤原氏以下の朝臣は、一身一家の榮えをはかり、政治を怠りがちであつたから、國司は私利をむさぼり、地方の政治がみだれて、人民大いに苦しみ、盜賊が各地に出沒するに至つた。そして兵制もみだれ、官兵はこれを鎭めることができなかつたので、地方の地主は武を練り兵をたくはへて變に備へた。これが武士の起りである。

武士の起

これよりさき桓武天皇の頃から、皇族に氏を賜はり、臣下に列せられることが多く行はれたが、中にも桓武天皇から出た平氏、清和天皇から出た源氏が主なるもので、これ等の二氏は都で出世ができない名族と共に、多く地方官となり、つひにその地方に土着して、土地・人民を私有し、大いに勢を張るに至つた。武門・武士は實にかかる時勢が生んだもので、政令がゆるむにつれて、次第に專横となり、つひに各地に亂を起すに至つた。

平氏

源氏

〔平氏略系〕

- 平高望
  - 國香 — 貞盛
  - 良將
    - 將門
    - 將平
  - 良文 — 忠頼 — 忠常（千葉氏の祖）

承平・天慶の亂

平將門の亂（承平の亂）

平高望は、上總の國司となり、一族が東國にはびこつた。その孫將門に至り、朱雀天皇の承平年間、同族と權を爭ひ、伯父國香を殺し、弟將平の諫をきかず、つひに下總の猿島で亂を起したが、天慶三年同族

藤原純友の亂（天慶の亂）

高麗

刀伊

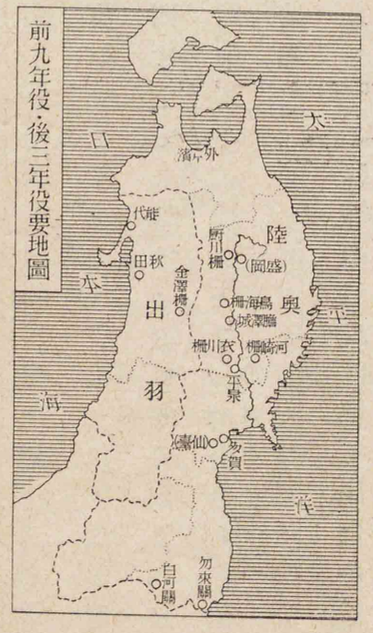
藤原隆家

前九年役・後三年役要地圖

の貞盛が、藤原秀郷と共に攻めてこれを滅ぼした。伊豫（愛媛）の地方官であつた藤原純友が同じ頃瀬戸内海の海賊をひきゐてそむいたので、朝廷は小野好古・源經基を遣はし、これを討平げしめた。世に將門・純友の亂を承平・天慶の亂といひ、武士の勢力が漸く重きをなすに至つた。

刀伊の入寇

これよりさき朝鮮半島では、醍醐天皇の御代、王建といふもの、今の開城に據り、高麗といふ國を立て、つひに新羅を滅ぼした。この頃滿洲には遼が起つて渤海を滅ぼし高麗は遼と戰つて敗れ、一條天皇の御代には、遼の屬國となつた。ついで後一條天皇の御代刀伊の賊が高麗を經てわが國に來寇し壹岐・對馬・長崎から筑前（福岡）にせまつた。時に太宰府の役人であつた藤原隆家（道長の甥で菊池氏の祖）・大藏種材等九州の武士をひきゐて奮戰しやうやく追ひはらつた。刀伊は當時



遼に屬して、日本海北岸の地方に住んでゐた女眞（ジョシン）族である。

義家伏兵を破る

池田侯爵家所藏後三年合戰繪卷によるもの。雁行のみだれるのを見て伏兵あることを知りこれを討破ることを示したものである。

前九年・後三年の役

後冷泉（ゴレイゼイ）天皇の時、陸奥の豪族安倍頼時（アベヨリトキ）、その子貞任（サダトウ）等が、衣川館（コロモガハノタテ）岩手により、亂を起した。この時陸奥守源頼義（ヨリヨシ）は、その子義家と共に攻めて頼時を殺し、ついで出羽の豪族清原武則（キヨハラタケノリ）の援（タスケ）を得て、貞任を厨川柵（クリヤガハノサク）に圍み、これを攻め滅ぼした。この戰を前九年の役といふ。武則は功により、鎮守府將軍に任ぜられ、安倍氏の舊領を併せ領したが、白河天皇の御代に、その孫眞衡（サネヒラ）は、一族の武衡と爭ひ奥羽がまた亂れた。堀河天皇の御代、陸奥守源義家は、弟義光及び藤原清衡と共にその亂を平げた。これを後三年の役といふ。

前九年の役

後三年の役

〔清原・藤原氏系圖〕

- 清原武則
  - 武貞
    - 眞衡
  - 武衡
  - 家衡
- 安倍頼時
  - 女
    - 藤原經清
      - 清衡
        - 基衡
          - 秀衡
          - 泰衡

源氏と東國

天皇親政

記錄所

武士の興起　かくて武士はよく地方の治安を保ち、質實を旨として、主從互に助け合ひ、武士的精神をきたへて、その勢漸くあがつた。源氏は頼義・義家の父子が東國に恩威をしき、殊に後三年の役に、朝廷からは、恩賞がなかつたので、義家は私財を出して部下を賞したから、東國に於ける源氏の勢が拔くべからざるものとなり、陸奥では藤原清衡の子孫が榮えた。

第十四章　院政　源平二氏の興起

後三條天皇　後三條天皇の御母は、三條天皇の皇女におはしましたので、英明の御性質をもつて政を親らし給うたから、藤原氏の勢力が抑へられた。天皇は太政官に記錄所を設けて、莊園を整理し給ひ、また國司の重任等を禁じて、政治の刷新をはかり、親ら質素を守つて奢侈の風を正し給ふなど、ひたすら善政を施された。

白河天皇

院政

僧兵

東京帝室博物館風俗人形による。手に薙刀をもち頭をクワウケサで包んでゐる。素絹の下裏頭として袈裟に腹卷をつけ葛袴・足駄をはく。珠數があるが太刀を帶びてゐる。

藤原氏權を失ふ

寺院の勢力增大

僧兵

院政　白河天皇もまた果斷にましまし、御父後三條天皇の御志をつがせられ、御讓位の後院政を起された。即ち院の御所なる別當・執事などの院司を中心とし、北面の武士を置き、院宣（上皇の宣旨）を以て諸政を決せられた。されば朝廷の攝政・關白は名のみとなり、藤原氏は全く實權を失つた。然るに白河上皇は、あつく佛教を信じ、御髮をおろし法皇と稱し給ひ、多くの寺塔を建て、佛像をつくらせられたから、財用が乏しくなり、寺院の勢力が著しく增大した。中にも延暦寺・園城寺（大津）・興福寺（奈良）などは、多くの莊園を領し、僧兵を養ひ、互に勢力を張り武器をとつて相爭ひ、また意に滿たざることあれば、京都に亂入して朝廷に强訴した。

源平二氏の興起　かく都が騷がしいのに、朝臣は柔弱になつて、

武士と京都
源氏と東國
平氏と西國

熊野坐神社

世に熊野本宮といひ祭神は家都御子神である。中世にはこゝも神佛混淆であつたが明治に至り分離し今は官幣大社である。

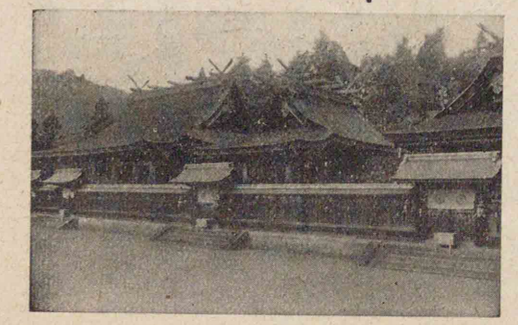
皇室御系圖（九）

七一 白河天皇 ― 七三 堀河天皇 ― 七四 鳥羽天皇
- 七五 崇德天皇 ― 重仁親王
- 七六 近衛天皇
- 七七 後白河天皇
  - 七八 二條天皇 ― 七九 六條天皇
  - 以仁王
  - 八〇 高倉天皇
    - 安德天皇
    - 八一 後鳥羽天皇

しめることゝなつた。源氏は、代々武功を立てて、東國の人心を收め、殊に義家以後大いに勢力を張つたが、平氏は貞盛五世の孫に忠盛が出で、白河法皇に仕へて御信任を得、瀨戸内海の海賊を平げて、西國に勢力を布き、武士の首領として源氏と並び立つやうになつた。

保元・平治の亂

白河法皇についで、鳥羽法皇が院政を御とりになつたが、その崩御の時、左大



これを鎭めることができなかつたから、地方に勢力を布いた武士に命じて、京都の治安を保た

藤原頼長
崇德上皇

平治の亂

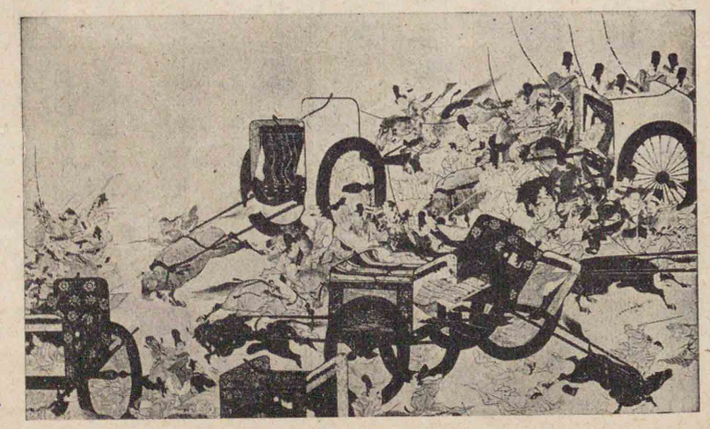
住吉慶恩筆と傳へられる平治物語繪卷の一節によつたもので藤原信頼が後白河上皇の御所に參り上皇を宮中にうつし奉らんとする所、公卿・武士入り亂れてうち騷ぐの狀が描かれてゐる。

平重盛の像

藤原隆信筆と傳へる京都市高雄神護寺所藏の畫像による。束帶姿である。

源義朝

臣藤原頼長は、兄忠通に代つて關白たらんとし、保元元年、源爲義（義家の孫）その子爲朝、平忠正（忠盛の弟）等の武士を誘ひ、兵を崇德上皇の御所なる白河殿に集めた。然るに源義朝（爲義の子）・平清盛（忠盛の子）等は、後白河天皇の大命を奉じ、これを攻めて、爲義等を敗り、源氏は多く一族を失ひ、平氏の勢が大いにあがつた。然るに源義朝は、深くこれを憾みとし、平治元年、平清盛が熊野參りをして、京都に不在なのに乘じ、急に兵をあげたが、清盛はその子重盛と共に擊つて



源氏衰ふ

高倉天皇

これを破り、義朝はのがれて尾張で殺され、その子頼朝は、伊豆（イヅ）に流された。かくて源氏が全く衰へたのにひきかへ、平氏は武家としてひとり榮えることゝなつた。

第十五章　平氏の專權とその滅亡

平氏の全盛

平治の亂後、清盛は官位しきりに進み、つひに從一位・太政大臣となつて政治の實權をにぎり、藤原氏の例にならひ、その女德子を、高倉（たかくら）天皇の中宮にすゝめ奉つた。かくて一門が朝廷の要職を占め、多くの莊園を領し、安藝（アキ）廣島（ヒロシマ）の嚴島（イツクシマ）に美しい社殿を建て、また兵庫の港を修めて、宋（ソウ）支那（シナ）との貿易を開き、その威勢が頗る盛であつた。されば後白河法皇の近臣藤原成親（ナリチカ）等は、これを忌み、ひ

〔源氏略系〕

- 爲義
  - 義朝
    - 義平（惡源太）
    - 頼朝
    - 範頼
    - 義經（牛若丸）
    - 義賢（カタ）
      - 義仲
    - 爲朝（鎭西八郎）
    - 行家

清盛の專横

嚴島神社

廣島縣佐伯郡嚴島にあり市杵島姫（イチキシマ）をまつる。社殿及び鳥居を海上にかまへ神社建築として類例が少いものである。今官幣大社である。

福原以仁王

源頼朝

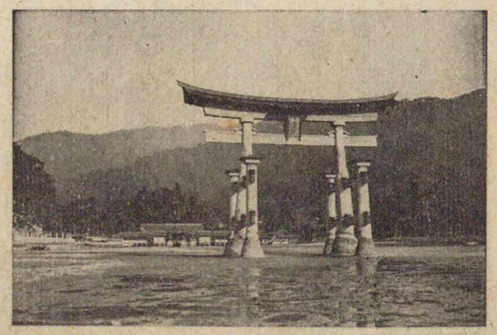
源頼政の像

束帶姿の正裝で藤原隆信の筆と傳へる畫像による。

そかに平氏を滅ぼさうと企てたけれど、失敗した。清盛は重盛に諫められ、後白河法皇を押込（オシコ）め奉ることは、一時思ひとまつたけれど、重盛の死後次第にわがまゝがつのり、後には自分の別莊（ベッサウ）のある攝津の福原（兵庫）に一時都をうつし奉つたこともあつた。

諸源氏兵をあゞ

時に源頼政は、後白河法皇の皇子以仁（モチヒト）王を奉じ、その令旨（リヤウジ）をうけて各地の源氏に傳へ、自ら平氏の軍と宇治に戰つて敗死した。しかし源頼朝は、王の令旨をうけて兵を伊豆に擧げ、富士川に對陣した平氏の軍を、戰はずして京都に追ひかへし、自らは鎌倉に據つて東國を固めた。その從（イト）



源義仲

源義仲の墓
大津市義仲寺にある。

義仲の入京

や、安徳天皇及び神器を奉じ、一族をひきゐて西國に走つた。義仲はたやすく入京したが、功に誇りわがまゝの行ひが多かつたから、後白河法皇は、ひそかに頼朝を召された。そこで頼朝は、弟範頼・義經に大軍をさづ

〔平氏系圖〕

平貞盛―維衡―□―□―正盛―忠盛―清盛―重盛・維盛
　　忠正―経盛―敦盛
　　教盛―教経
　　忠度
　　宗盛
　　知盛
　　重衡
　　徳子（高倉天皇の中宮 安徳天皇の御母）

弟義仲も、兵を信濃に擧げ、平氏の大軍を越中の礪波山に破つて、北國を從へ、ついで西上の途についた。

頼朝と義仲との爭

これよりさき、平清盛が薨じ、宗盛その後をついだが、源義仲が進んで比叡山に據るけて上京せしめ、義仲はこれを宇治・勢多に防ぎ、つひに敗れて近江の粟津で戰死した。

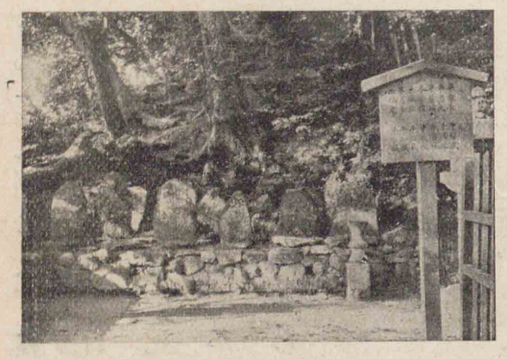
平氏の滅亡

かゝる間に、平氏は西國を從へて勢を得、攝津の福原にかへり、一谷に據つた。範頼・義經は、法皇の院宣をうけて來り攻め、これを陷れたので、平氏は讃岐の屋島に走つた。やがて範頼は、山陽道を

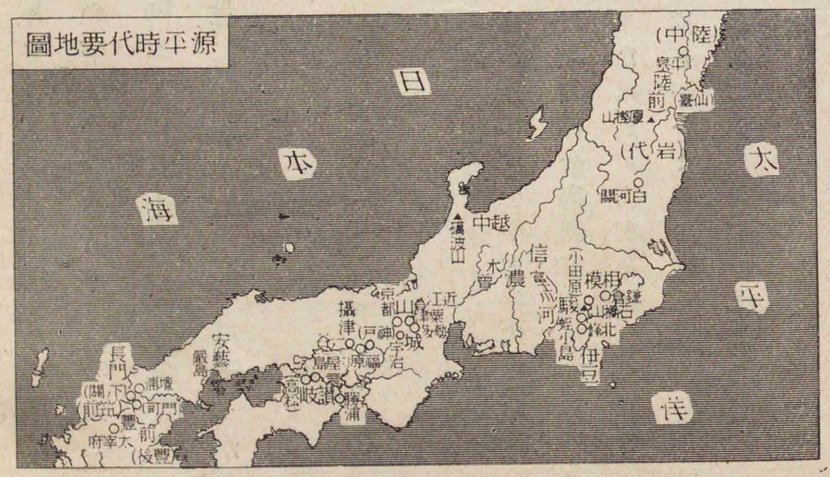
義仲の敗死

源平時代要地圖

一谷の戰



平家一門の墓
下關市壇浦のもとの阿彌陀寺にある平知盛以下の墓碑で苔むして昔の跡をしのばしめる。



屋島の戰
壇浦の戰

下つて九州に入り、義經は急に攻めて屋島をとり、海に浮んで逃げ行く平氏を追ひかけて、大いに長門(山口)の壇浦(ダンノウラ)で戰つた。この戰に、平氏は一族殆ど戰死し、安徳天皇も亦御かくれになつた。清盛が太政大臣となつてから、僅か十九年で、世に『おごる平氏は久しからず』と語り傳へられる。

中古史大要

大化の改新から平氏の滅亡まで、凡そ五百四十年間を、中古時代といふ。孝德天皇が新政を布かれてから、文武天皇の大寶律令御制定までは、政治・法制の革新時代で、多年內屬して來た朝鮮半島は、わが支配を脫したけれど、中央集權が確立し、政治組織もとゝのひ、國基がいよいよ固くなつた。かくて國運の發展に應じ、元明天皇は都を奈良にさだめ給ひ、光仁天皇に至る奈良時代七十餘年間は、唐との交通が盛に行はれ、學問・佛教が榮え、美

術・工藝が發達したが、佛教の隆盛にともなひ、諸種の弊害もあらはれた。こゝに於て、桓武天皇は今の京都に都し給ひ、政治を刷新して、約四百年に亘る平安時代の基を御立てになつた。この時代も、初め約五十年間は、皇威大いに振ひ、漢文學が發達し、新しい佛教が弘められたが、藤原氏が外戚として權を專らにするや、太平になれて遊樂を事とし、政治をかへりみないで地方がみだれ、武士が次第に勢力を占めることゝなつた。後三條天皇以後、藤原氏がおさへられて、政令は皇室から發せられるやうになつたけれど、やがて院政が行はれ、僧兵のわがまゝや攝關家の勢力爭ひから、地方の武士が召されて京都に勢を張るに至り、殊に源平二氏は、武家の首領(シユリオウ)として互に相爭つた。その結果、まづ平氏が勃興して政權をにぎる端をひらき、間もなく源氏がかはつて、政治の實權をにぎることゝなつた。

幕府の組織

鎌倉要圖

武家政治

第三篇 近古

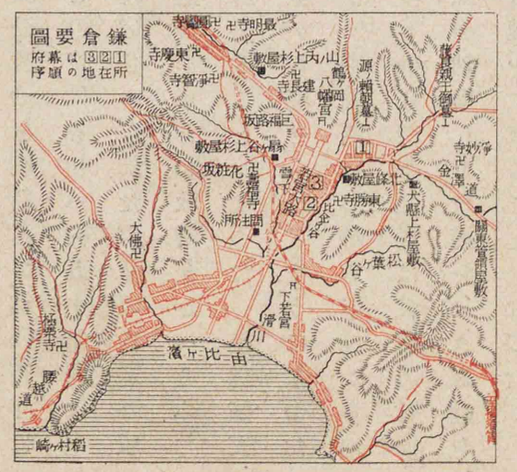
第十六章 鎌倉幕府の創設

鎌倉幕府の開設

源頼朝が鎌倉に據るや、まづ侍所を置いて武士を取締らせ、ついで公文所(政所)問注所を設け、政務・裁判をつかさどらせた。さすれば後鳥羽天皇の建久三年頼朝が征夷大將軍に任ぜらるゝや、これ等の機關を通じて天下の政治を行ひ、武家政治が始められた。世に

鎌倉幕府の開かれた當時の組織

役所の名	職務	長官	長官の氏名
侍所	軍事及び警察を掌る	別當	和田義盛
公文所(後の政所)	一般の政務を掌る	別當	大江廣元
問注所	裁判を掌る	執事	三善康信



源頼朝の像

京都市高雄神護寺所藏、藤原隆信筆と傳へられる畫像による。

守護・地頭

源義經とその書

像は岩手縣平泉中尊寺所藏の畫像による。

これを鎌倉幕府といふ。

頼朝の天下統一

頼朝が平氏を滅ぼしたのは、弟義經の力によることが多かつたけれど、その功を誇りわがまゝをふるまふや、頼朝の怒をうけて一時姿をくらました。そこで頼朝は朝廷に請うて、國毎に守護を置き、軍事・警察を掌らしめ、公領・莊園に地頭を置いて、土地を支配し、租稅をとり立てさせ、家人を以てこれに任じた。この時に當り、陸奥(岩手)の藤原秀衡は、父祖以來の富强をたのみ、義經をかくまつてゐたが、秀衡の死後、その子泰衡に至り、頼朝を恐れてつひに義經を攻め殺した。頼朝は藤原氏が命を奉ずることの遲かつたのを責め、自ら總大將となつてこれ

陸奥の藤原氏亡ぶ

を討ち、平泉を陷れて藤原氏を滅ぼした。こゝに於て天下は一統し、ついで頼朝は征夷大將軍として政治をとり、鎌倉幕府は、名實ともに政令の中心となつた。

衣川古戦場

平泉中尊寺東物見から衣川の古戦場を望む圖で衣川・北上川の平野（古戦場）を隔てゝ前方に東稲山がそびえてゐる。

頼朝の政治　頼朝將軍職にあること八年、その間國家を安らかにせんとして、最も政治に意を注いだ。即ち常に部下を戒めて質素・儉約を旨とし、武勇をはげまし忠孝を重んじ、名を惜しみ卑劣の行ひをしりぞけ、武士の道義をすゝめて民力を養ひ、最も皇室を尊び、あつく神佛を敬ふなど、よく時勢に適した政治をとつたので、平安時代の末にみだれた地方もしづまつて、天下よく治まり、人々よろこび服し、この後凡そ六百八十年間もつゞいた武家政治の基を立てた。しかし頼朝は性疑

政令の刷新

政治

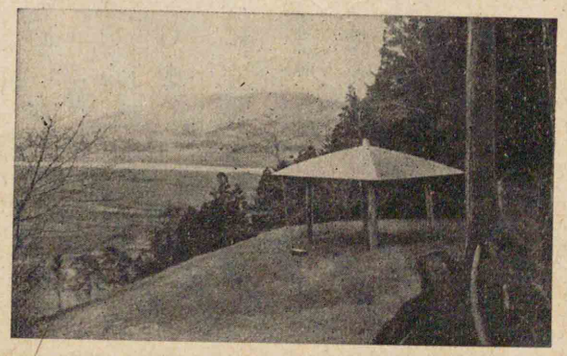
一、信賞必罰恩威兼行

二、士風の刷新

三、敬神尊皇

四、民政の更張

大公三民ー大公四民



ひ深く、弟義經・範頼などをのぞき、自ら源氏衰亡の因をつくつた。即ち頼朝薨じて、長子頼家が將軍となつたけれど、間もなく廢せられ、その弟實朝も亦害せられ、源氏の正統が絶えて、外戚北條氏が幕府の實權をにぎることゝなつた。源氏はわづか三代二十八年で滅んだ。

源氏の滅亡

第十七章　承久の變　北條氏の民政

北條時政・義時

藤原氏の將軍

北條氏の專權　北條時政は、源氏の外戚として、早くから幕府の重要な政務にあづかり、つひに幕府の執權として、ひとり權勢をにぎり、わがまゝにふるまつた。時政の子義時に至り、源氏の正統が絶えたので、源氏に緣故ある藤原頼經を、京都から迎へて將軍にいたゞき、やはり執權として政治を私し、この後將軍は有名無實となり、北條氏が權を專らにした。

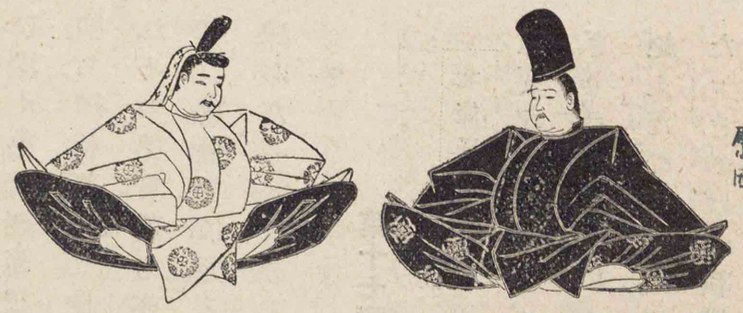
後鳥羽上皇の朝權回復の御志

後鳥羽上皇と順德上皇

大阪府三島郡水無瀬宮所藏の御畫像による。後鳥羽上皇（下）は立烏帽子直衣の御裝ひである。

北條氏の大逆

承久の變



この時に當り、京都では後鳥羽上皇が、院政を御とりになつたが、かねて政權を朝廷に回復せんと志し給ひ、義時が勢をたのんで、屢々上皇の御旨にそむいたから、順德上皇と御謀らひの上、仲恭天皇の承久三年、義時追討の院宣を御下しになつた。そこで義時は、弟時房子泰時等に大軍をさづけて、京都に攻めのぼらせた。泰時は大義を說いて、父を諫めたけれど、義時これを用ひず、ためしなき惡逆を行つた。世にこれを承久の變といふ。即ち御企にあづかつた人々を刑し、更に後鳥羽上皇を隱岐に、順德上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に遷し奉り、亂後一族を京都に居らせて、京都及び關西を鎭めさせた。こ

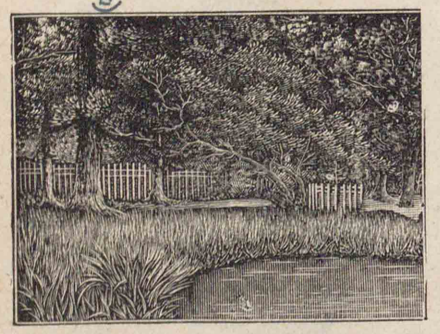
六波羅探題

遠島の御遺跡

上圖は隱岐の島前中の島の海士村にある後鳥羽上皇仙宮の址、下圖は佐渡の眞野村にある順德上皇の御火葬所である。

評定衆

貞永式目（御成敗式目）



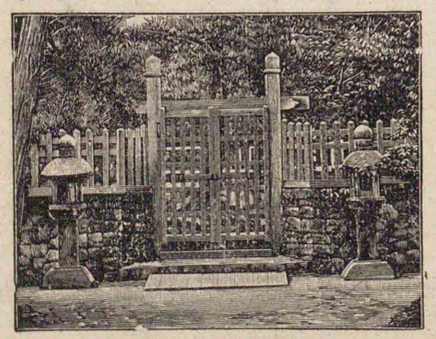
皇室御系圖（十）

- 高倉天皇
  - 守貞親王（八一）
    - 後堀河天皇（八六）
      - 四條天皇（八七）
    - 後鳥羽天皇（八二）
      - 土御門天皇（八三）
        - 後嵯峨天皇（八八）
          - 宗尊親王（一）將軍
            - 惟康親王（二）將軍
          - 後深草天皇（八九）
            - 久明親王（三）將軍
              - 守邦親王（四）將軍
      - 順德天皇（八四）
        - 仲恭天皇（八五）

れが六波羅探題の始めである。

泰時・時賴の民政

義時の越權惡逆の後をうけて、泰時執權となるや、よく民を愛し、政を行ふことが公正であつた。即ち幕府の政所に評定衆を置いて、政務を評定せしめ、また後堀河天皇の貞永元年、貞永式目を定め、後の武家法制の模範とな



民政と國力

るやうな制度を立てた。泰時の孫時頼も、勤儉公正で深く心を民政にそゝぎ、天下は安らかに治まつた。義時が惡逆を行ひながら、北條氏のよく權を保つことを得たのは、これ等の民政により人心を收めたからで、常に節儉をすゝめ、國富み、幕府の財政もゆたかになり、元寇の如き大國難にも、よくその費用をさゝへることができた。なほ時頼の時、藤原氏出身の將軍を廢し、京都から後嵯峨天皇の皇子宗尊親王を迎へて、將軍に仰ぎまつつた。

北條時頼の像

京都五山の一なる萬壽寺所藏の畫像による。

親王將軍

政治と士風

第十八章　鎌倉時代の文化

鎌倉武士　源頼朝が幕府を鎌倉に開くや、つとめて士風を練り、質實忠直の風をすゝめたので、鎌倉武士の間には、一種清新の氣風が發達した。即ち一般に武勇を尚び、遊技にも犬追物、流鏑馬、相撲などを喜び、衣食住も簡素で、主從互に恩義を重んじ、名を惜み恥を知り、節義のためには死を恐れなかつた。これを武士道といふ。

犬追物と流鏑馬

共に狩衣に奴袴といふ狩装束で犬追物は蟇目の矢で走る犬を射流鏑馬は馬場道を走りながらマトを射るのである。

武士道

武士の生活狀態

學問・文藝　學問・文藝はおもに貴族僧侶の間に行はれ、武士は大抵文事にうとかつた。たゞ北條實時が武藏の金澤に文庫を設けて和漢の書を集め、子弟をも教育したのは、特筆すべきことであつた。文藝は、時代の影をうつ

蒙古襲來繪詞による。肥後の竹崎季長が鎌倉に至り奉行秋田城介泰盛に文永の役の報告をして居る所で、折烏帽子、直垂の服裝と共に簡素な生活をしのばしめる。

金澤文庫

軍記物

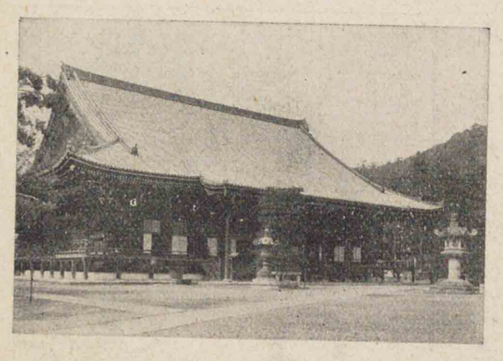
今の稱名寺　神奈川縣久良岐郡金澤村にある。金澤文庫はこの寺の境内に設けられたといふ。金澤文庫は藏書に押したる印にも黒印佛書儒書とて區別した。

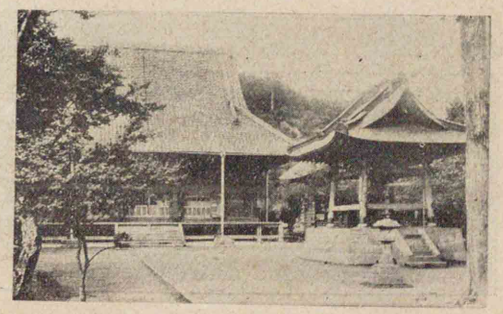
和歌

知恩院　京都市にあり法然の開いたものである。

浄土宗

して、假名交り文を以て綴つた保元物語・平治物語・源平盛衰記・平家物語などの軍記物が出で、ひろく人々に愛讀せられた。和歌は主として京都で行はれ、藤原俊成、その子定家・藤原家隆・僧西行などがあらはれ、定家は後鳥羽上皇の命をうけ、新古今和歌集を撰んで奉つた。武士にも源實朝の如き名高い歌人があつた。





金澤文庫

佛教の新宗派　源平の戰このかた、榮枯常なき世となり、且つ簡素を尊ぶ時勢に應じて、佛教にも平易な新宗派が起つた。高倉天皇の御代、法然（源空）が浄土宗を

親鸞と日蓮　親鸞は新潟縣高田の淨興寺所藏の畫像、日蓮は東京市池上本門寺所藏の一畫像によるが、一は靜かなる水の如く立つ姿、一は燃えあがる焔の如く相貌に書風にもあらはれてゐる。

浄土眞宗

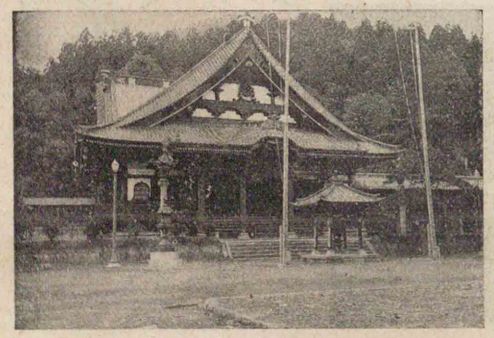
法華宗（日蓮宗）

禪宗

久遠寺　山梨縣身延山にあり日蓮の開いたものである。

至り、日蓮は法華宗をはじめ、法華經の功德を說いたが、いづれも入り易くて民情にかなひ、次第に民間に行はれた。この頃宋から禪宗が傳へられ、その臨濟派は、後鳥羽天皇の御代榮西により、曹洞派は、その弟子道元によりもたらされた。禪宗は學問を研究し精神を練ることを主としたから貴族や武士によろこ

開いたが、その弟子親鸞は、浄土眞宗（一向宗）を唱へ、ともに未來の信仰を說き、專ら南無阿彌陀佛と唱へる念佛を教へ、親鸞は僧侶の肉食妻帶を許し、その女覺信尼は今の東西本願寺の基を開いた。後深草天皇の御代に



榮西の像　京都市建仁寺開山堂にある木像による。

武家造

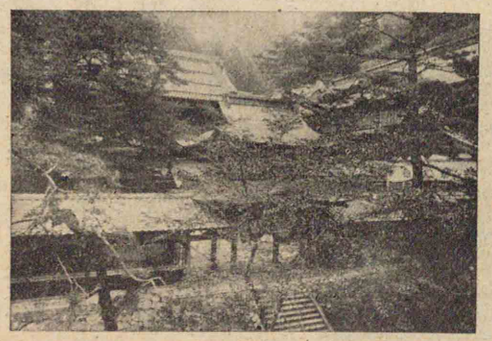
彫刻・繪畫

永平寺　福井縣吉田郡にある。道元の開いた寺である。

武器の製作

ばれ、特に臨濟派は幕府の保護をうけ、京都・鎌倉に多くの禪寺がつくられた。

美術工藝　禪宗の渡來とともに、新に宋風の寺院建築がとり入れられ、實用を主とする武家造も行はれた。彫刻では、運慶・湛慶父子が名高く、勇健な大作をのこし、繪畫は合戰等を描いた繪卷物や肖像畫など大和繪が行はれた。土佐光長・藤原隆信、その子信實などは、繪畫の名手として知られる。時代の必要にともなひ、武器の製作が頗る進み、粟田口吉光・岡崎正宗などの刀鍛冶が出づるや、日本刀の精妙古今に比類なしと稱せられ、甲冑の製作では、明珍家があらはれた。



甲冑　鍬形の兜、胴籠手、草摺を以て身を掩ひ脛當と貫で下肢をかくす。

檢地

座

宋錢

世祖クビライ

また僧道元と共に入宋した加藤景正は歸朝の後瀨戸燒をはじめ、陶磁器の製法も著しく進歩した。

産業　鎌倉幕府は民政に留意し、賴朝は檢地を行ひ田制を整へたが、北條氏も農業の發達に力をつくした。商業は、京都と相並んで鎌倉が中心となり、米座絹座・炭座等、貨物專賣を特許せらるゝものもあり、朝鮮・支那との貿易も行はれ、宋錢を輸入して流通をたすけた。

第十九章　元寇　兩皇統の交立

元寇の撃滅　土御門天皇の御代、今の蒙古地方から起つた蒙古族は、後次第に勢を得、その王世祖クビライの代に至り、都を今の北

北條時宗

後宇多天皇と龜山上皇

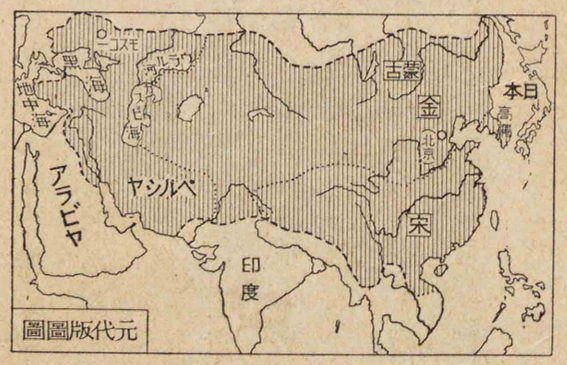
向つて右方は後宇多天皇の御像で京都市嵯峨大覺寺所藏の御畫像に上皇の御像は龜山上皇の御影による。

元代版圖圖

軍を苦しめた。時に少貳・大友・島津・菊池等

京に定め、アジヤからヨーロッパにわたる廣大な領土を統べ東は高麗を從へ、南は宋を壓し、つひに龜山天皇の御代、わが國にも國書を送り、入貢を促して來た。時の執權北條時宗は、斷然これをしりぞけ、兵備をとのへ國防を嚴にした。

蒙古はやがて國號を元と改め、後宇多天皇の文永十一年、高麗の兵をあはせ、對馬・壹岐を經て、筑前の博多に迫り、毒矢を飛ばし、鐵砲を放ち、我が



元代版圖圖

北條時宗とその書

時宗の像は肥前國藤津郡南小國村阿蘇郡の滿願寺所藏の畫像による。

文永の役 異國征伐の企

元寇陸戰の圖

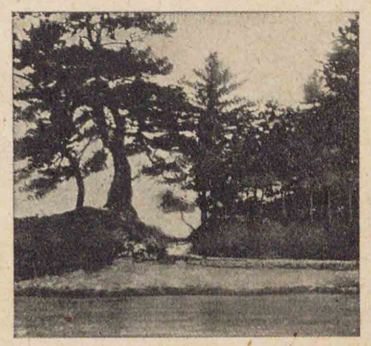
蒙古襲來繪詞による。蒙古軍のやゝ部隊的な戰法、鐵砲の爆發に對わが軍の單騎進出の樣が描かれてゐる。

弘安の役

九州の豪族が、奮戰してこれを防ぎ、たまたま大風が吹き起り、敵艦は多く海に沈んだ。この後時宗は、もえ立つやうな國民の意氣に投じ、異國征伐をさへ企てたが、やがて弘安四年元が再び來寇するや、わが將士力戰してこれを上陸せしめず、かへつて奇襲して敵艦を苦しめ、再び神風吹き荒れて、敵軍は殆ど擊滅せられた。これを弘安の役といふ。元寇は實にわが國未曾有の大國難で、後宇多天皇はいたく國事を御心配になり、殊に龜山上皇は畏くも御身を以て國難に代らんことを、皇大神宮に祈らせ

時宗

給ひ、時宗の果決、將士の勇武、國民の憂國の至誠、みなよく天に通じてつひに強敵を挫いた。元は、この後もなほ再擧をはかつたけれど果さず、つひに日本征服を斷念した。けれども これがために鎌倉幕府の財政がみだれ、北條氏の勢が漸く衰へるやうになつた。

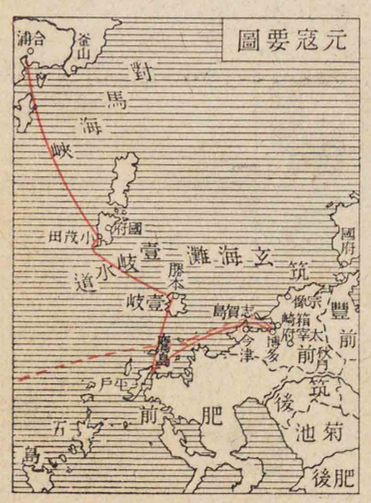


蒙古塚

福岡縣糟屋郡志賀島にあるわが軍蒙古人を討ちこれを斬り埋葬した所として祭つた所と傳へられる。

兩皇統の交立

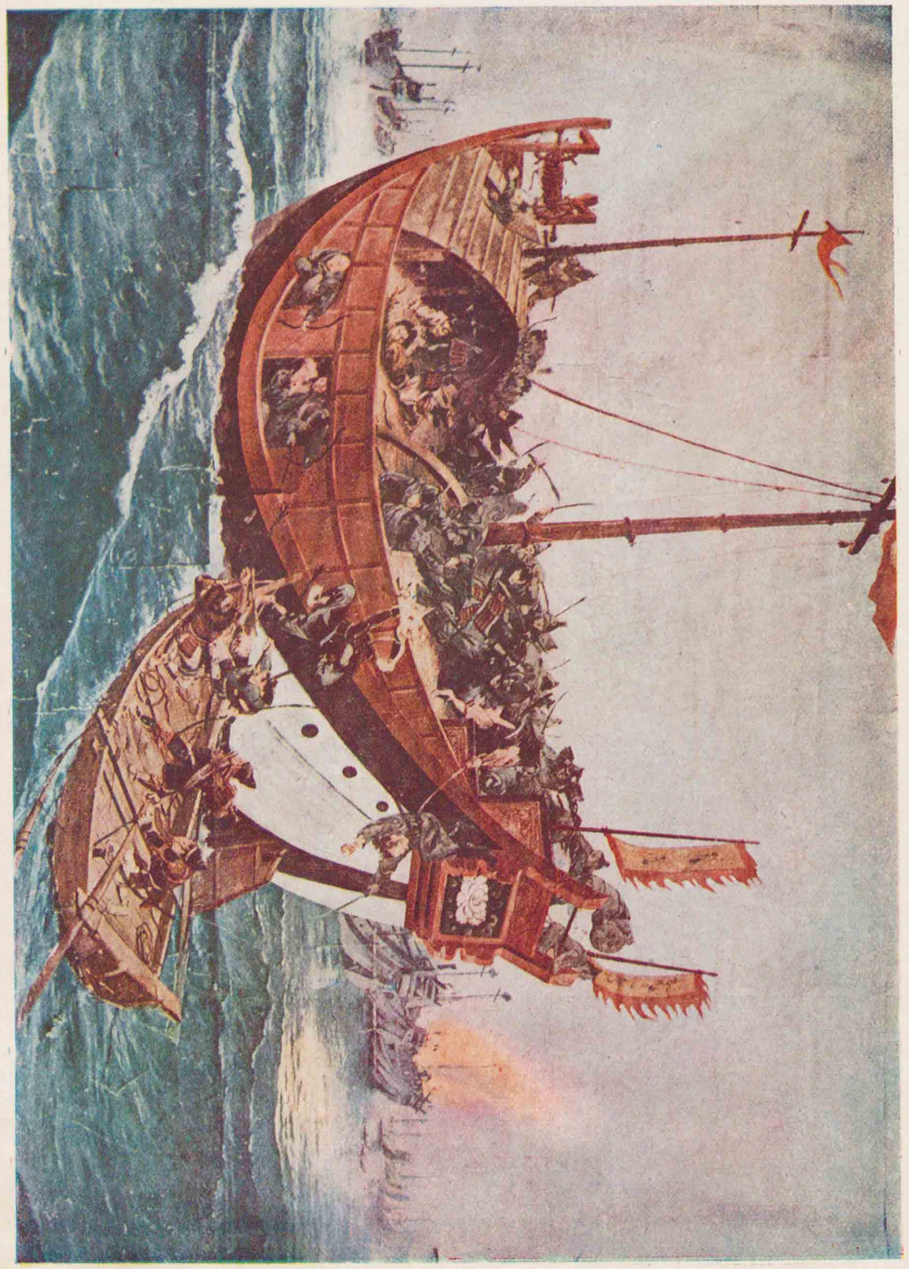
さきに龜山天皇は、御父後嵯峨天皇の御意をうけ、御兄後深草天皇のゆづりをうけられ、後に御位を御子後宇多天皇に傳へられた。この御血統を大覺寺統と申す。然るに幕府のはからひで、後深草上皇の御血統をも皇位にのぼり給ふことゝし、これを持明院統と申す。



元寇要圖

大覺寺統

持明院統



元寇海戰の圖

（矢田一嘯畫）

東京遊就館に藏せられる油繪による。竹崎季長の『蒙古襲來繪詞』を基とし、河野通有等が小舟に乘り敵艦の奇襲をなす樣を描いたものである。

統と申す。

皇室御系圖（十一）

- 土御門天皇
  - 後嵯峨天皇
    - 後深草天皇（持明院統）
      - 伏見天皇
        - 後伏見天皇
          - 量仁親王
        - 花園天皇
    - 亀山天皇（大覺寺統）
      - 後宇多天皇
        - 後二條天皇
          - 邦良親王
        - 後醍醐天皇

五攝家

執權北條貞時に至り、兩皇統かはるがはる御位に卽き給ふべきやう奏上し、皇威をはゞからざる越權をかさねた。この頃藤原氏の攝關家も近衞・九條二條・一條・鷹司の五家に分れ、これを五攝家と稱し、その勢力が振はなくなつた。

第二十章　建武の中興

後醍醐天皇

後醍醐天皇は英明にわたらせられ、かねて北條氏のわがまゝを憤り給ひ、後鳥羽上皇の御志をついで、政權を朝廷に

後醍醐天皇

京都大德寺所藏の御畫像による。尊治といふのは御諱である。

正中の變

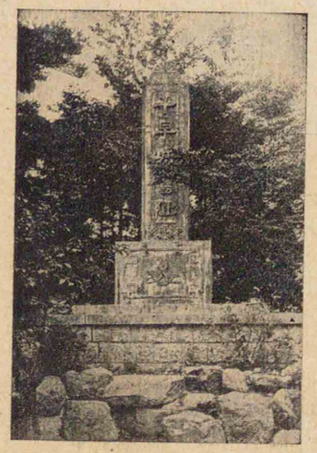
元弘の亂

千早城址

大阪府南河内郡にある。圖はその二の丸の標柱を示す

楠木正成

收めようと思召された。時に鎌倉幕府は、元寇後財政がみだれて、漸く人心を失ひ、殊に執權北條高時は、遊樂を事として政治がみだれたので、正中元年、日野資朝等の朝臣を召し討幕を企てられたけれど成らなかつた。その後幕府は、立太子の事について、天皇の命を奉じなかつたので、天皇はますます御憤りになつて、北條氏討伐を御企てになつた。高時大いに驚き、二階堂貞藤の諫をもきかず、元弘元年大兵を上京せしめ、天皇を笠置の行宮に攻め奉り、翌年畏多くも天皇を隱岐に遷し奉つた。



楠木正成　時に河内の豪族楠木正成は、勅命を奉じて赤坂城に義兵を

勤王諸將の書風

向つて右から北畠顯家・名和長年・新田義貞・楠木正成の順である。

護良親王

菊池武時

名和長年

足利高氏

新田義貞

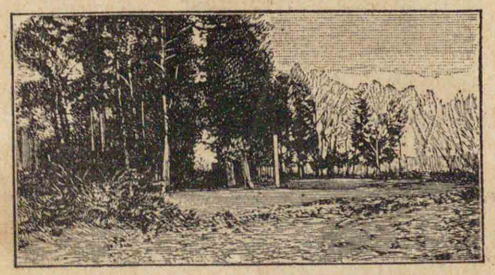
生品明神の森

群馬縣新田郡生品村にある。新田義貞が義兵を擧げたところである。

北條氏の滅亡

後醍醐天皇の菊池武時を初め、諸國の勤王の士が起り、後醍醐天皇も伯耆に移らせ給ひ、名和長年をたより、船上山を行宮と定められた。ついで賊將足利高氏も、官軍に降つて京都の六波羅を陷れ、又新田義貞も、義兵を上野に擧げ、進んで三方から鎌倉を攻め、之を陷れて北條氏を滅ぼした。時に元弘三年で、鎌倉幕府は約百四十年で滅んだ。

北條氏の滅亡　こゝに於て肥後の菊池武時を初め、諸國の勤王の士が起り、後醍醐天皇も伯耆に移らせ給ひ、名和長年をたより、船上山を行宮と定められた。ついで賊將足利高氏も、官軍に降つて京都の六波羅を陷れ、又新田義貞も、義兵を上野に擧げ、進んで三方から鎌倉を攻め、之を陷れて北條氏を滅ぼした。時に元弘三年で、鎌倉幕府は約百四十年で滅んだ。



後醍醐天皇京都還幸

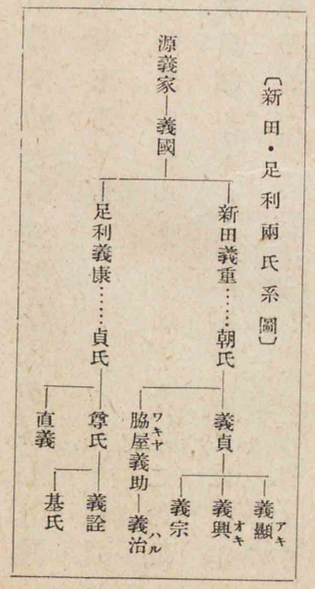
東勝寺址　神奈川縣鎌倉町にあり、北條氏滅亡の所で高時の墓と傳へられるものも林間にある。

中興の政治

足利尊氏の像　京都市等持院にある木像による。

建武の中興

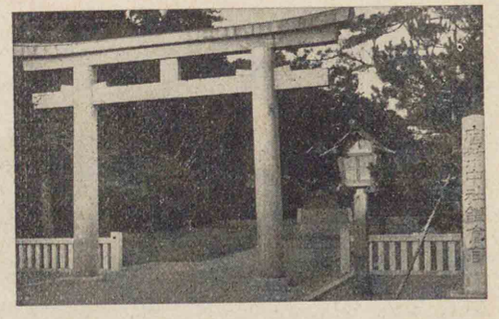
後醍醐天皇は、六波羅陥落の報を得られて行宮を發し、兵庫から楠木正成を先頭に、堂々と京都に還幸せられた。かくて關白を廢し記錄所を置き、親臨して熱心に政を御聽きになり、雜訴決斷所を設けて、領地に關する爭を裁判させ、武者所を置いて武士を監督させた。又護良親王を征夷大將軍に任じ、地方には國司・守護を置き、北畠顯家を陸奥守とし、皇子義良親王を奉じ奥羽に赴かしめ、足利直義を相模守に任じ、皇子成良親王を奉じて關東を治めしめた。こゝに於て中央・地方を通じて、政權再び朝廷にかへり、世に建武の中興といふ。けれども公卿と武士との間がとかく一致を缺き、新政の實行がはかばかしからず、久しく武家政治になれて大義にくらいものは、新政を喜ばず、かへつて武家政治を慕ふに至つた。



鎌倉宮　鎌倉にある官幣中社で護良親王をまつる。

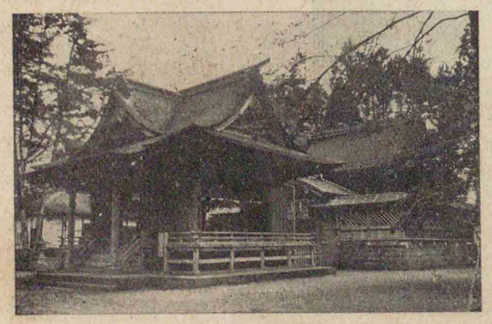
公武の關係

菊池神社　熊本縣菊池郡隈府にある別格官幣社、菊池武時等をまつる。



足利尊氏の反

この時に當り、源氏から出た足利尊氏は、武家政治再興の野心を抱き、巧みに武士を手なづけ、威望高き護良親王と新田義貞とを除き、その大望を成しとげようと



北條時行の亂

湊川神社

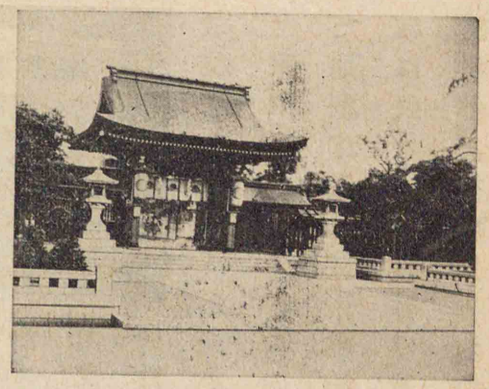
楠木正成をまつる別格官幣社、神戸市にある、

名和神社

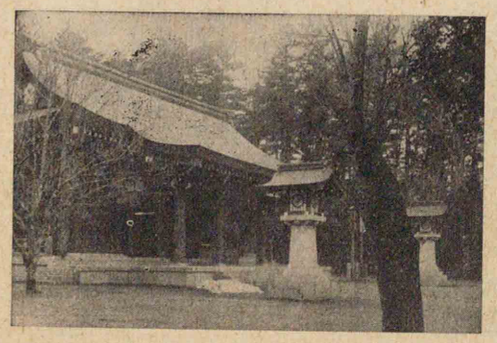
名和長年をまつる別格官幣社、鳥取縣西伯郡御來屋にある。

箱根・竹の下の戰

尊氏の西走



した。建武二年、北條高時の子時行が、信濃に兵を起して鎌倉を攻むるや、相模守足利直義は、これを防ぐことができないで、幽閉中の護良親王を弑し奉つて、西走した。そこで尊氏は、勅命を待たずに東下して時行を破り、新田義貞を除くを名として兵を集めた。朝廷では、義貞に詔してこれを討たしめられたが、義貞は箱根・竹の下の戰に利を失ひ、尊氏はその後を追ひ、京都に攻めのぼつたけれど陸奥の北畠顯家が上京し、義貞・正成・長年と力をあはせて、賊軍を討破り、尊氏は九州さして落ちのびた。



多々良濱の戰

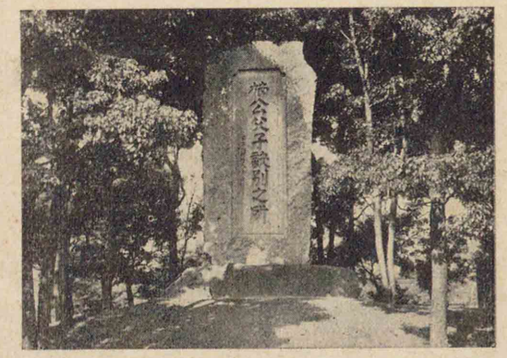
櫻井驛址

大阪府三島郡島本村にある。楠公父子訣別の址と傳へられる。

尊氏の東上

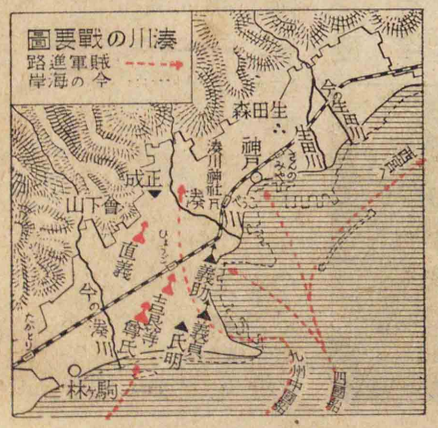
湊川の戰

湊川の戰要圖



湊川の戰

尊氏の九州に走るや、菊池武敏の子武時ひとり義旗をかゝげて、これと筑前の多々良濱に戰つたが、不幸にも利を失ひ、尊氏は大兵を集めて、海陸相ならんで東上した。朝廷では新田義貞・楠木正成等をして、これを兵庫に防がしめたが、正成は決死の覺悟を固め、攝津の櫻井驛で、その子正行に忠孝の道をさとし、進んで湊川に奮戰し、『七度人間に生れて朝敵を滅ぼしたい。』と念じながら、忠烈な戰死を遂げた。されば尊氏はまた京都に入り、後醍醐天皇は比叡山に行幸せられ、ついで長年等も戰



中興政治全く破る

光明院

吉野の朝廷

新田塚　福井縣吉田郡西藤島村にある。新田義貞戰死の所で藤島神社ももとこゝにあつた。

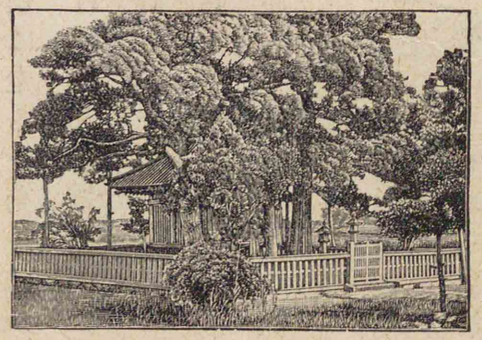
官軍と賊軍

死し、中興の大業が全く破れてしまつた。

第二十一章　吉野の朝廷

吉野行幸

尊氏の入京するや、賊名を避けようとして、光明院(クワウミヤウヰン)を奉じて天皇と稱し奉り、ついでいつはり降り、後醍醐(ゴダイゴ)天皇の還幸(クワンカウ)を請ひ、不敬の行ひもあつたから延元元年後醍醐天皇は神器を奉じて、ひそかに吉野に行幸せられ、行宮を定めて政をとり給うた。かくて官軍の討伐に對し、尊氏に味方する賊軍が反抗し、天下の形勢おのづから二分して、戰亂五十七年の久しきに及んだ。



官軍の不振

これよりさき新田義貞は、勅命により皇子恒良(ツネナガ)親王を奉じ、越前(福井)の金(カネ)ケ崎(サキ)城に入り、一時勢をふるつたが、やがて斯波(シバ)高經等の賊軍に攻められて城が陷り、ついで義貞も藤島で戰死し、その北國經略も空しくなつた。また陸奥の北畠顯家(キタバタケアキイヘ)も、義良親王を奉じて西上し、京都の回復につとめたが、和泉(イヅミ)大阪の石津で戰死した。かゝる間に後醍醐(ゴダイゴ)天皇は御病にかゝり、北方の天を望ませられながら行宮で崩御せられた。

新田義貞の戰死

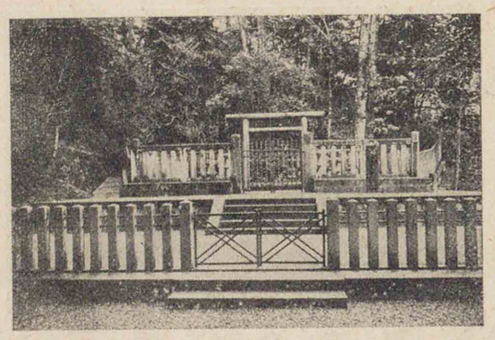
塔尾御陵　奈良縣吉野にあり後醍醐天皇の御陵で正面は北向である。

北畠顯家の戰死

後醍醐天皇の崩御

北畠親房とその書　東京帝室博物館所藏の畫像による。書は按察使親房と書いたものである。

後村上天皇北畠親房の東國經營



四條畷の戰

ついで皇太子義良親王が御立ちになり、後村上(ゴムラカミ)天皇と申す。この時に當り、楠木正行は、一族をひきゐて行宮をまもり、菊池武光(武敏の弟)は、征西將軍懷良(カネナガ)親王を奉じ、北畠親房(チカフサ)顯家(父の)もさきに東國の經營に力をつくし、陣

四條畷神社及び楠木正行の墓

大阪府北河内郡四條畷村にある。楠木正行をまつる別格官幣社。

四條畷の戰

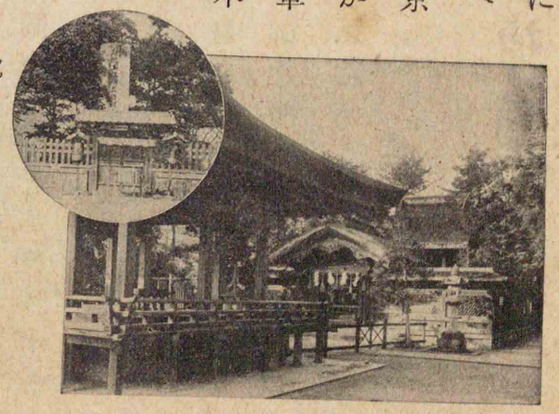
如意輪堂

奈良縣吉野にある。

征西將軍宮の御奮戰

北畠親房の薨去

中で筆をとつて神皇正統記を著し、大いにわが國體を明かにしたが、後に吉野にかへり、天皇をたすけ奉り、正行と力を合せて、京都の回復をはかつた。かくて官軍の勢が一時また振つたが、正平三年高師直等、大軍をひきゐて南下し、楠木正行はこれと河内の四條畷に戰つて死し、ついで吉野も侵されたので、天皇は賀名生に御遷りになつた。九州では菊池武光が懷良親王を奉じ、少貳・大友等の軍を大保原に破つたが、その後また振はず、かゝる間に吉野の朝廷では、柱石と賴んだ北畠親房



賀名生行宮址

奈良縣吉野郡賀名生村にある。

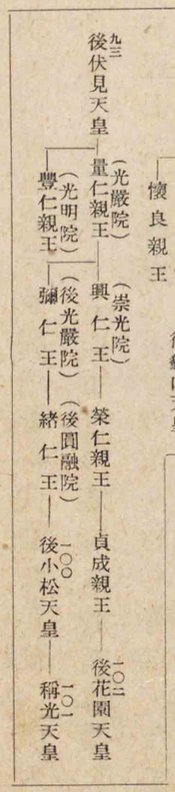
後龜山天皇京都御還幸

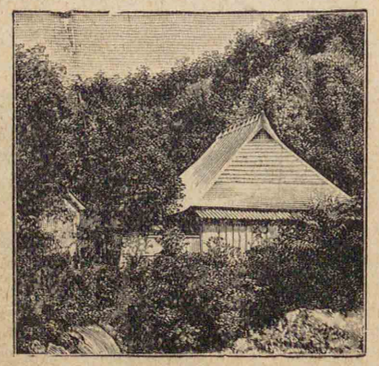
後小松天皇

が薨じ、官軍の勢が再び振はなくなつた。

後龜山天皇

後村上天皇の次に、長慶天皇後龜山天皇が御立ちになつたが、京都では尊氏死し、子義詮を經て孫義滿に至り、元中九年後龜山天皇に奏し、京都還幸を請ひ奉つた。天皇は久しくつゞいた戰亂を治めて、萬民の苦しみを除かうと思召され、これを許して京都に御還りになり、皇位を後小松天皇に讓り、神器を御傳へになつた。





足利義滿

幕府の組織（三管領四職）

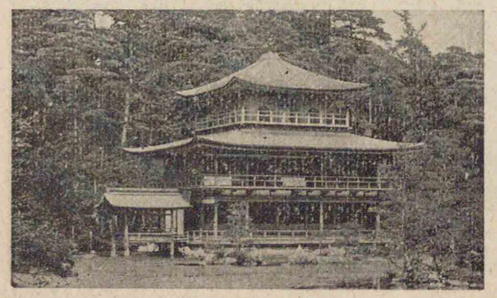
金閣

京都市北部にある。義滿の別莊がその死後鹿苑寺となり三層の金閣だけ當時のまま殘つてゐる。

關東管領

第二十二章　室町幕府の創立

室町幕府　初め尊氏は、ほしいまゝに征夷大將軍と稱し、幕府を京都に開いて、武家政治を再興したが、後龜山天皇御還幸の後、義滿は征夷大將軍として、室町の幕府に於て政治を行ひ、よく諸豪族を威服して、幕府の基を定めた。卽ち將軍をたすける管領は、足利氏の一族なる斯波、細川、畠山の三氏から任ぜられ、これを三管領といひ、その下に政所・侍所・問注所があつたが中にも侍所の權が最も重く、その長官たる所司は、赤松・山名・京極・一色の四氏から補せられ、これを四職と稱した。また地方には、鎌倉に關東管領を置き、奧羽と九州とには各探題を置いた。諸國には、もとの如



足利義滿の像

京都市相國寺所藏の畫像による。

く守護地頭があつてこれを支配したが、その權は年と共に加はり、次第にその支配地の領主の如き有樣となつた。

義滿のおごり　義滿は、將軍職を子義持に讓つたが、ついで太政大臣に任ぜられ、大小の政務を自ら決した。そして勢に任せておごりにふけり、相國寺を建て、或は金閣をつくり、朝臣をみること家人の如く、名分をみだることも多かつた。殊に財用が不足して、明と交通を開き貿易の利を收め、明主から日本國王の號をうけ、これに對して臣と稱し、また從來朝廷をさし奉る公方といふ尊稱を、將軍に用ひるなど、その不臣の行ひは後世から非難せられる。

永享・嘉吉の亂　足利氏は朝廷にそむいて權力をにぎり、諸將に多くの領地を與へ、これを手なづけたから、將士恩になれ功にほこ

關東管領自立の志

足利持氏

足利義教

永享の亂

赤松滿祐

嘉吉の亂

り、漸くわがまゝになつた。殊に關東管領家は、次第に威望が加はつて、遂に自ら將軍たらんと志すやうになり、既に管領足利氏滿滿兼の頃、これを戴いて事を企てんとするものもあつた。滿兼の子、持氏は、僧職をやめて將軍となつた義教と合はず、その命にそむき事毎に幕府に反抗した。執事上杉憲實が、これを諫めたけれど、持氏はかへつて憲實を殺さうとしたので、義教は持氏追討の勅をうけて、これを討ち滅ぼした。時に後花園天皇の永享十一年で、世に永享の亂といひ、關東の亂のまづくづれ、動亂の源がこの間に起つた。義教は、更に權臣をおさへて、幕威を確立しようとしたが、赤松滿祐は自ら安んぜず、つひに義教を弑し、兵をあげて山名持豐等に討ち滅ぼされた。世にこれを嘉吉の亂と

〔足利氏系圖〕

（將軍家）尊氏 — 義詮 — 義滿（一）
義滿 — 義持（二）— 義量（三）
義滿 — 義教（四）— 義勝（五）
義教 — 義政（六）
（關東管領）基氏（一）— 氏滿（二）— 滿兼（三）— 持氏（四）

疎石

疎石の像

天龍寺所藏の畫像による。

天龍寺船

安藝安國寺

廣島市北郊にある安藝の安國寺で金堂の側面。名高い惠瓊のゐた所である。

いひ、幕府の實力がいよいよ衰へた。

第二十三章　室町時代の外交と文化

明との交通

元寇の後も、元との私の通交は行はれたが、足利尊氏に至り、僧疎石（夢窓國師）の言を用ひ、後醍醐天皇の御追福等のため、京都に天龍寺、諸國には安國寺を營み貿易船を元に遣はし、その利益を收めて、天龍寺を建てる費用に充てたので、世にこれを天龍寺船と稱した。その後、元滅び明起るや、足利義滿は、これと貿易して財用の不足を補ひ、外交上の失態をもひき起した。その子義持は、一時明と絶つたが、後花園天皇の御代に至り、將軍義

明との交通とその失態

勘合符

永樂通寶

明から輸入した貨幣で、一時わが國にもひろく行はれた。

勘合印

朝鮮から周防の大内氏に送つたもので通信符の文字を半分に割つたものである。

國民の海外發展

教がまた國交を復し、義政は臣と稱して、明から錢を求めるやうな不面目をも敢てした。當時幕府の使者は、明から送られた勘合符（カンガフ）といふしるしをたづさへたが、後には諸侯社寺・富商なども、幕府からこれをもらひうけて、明と交通するに至つた。かくの如き明との交通の結果、學藝の發達、美術工藝の進歩など、文化の發達に資する所が少くなかつた。

國民の海外渡航

吉野朝このかた國内はとかく爭亂が相つぎ、後龜山天皇[九九]の京都還幸後も、室町幕府の施政宜しきを得ず、やはり世態（セタイ）は安定しなかつた。かゝる間にも國民海外發展の意氣はすさまじく、幕府の保護もうけずに、相ひきゐて元及び高麗に渡り、盛に通商に從事した。元や高麗の後をうけた明及び朝鮮が、勘合の制により通商を制限せんとしたのは、おもにかゝ

日本町の基

高麗の衰亡

朝鮮

る國民の渡航や私貿易を抑へようとしたものであつた。しかしそれにもかゝはらず、國民の海外に渡るものが次第に多く、遠く南方諸國へ移住するものもあらはれ、後ヨーロッパ人をみちびいて、印度から歸國したものさへあつた。江戸時代の初期までに海外各地に發展した日本町は、實にかくしてその基がきづかれたのである。

朝鮮との交通

高麗は、早くから元に屬して、内政外交おほむねその指令をうけ、殊にその日本遠征に加はつてから、兵力を損し財政がみだれ、國力が次第に衰へた。されば後龜山天皇[九九]の御代に至り、武人出身の李成桂（リセイケイ）（今の李王家の祖）が、高麗にかはつて王となり、國號を朝鮮といひ、京城に都をさだめて、半島を統治することゝなつた。ついで我が國にも使を送つて交を結んだが、稱光天皇の應永二十六年、朝鮮の世宗は、新興の勢をもつて急に兵船を送り、對馬を攻めさ

宗氏と日鮮交通

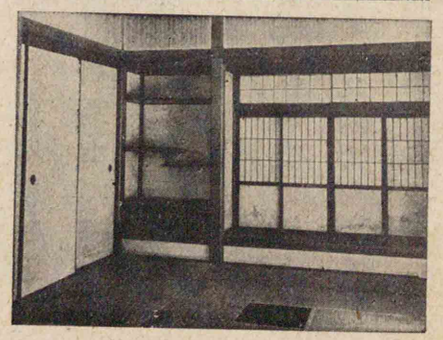
せた。然るに鎮西探題澁川義俊等、これと戰つて敗走せしめたので、この後朝鮮は專ら和親を旨とし、對馬の宗氏が日鮮交通の局に當ることゝなつた。そして宗氏は通商について朝鮮と約を結び、釜山浦等を開かしめ、對馬の島民がこれ等諸港に在留するものもあつた。

東求堂とその内部

東山慈照寺に建てた持佛堂でその一部である茶室はわが國四疊半の茶室の始めである。

美術工藝

室町時代は戰亂が多く、とかく世が亂れがちであつたけれど、足利氏は尊氏から義教まで、代々みな佛教に歸し、或は文藝を好んだから、美術工藝はさまで衰へなかつた。特に義政は、多藝で奢侈を好み、將軍職を子義尚に讓つてから、世の大亂をもかへりみず、東山に別莊を構へ、茶室や銀閣をつくつて、風流の遊びにふけつたので、美術工藝は著しく發達し、世に東山時代と稱せられる。當時明と交通が行はれたから、繪畫には清淡な支那畫風がとりいれられ、後土御門天皇の頃、明から歸つて、妙技をふるつた僧雪舟の如きは、これを代表し、この畫風と、土佐光信により中興せられた土佐派の大和繪とを調和し、狩野元信は狩野派を開いた。茶の流行と共に、陶磁器・漆器の製法も進歩し、山田祥瑞が明の製法を傳へて唐津燒をはじめ、陶器が各地で製出せられ、漆器では特に蒔繪の術が進歩して、明にまさるものをつくり出した。その他後藤祐乘は、刀劍裝具の彫刻に巧みで、後世金工の祖と稱せられた。



足利義政

東山時代

支那畫風（雪舟）

土佐派・狩野派

陶磁器・漆器

雪舟の像

山口縣常榮寺所藏の畫像による。

佛教と學藝

禪宗は室町時代にも武士に喜ばれ、尊氏は天龍寺、義滿は相國寺をいとなみ、支那の風にならつて、京都・鎌倉の禪寺に

五山と文學

寺子屋

一向宗

田樂

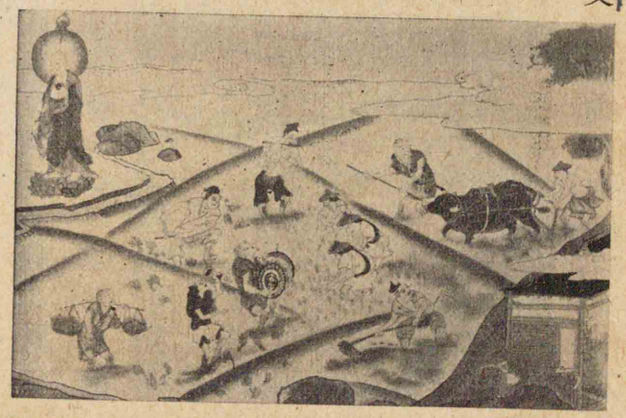
能樂の一淵源と認められるものでもあり、また田植の時農人を慰めんために歌舞をなしたものが後世田植の景狀を模倣して行はれることゝなつた。北條高時・足利尊氏・大内氏等これを好みはじめ室町時代多くは民間に行はれた。鳥取縣大山寺所藏絵巻物による。

法華宗

連歌

能樂・狂言

は、五山の制が定められた。五山の僧徒は、支那に往來して、海外の事情に通じ、また學藝に長ずるものが多かつたから、政治・外交の顧問として幕府に重く用ひられ、また文藝も義堂・絶海など、その作品は支那人をおどろかすに至り後世五山文學と稱せられ、つひに僧侶が教育にもたづさはつて、寺子屋の名も起つた。しかし一般に武士・平民の好みが著しくなつて、民間には、後花園天皇の御代から、親鸞七世の孫兼壽(蓮如)により一向宗がひろめられ、法華宗もひろく行はれ、和歌には太田道灌の如き名人もあらはれたけれどそれよりも連歌が盛んで、宗祇の如きはその達人であつた。義滿以後能樂・狂言・幸若舞等が盛んに



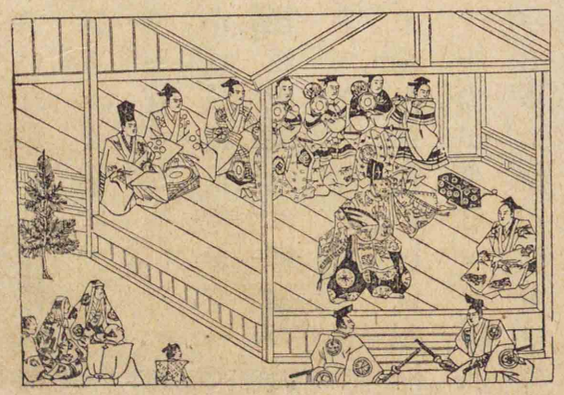
俗風の代時町室

室町時代初期の畫家土佐行廣等の合作にかゝる『融通念佛緣起繪卷』による。牛飼の妻が難産で死せんとするのを、融通念佛宗の開祖良忍院政時代の名僧のすゝめにより、この宗に歸し一命をとりとめた所を示す。良忍に對してゐるのは牛飼の妻、その向つて左方に牛飼が合掌して謝意をあらはし、毘沙門天が屋根の上に降つて良忍を加護してゐる。入口に立つ見舞の女、隣家の職人とその妻、馬に乘る武士、行脚の禪僧や市女笠の巫女、水をくむ女の髻包といふ頭巾、荷をかつぐ人など室町時代の庶民の風俗をあらはしてゐる。

謠曲	
能樂	この繪は室町時代よりもやや後のものであるが謠・鼓・笛等の歌曲に合せて舞ふ樣を見ることができる。
家屋	
茶湯	茶室で行ふのが正式であるけれどかく路傍で茶を煎じ賣つたものもある。職人歌合による。
衣服	

行はれ、これにともなひ謠曲・舞の詞などが新しくつくられた。公卿出身の學者としては、一條兼良が名高く、上杉憲實は武士の出身で、關東文運の興隆に力をつくした。

風俗　一般に奢侈をきはめ遊藝が盛んに行はれたが、禪宗の感化をうけて、あつさりして上品な風が喜ばれた。家屋には玄關・床間を設け、疊をしきつめ襖・障子を立て或は趣ある庭園・茶室などをつくることが流行し、今日の住宅建築に近づいて來た。衣服は素襖・袴から次第に短くなつた。



また茶湯・香合・生花などの遊藝が行はれ、今日の禮式・作法も、この頃から定まつたものが多い。

遊藝

第二十四章　室町幕府の失政　應仁の亂

義政の失政

将軍義政は、年十五で職をついだから、畠山持國・細川勝元・山名持豐宗全等の權臣が勢をふるひ、幕威が次第に衰へた。殊に義政は、成長の後も柔弱で奢りにふけり、不作や惡病になやむ國民の苦しみをかへりみず、頻りに重税をかけ、或は貸借をすべて無效にする德政の暴令を出した。されば後花園天皇は御製の詩を賜はり、暗に義政を御諭しになつた程であつた。

權臣勢をふるふ

後花園天皇の御諭し

細川勝元

山名持豐

應仁の亂

義政初め子がなかつたので、弟義視を養子と定め、細川勝元をその後見とした。然るに後に實子義尚が生るゝや、義政の妻富子は、これを山名持豐に託し、世嗣たらしめようとはかつた。

諸家の家督爭ひ

足利義政の像

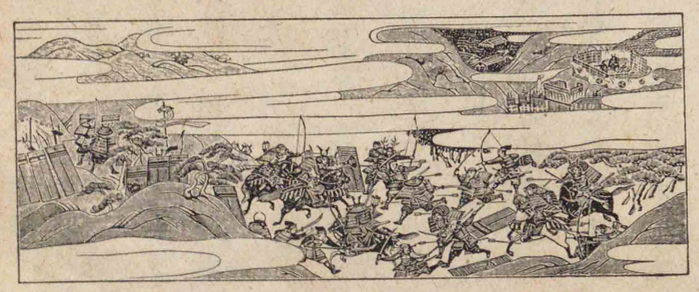
東京帝室博物館所藏の畫像による。衣冠の裝ひもはやなくて武將でなくて公卿化したことを示してゐる。

これから細川・山名の兩氏互に權を爭ひ、管領家たる畠山家・斯波家の家督爭ひにも關係し、諸將もこれに分屬して、天下の勢自ら二分した。かくて後土御門天皇の應仁元年、勝元の兵十六萬、持豐の兵十一萬、京都の東西に陣して戰を開き、兩軍いりみだれて戰ふこと七年、持豐・勝元相ついで死し、義政も將軍職を子義尚に讓つた。しかし戰はなほつゞいたが、いつしか地方にもひろがり、諸將その領國を保つ必要を感じ、文明九年に至り、皆兵を收めて歸國した。これを應仁の亂といふ。

應仁の大亂

眞如堂緣起繪卷による。戰士の進退、陣營の内部などがうかゞはれる。亂後四十年程を經て描部助久國の描いたものである。

戰亂地方にひろがる



京都の荒廢

地方分權

戰亂の結果　應仁の亂は、社會の面目を一變せしめた。京都は兵亂の地となること前後十一年、おほかた兵火にかゝつて燒野となり、朝廷は衰へ、公卿・町人は地方に下り、幕府の威信が全く地におちた。從つて地方諸侯の權が重くなり、堺・兵庫・大津・小田原・山口・博多などの都市が榮え、地方分權の勢が著しくなつた。

なれや知る都は野べの夕雲雀あがるを見てもおつる涙は　飯尾彦六

第二十五章　群雄の興起

戰國時代　應仁の亂後、幕府の權は全く衰へて、義尚・義稙・義澄・義晴・義輝・義榮などの將軍が、相ついで立つたけれど、もはや山城一國をすべることすら困難となり、その實

皇室御系圖（十三）

一〇二 後花園天皇—一〇三 後土御門天皇—一〇四 後柏原天皇—一〇五 後奈良天皇—
—一〇六 正親町天皇—誠仁親王—一〇七 後陽成天皇

下剋上

兵亂の世

皇室の御不自由

般若心經（ハンニヤシンギヤウ）

京都市醍醐の三寶院所藏、後奈良天皇御宸筆般若心經の一部で限りなき御聖德の一端を物語つてゐる。

權は初め管領家の細川氏、ついで細川氏の家臣三好（ミヨシ）氏、更に三好氏の家臣松永（マツナガ）氏といふ風に、次第に下にうつつて下剋上（ゲコクジヤウ）の風をなし、諸侯はその領國に割據して、兵を練り勢を張り、戰爭攻伐を事とし、兵亂相つぐこと百餘年に及んだ。世にこれを戰國時代といふ。

皇室の御衰微　この時に當り朝廷では、後土御門（一〇三）・後柏原（一〇四）・後奈良（一〇五）・正親町（オホギマチ）（一〇六）の四天皇が、相ついで御立ちになつたが、幕府は皇室の御費用を奉る力なく、皇室の御料地は荒くれ武士にかすめられ、畏（オソレ）多くも日常の供御（クゴ）にすら御不自由がちでおはしたから、皇居は荒れたまゝつくろふことなく、御儀式も行はせられず、殊に卽位・大葬の御大禮さへ、大御心に任せられなかつた。かかる際にも御歷代の天皇は、專ら萬民に

後土御門天皇・後奈良天皇の御仁愛

國民の尊王

大内義隆の像

島根縣楯護介氏所藏の畫像による。

あはれみをかけさせ給ひ、後土御門天皇は、應仁の亂中たびたび世の安穩を社寺に祈らせられ、後奈良天皇は、御窮乏の最も甚しい中をしのび給ひながら、不作や惡病になやむ國民の苦しみを除かんとし、御みづから經文をうつして、災をはらはんことを御祈りになつた。

されば國民にも、心を皇室によせ奉るものがあらはれ、後柏原天皇は三條西實隆等の盡力により、後奈良天皇及び正親町天皇は大内義隆・毛利元就の獻金により、御即位の大禮を擧げさせられた。

君民一體の國體の美風は、かゝる時にもよく發揮せられ、天壤と共にきはまりなき皇基は、いさゝかの動きもなく、後織田信長の入京するや、大いに尊王の實をあげた。

關東の北條氏

さきに足利持氏の滅亡するや、關東の足利氏は、

小田原の榮え

北條早雲

神奈川縣湯本早雲寺所藏の畫像による。

上杉謙信
武田信玄

川中島の戰

上杉・武田兩氏の西上

下總の古河と伊豆の堀越とに分れて、互に公方と稱し、時に上杉氏も山内・扇谷の兩家に分れて相爭ひ、この間に乘じて、後土御門天皇の御代、北條早雲は小身から身を起し、伊豆をとり、相模を略して小田原城に據つた。子氏綱・孫氏康武略に長じ、よく遺業をついで關東の大部を併せ、民政に留意して產業を興し、小田原は東國第一の都市となつた。

上杉謙信と武田信玄

時に北條氏に逐はれた上杉憲政は、越後新潟の舊臣長尾輝虎謙信にたより、關東管領職と上杉氏とを讓つた。然るに甲斐山梨には武田晴信信玄があり、信濃に攻め入り、上杉氏と衝突するに至り、名高い川中島の戰となつた。名にしおふ天下の名將が、知謀を傾けて戰つたが、つひに勝敗がつかず、後に輝虎は北國を從へて西上せんとし、信玄も東海道筋を上京せんとした

桶狭間の戰

春日山城址

新潟縣中頸城郡春日村にあり上杉氏世々の居城であつた。

織田信長

尼子氏と大内氏

毛利元就

島根縣簸川郡鰐淵村鰐淵寺所藏の畫像による。

山口の榮え

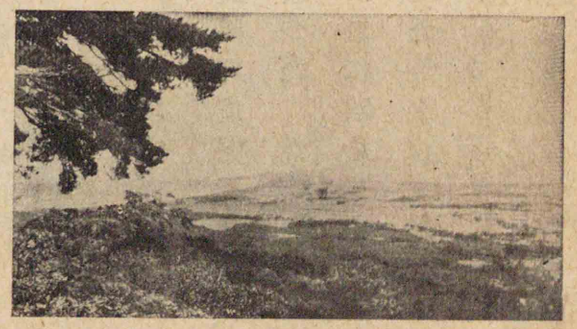
が、共に病死して望を果さなかつた。

駿河の今川氏

この頃駿河(静岡)の今川義元もかねて上京の志をいだいてゐたが、正親町(一〇六)天皇の永祿三年、大軍を進めて尾張に入り、桶狭間(ハザマ)附近に陣どつた。時に尾張の織田信長は、斯波氏の家臣から起つて勢を得、義元の不意を討ち、これを殺して勇名をとゞろかし、今川氏はこれから衰へた。

中國地方の形勢

中國地方では、山名氏にかはつて、出雲に尼子(アマコ)氏が起り、屢々周防(スハウ)の大内氏と戰つた。大内氏は領地ひろく、且つ明・朝鮮との通商の利を占め、その城下山口は一時すこぶる繁昌した。



嚴島の戰

長曾我部元親

龍造寺・大友・島津諸氏

正親町天皇

然るに義隆に至り、富强にまかせて文事にふけり、武備をゆるくし、家臣陶晴賢(スエハルカタ)のために弑せられた。そこで安藝(廣島)の毛利元就は、後(一〇五)奈良天皇の弘治元年義兵を擧げて、晴賢を嚴島に攻め殺し、大内氏の舊領を併せ、ついで尼子氏をも攻めてこれを降した。

四國・九州の形勢

四國では、管領家の細川氏が衰へ、土佐から長(チヤウ)曾我部元親(ソカベモトチカ)が起つて、殆ど四國の大部分を從へ、九州では肥前(佐賀)に龍造寺(リユウゾウジ)氏が興り、豐後(ブンゴ)(大分)の大友氏、薩摩の島津氏なども、四近の地を併せて、漸く勢を張つた。

第二十六章　織田・豐臣二氏の尊王・統一

織田信長の入京

時に正親町(オホギマチ)(一〇六)天皇は、信長の武略をたのもしく思召(オボシメ)し給ひ、永祿十年勅使を下して、御料地回復の大命を降された。信長大いに感激(カンゲキ)し、着々上京の準備中、たまたま前將軍義輝の弟義(ヨシ)

信長の勤王
足利義昭

織田信長

畫像は愛知縣西加茂郡高橋村長興寺にある。その書風と印章とを併せ見るべく印章には『天下布武』と刻す。

淺井長政夫妻の像

東京帝國大學史料編纂所掛長圖による。長政の妻は信長の妹で淀君の母であり柴田勝家に再嫁し勝家と共に北庄で死んだ。

姉川の戰

昭がたよつて來たので、翌十一年これを奉じて上京し、幕政をみだした三好・松永の徒を逐ひ、御所を修理し、御料を獻じたので、京都はやゝ復舊し、やがて義昭は將軍に任ぜられた。

近畿の平定

かくて信長は、近畿の平定に力をつくし、元龜元年德川家康の援を得て、近江の淺井長政、越前の朝倉義景の聯合軍を近江の姉川に破り、ついでこれに味方した比叡山の僧兵を攻めて、寺堂を燒きはらつた。時に將軍義昭は信長を除かんとはかり、かへつて信長に逐はれた。即ち天正元年で、義滿が征夷大將軍になつてから、十三代凡

室町幕府の滅亡

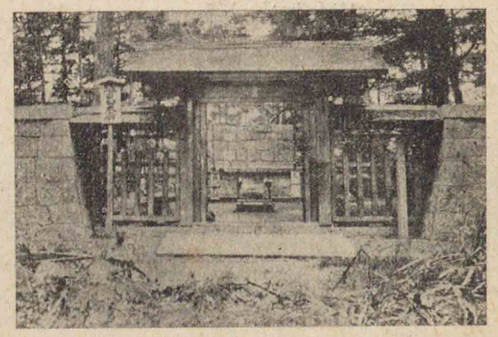
安土城址

滋賀縣安土城址二の丸にある信長の廟所である。

長篠の戰

德川侯爵家所藏屏風繪によると。向つて左方は德川の軍、右方は武田勢、柵の部隊をめぐらし鐵砲を用ひてるのが珍しい。

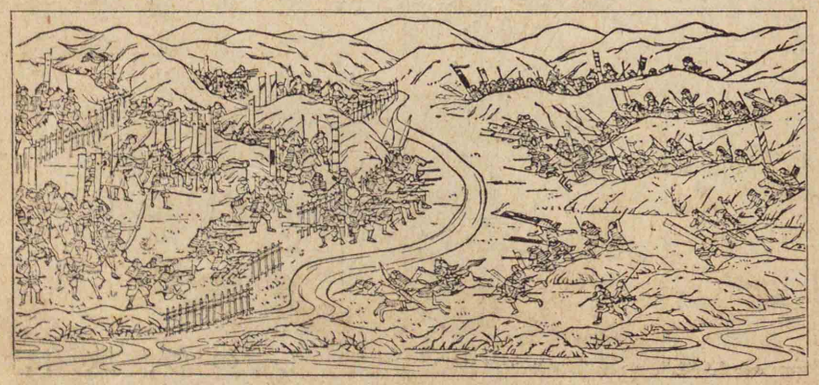
安土時代
武田信玄の西上
三方ケ原の戰



そ百八十年で滅び、信長が足利氏に代つて、天下に號令するに至つた。信長は壯大な居城を近江の安土に築き、天正四年こゝに移つたので、世に信長を中心とする時代を安土時代といふ。

武田氏の滅亡

甲斐の武田信玄も、かねて西上の志をいだき、元龜三年大兵をひきゐて遠江に入り、德川家康を三方ケ原に破り、進んで三河に入つたが、間もなく病



武田勝頼

高松城　岡山市西方約十二粁にある。田園の中にある平城、水攻めにすれば全部浸水するやうな地形で砦は守將清水宗治を記念するものである。

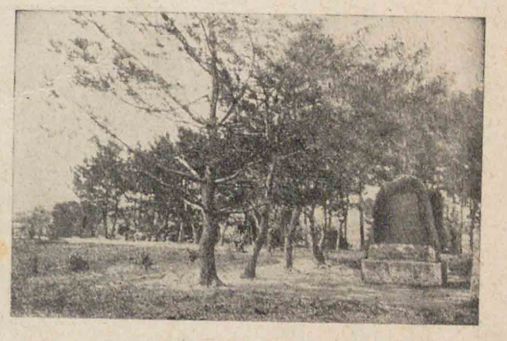
武田氏滅ぶ

上杉氏失勢

毛利輝元

高松城攻圍圖

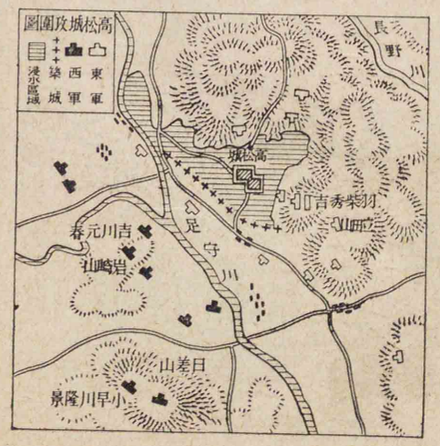
羽柴秀吉



死した。その子勝頼は、志業をついで三河に出兵し、織田・徳川の聯合軍と長篠に戰ひ大敗し、天正十年信長は家康と共に甲斐に攻め入り、つひに武田氏を滅ぼした。この頃越後の上杉謙信も、西上を企てたが、準備中に病死し、養子景勝その後をついで、進取の氣勢を失つた。

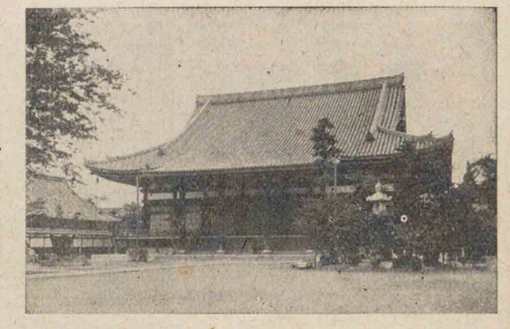
中國經略

中國の毛利輝元は、遙かに上杉・武田二氏と結び、或は足利義昭をかくまひ、信長に對して一敵國の觀を呈した。そこで信長は、部將羽柴秀吉に命じてこれを討たしめたが、秀吉進んで備中



本能寺　京都市にある、今の建物は後世のものである

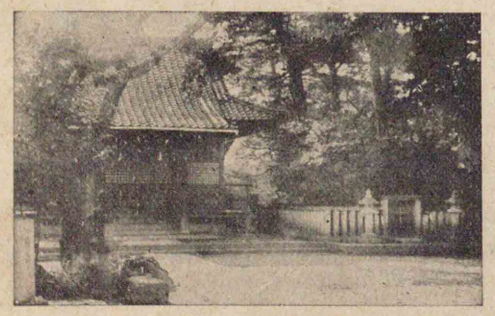
北庄　福井市にある柴田勝家居城の址で社は勝家をまつる柴田神社である。



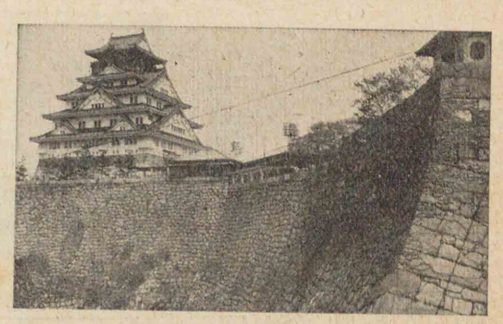
岡山の高松城を圍み、これを水攻めにしたけれど、毛利氏の大軍が來りたすけたので、急を信長に告げて應援を求めた。信長自らこれを救はんとし、入京して本能寺に陣したところ、先發の部將明智光秀が急にそむいて、信長を弑した。時に正親町天皇の天正十年で、全國平定の業も半途でくじけた。

山崎・賤ヶ嶽の戰

秀吉は、尾張の農家に生れて、信長に仕へ、その才能をみとめられて、重くとりたてられた。高松の陣中で、本能寺の變を聞くや、毛利氏と和して急に軍をかへし、織田氏の宿將がなすなき間に、山崎の一戰で明智光秀を



山崎の弔合戰
賤ケ嶽の戰
大阪城
大阪市にある。現在の大阪城でもとの一小部分が殘つてゐるといふ。
徳川家康
小牧山の對陣



打滅ぼし、主君の弔合戰をした。かくて秀吉の威名が俄かにあがつたので、柴田勝家はこれを除かうとした。秀吉これを近江の賤ケ嶽に破り、跡を追うて越前に入り、つひに勝家を滅ぼしたので、もはや秀吉に抗するものなく、信長の遺業は、おのづから秀吉の手に歸した。こゝに於て秀吉は、宏大な大阪城をきづき、伏見・堺の商人をうつして、今の大阪市の基を立て、天下統一の業を進めた。時に徳川家康は、信長の恩義を思ひ、その諸子の不遇なのに同情し、織田信雄をたすけて小牧山に據り、秀吉の軍と對陣したが秀吉はこれと戰ふことの不利をさとり、家康と和して歸り、家康は暫く忍んで機を待つの態度を

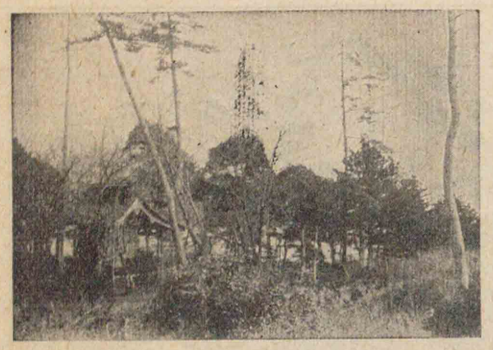
〔織田氏系圖〕
信長―信忠―秀信（三法師丸）
　　―信雄
　　―信孝

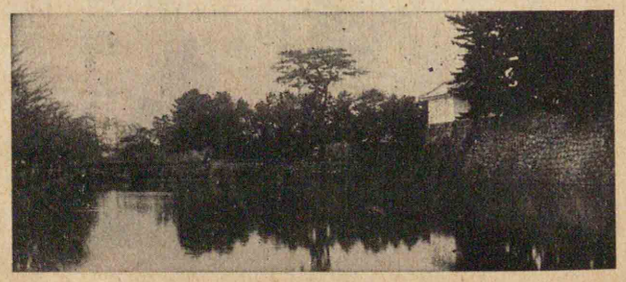
四國・北國の平定
小田原城
現存する城址の一部で神奈川縣小田原町にある。
九州の平定
關東の處分
石垣山
小田原の西南にある一小丘、小田原攻圍の際豐臣秀吉の本陣たりし所である。
奥羽の諸將の來附

とつた。

海内の平定

その後秀吉は、長曾我部元親を降して四國を定め、上杉景勝を從へて北國を服した。この頃九州では、島津義久が勢を得、殆ど九州を併呑せんとしたので、秀吉は九州に下り、これを降し、更に後陽成天皇の天正十八年、大軍をひきゐて關東に下り、小田原城を攻圍することの百餘日、北條氏を滅ぼしてその地を收め、これを徳川家康に與へて、江戸に居らしめた。この時伊達政宗以下、奥羽の諸將も來り屬したから、應仁以來百餘年の戰亂が始めて收まり、全國平定の





聚樂第

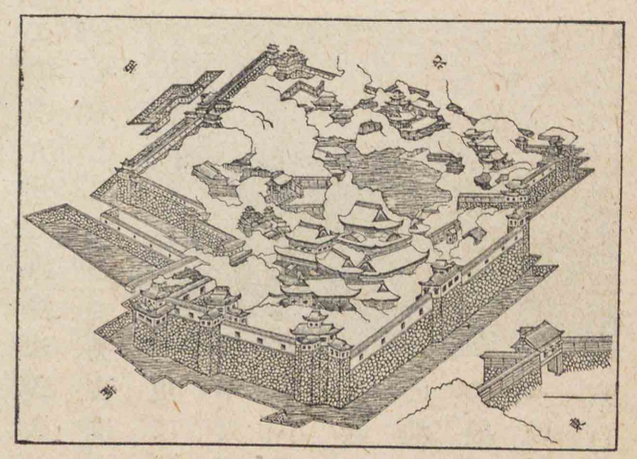
海北友松の筆に成る古圖による。城と宮殿とを兼ねた大建築で今その一部が西本願寺（京都市）等に殘つてゐる。

後陽成天皇

豐臣秀吉とその夫人の像

秀吉の像は高野山成慶院所藏の畫像により夫人の像は北政所（京都市東山高臺寺所藏）の畫像による。

皇室の尊嚴を恢復す



命に服すべきことを誓はせた。なほ皇居を造營し奉り、皇大神宮を修めて、久しくすたれた遷宮の式を復するなど、皇室の尊嚴は漸く恢復せらるゝに至つた。

業が全く完成した。

秀吉の尊王　秀吉は天正十三年從一位關白となり、ついで太政大臣に任ぜられ、豐臣の姓を賜はつた。秀吉皇恩のあつきに感泣し、天正十六年京都の聚樂第に、後陽成天皇の行幸を仰ぎ、御料地を獻じ、諸大名をして、皇室を尊び關白の

諸大名

五大老・五奉行

諸制度の統一

ポルトガル

鐵砲

集權統一の政治　秀吉は、天皇を奉じ、關白として政をとり、從來の諸大名を各地に封じたけれど、よくこれを統べて、集權政治を行つた。即ち中央に五大老を置き、大事を議せしめ、五奉行を置いて民政をつかさどらしめた。また大判・小判を鑄て、貨幣制度を統一し、全國の土地をしらべて田制や稅制の基を確立したので、地方によりまちまちであつた諸制度が統一せられた。

第二十七章　西洋文物の傳來　安土・桃山時代

の外交と文化

ヨーロッパ人の來航　戰國時代の頃からヨーロッパに於ては、通商航海の業大いに進み、殊にイスパニヤ・ポルトガルの二國が最も發達してゐた。されば後奈良天皇の天文十二年、ポルトガルの商船が、大隅鹿兒島の種子島に來り、島主種子島時堯に鐵砲を傳へ、次第

イスパニヤ

サヴィエルの像

慶長元年（西紀一五九六）アムステルダム版、ホラルダウスツルセツシヌス原著サヴィエル傳による。

天主教

キリスト教の保護

キリスト教ひろまる

に四方に傳はり、後大砲も輸入せられて、わが國の戰術・築城などに著しい影響を與へた。ついでイスパニヤ人も來航し、天文十八年には宣教師サヴィエル（イスパニヤ人）が來り、鹿兒島・平戸・博多・山口・京都・大分などをめぐつて、キリスト教を弘めたが、わが國ではこれを切支丹宗・天主教などいひ、江戸時代の初めにかけて、これに歸するものが次第に多くなつた。當時我が國では、これ等の人々を南蠻人と稱した。

信長とキリスト教

織田信長は延曆寺を燒き、一向一揆を討つて、佛教を抑へたが、キリスト教をば保護して、京都安土に教會堂を建て、その布教を許した。されば外國人の宣教師が、相ついで渡來し、その教は九州・中國から、近畿・東北地方にまでもひろまつた。殊に九州が最も盛んで、豐後の大友氏、肥前長崎の大村氏・有馬氏などは、正

大友・大村・有馬三氏のローマ遣使

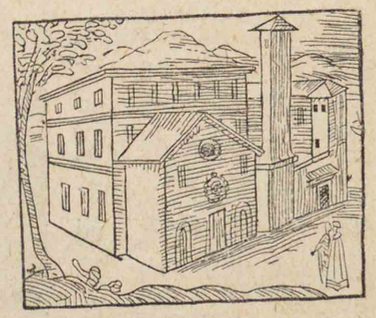
安土の學校

ローマ法王グレゴリー十三世の寄附金により建てられたキリスト教の學校で音樂の如きも教へられたといふ。

學藝の傳來

秀吉の禁教

親町天皇の天正十年、遠くローマ法王に使者を遣した。これわが國人のヨーロッパに渡航したはじめである。



キリスト教の影響

かくキリスト教の弘まるにつれ、西洋の學藝等も傳はり來り、また外國語も多く用ひられて、今日の國語にまで訛り傳へられてゐる。けれども中にはわが國風にそむくものがあり、また布教を目して、領土侵略の手段なりとする說も行はれて、天正十五年秀吉は斷然キリスト教を禁止した。しかし貿易は大いに奬勵し、ポルトガルの印度總督と好を通じ、イスパニヤのフィリッピン太守や、臺灣などにも使を送つて、入貢を促した。この頃長崎・堺・京都などの商人は、秀吉の免許をうけ、遠くこれ等の地方に渡り、貿易の利を收めた。

朝鮮との交渉

名護屋城址

佐賀縣東松浦郡にある。海にのぞみ今は石垣等を存するのみで壹岐對馬を望見する。

文祿の役

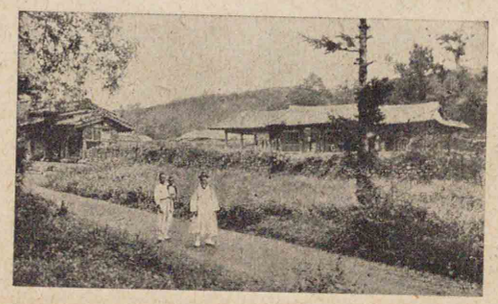
小早川隆景と碧蹄館

隆景の像は廣島縣豐田郡米山寺にある。碧蹄館の畫像によると京城府外にある。

文祿・慶長の役

秀吉は、國内平定の後、國威を海外に輝かさうと欲し、先づ對馬の宗氏に命じて、朝鮮との修好をはからしめ、また朝鮮王をして、我が意を明に通ぜしめんとした。然るに朝鮮王これを聽かなかつたから、後陽成天皇の文祿元年、本營を肥前の名護屋に進め、加藤清正・小西行長を先鋒として、大軍を朝鮮に出した。

時に朝鮮は、政治がみだれ、國勢が衰へてゐたから、忽ち敗れて、國王は遠く義州にのがれ、明の援軍は、小早川隆景・立花宗



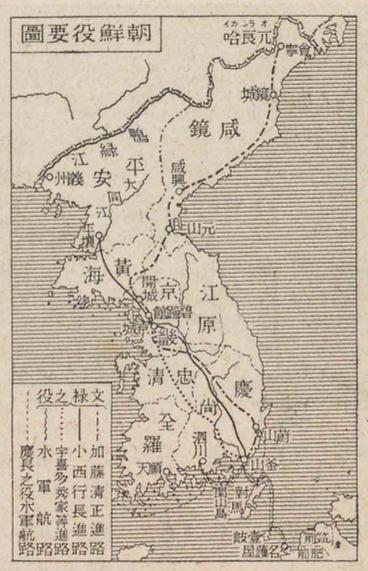
朝鮮役要圖

慶長の役

加藤清正の像

京都勸持院所藏の畫像による。旗は東京帝室博物館にあり法華宗の信者であつたから南無妙法蓮華經の題目を書く。

戰役の影響



わが軍は深く攻め入らず、加藤清正・淺野幸長は、蔚山に籠城して大敵を破り、島津義弘は泗川で大勝を得た。

けれども慶長三年、秀吉は病んで伏見に薨じ、遺命して出征の將士をひき上げたから、雄圖むなしく挫けた。しかし國民進取の氣を勵まし、また出征の諸將中には、製陶・織物などの技術家をつれ歸り、各地に工藝の發

茂等と戰ひ、碧蹄館で大敗した。そこで沈惟敬なるものをして、我をあざむいて和を結んだが、忽ち不信が露はれて、慶長元年再征の令が下つた。そして翌年大軍がふたたび渡鮮したが、

達を見るに至り、活字印刷の術も、この役を機としてわが國に傳はつたが、朝鮮はその後凶作が相つゞき、國力回復の暇がなかつた。

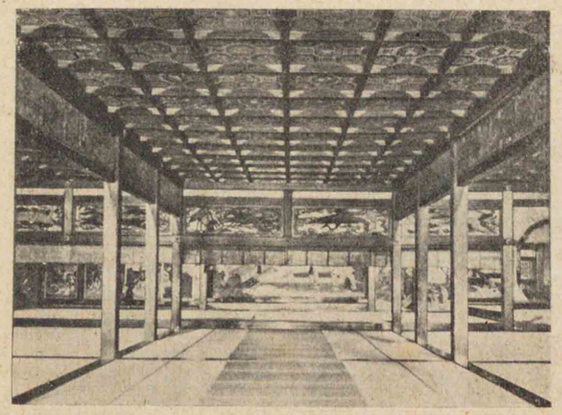
桃山時代の文化

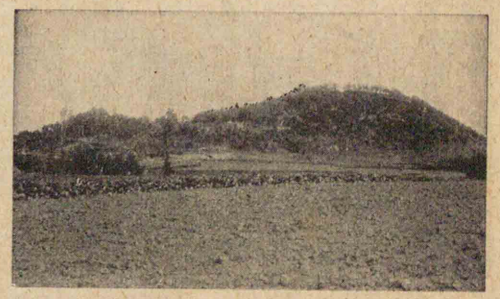
秀吉が、晩年に築いた伏見城の地を、後世桃山と呼んだので、秀吉を中心とする時代を世に桃山時代といふ。この時戰亂が治まつて、美術・工藝が頗る發達し、繪畫には、狩野永徳・山樂等が出て、健筆をふるひ、聚樂第・桃山城などの建築・彫刻も、著しい特色をあらはした。即ちいづれも雄大で花々しく、思ひつきが新奇

蔚山城址
慶尚南道にあり加藤清正等の籠城で名高い。

桃山時代
美術・工藝

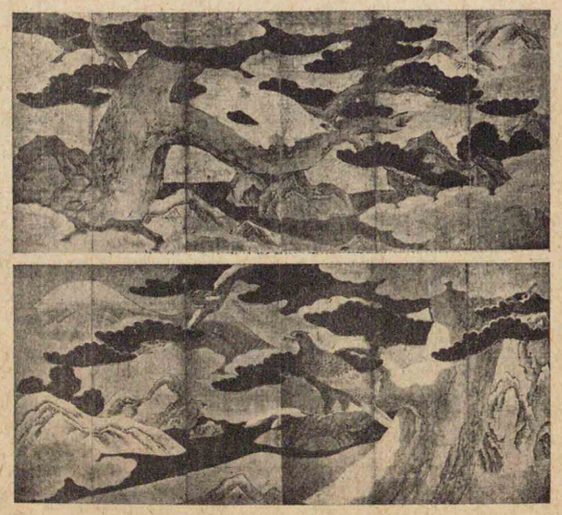
西本願寺書院
もと伏見城にあつたもので桃山時代の建築中最も豪華の面影を傳へるものである。





松鷹屏風
狩野永徳筆で東京美術學校に藏せられるこの時代の特色を示す金碧の障屏畫である。

で、男らしい元氣にみち、革新に燃えるこの時代の精神があふれてゐる。また茶湯が盛んで、千利休の如き名人が出で、高臺寺蒔繪の如き、精巧な漆器も製作せられた。



産業の發達

製陶・染織その他一般産業も次第に發達したが、殊に金山・銀山等の開發は、少からず西洋の影響をうけた結果と考へられる。要するに戰國地方割據の後をうけて、統一的氣運が盛になり、土地・租稅・貨幣などの制度が定まり、關所等が多く除かれ、座も衰へて、交通・商業の自由が進められ、遠隔の地には爲替も行はれた。されば城下町や港市などの發達著しく、

社會文運の一新

社會文運が一新せられた。

近古史大要

近古史は、鎌倉幕府の始めから、豐臣秀吉の薨去まで、凡そ四百年にわたる。後鳥羽天皇の御代源頼朝が幕府を開いてから、後醍醐天皇の御代、北條氏の滅亡に至るまで、約百五十年間を鎌倉時代といひ、武家政治の基が固められ、内は法制の整備佛教の興隆、藝術の發達、士風の勃興など、政體の變化と共に世態も一變したが、外は前古比なき大國難であつた元寇を擊ち退け、以て國威を海外にまでも輝かした。その後幕府は失政多く、次第に人心を失ひ、つひに後醍醐天皇の御代に至り、政權が朝廷に歸し、いはゆる建武の中興を見ることゝなつた。けれども人心なほ武家政治になれ、足利尊氏は機をうかゞひ、武家政治の再興を企て朝廷は吉野にうつり、約六十年に近い吉野時代となつた。この間幾多の忠臣義士が、心血をそゝいで回復をはかつたが、官軍次第に利を失ひ、後龜山天皇に至り京都に還幸せられ、皇位を後小松天皇に御讓りになつた。この後約百八十年間、天下の政令は室町幕府から出で、いはゆる室町時代と稱せられたが、足利氏は、初めから權臣を制することができないで、幕府の威令が立たず、應仁の大亂以後は、天下甚しくみだれ、戰國時代と稱せられること約百年間に及んだ。かゝる間に織田信長が出で、群雄にさきだち、入京し、天下統一の基を開き、豐臣秀吉その後をうけて、統一の業を完成し、進んで海外にも發展するに至つた。

第四篇　近世

第二十八章　江戸幕府の創立　封建制度

徳川家康
東京上野寛永寺所藏畫像による。狩野探幽の筆に成り傍のはその書である。

關ヶ原の戰

豐臣秀吉の薨ずるや、嗣子秀頼はなほ幼少であつたから、遺命により、徳川家康は、伏見城にゐて政をとり、前田利家は、大阪城で秀頼をたすけた。家康は三河の出身で、新田氏の後と稱せられ、廣大な關東を領して、實力・名望ともに高く、利家薨後殆ど天下の實權をにぎつた。そこで秀吉の信任をうけた石田三成は、上杉景勝・毛利輝元等の同志とはかり、家康を除かうとして、後陽成天皇の慶長五年關ヶ原の戰が起つた。この役

前田利家
福井縣光禪寺所藏の畫像による。

石田三成

全國の諸大名は、大抵東西の兩軍に分屬したので、豐臣徳川の興敗を決するいはゆる天下分目の戰となり、家康が大勝して、天下の權をにぎることゝなつた。

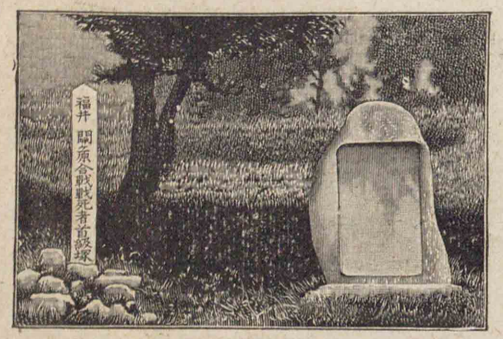
天下分目の戰

關ヶ原役要圖

豐臣氏の滅亡

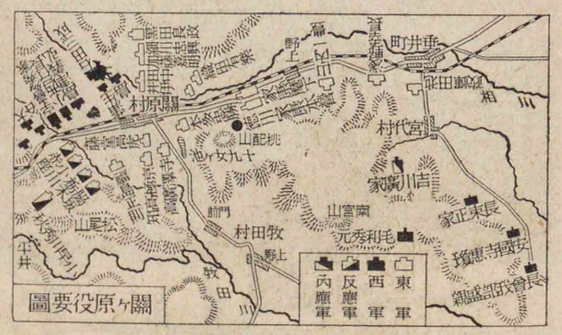
戰後秀頼は、大阪城に居り、攝津・河内・和泉を領する一大名となつたが、豐臣氏の舊臣で心を寄せるものもあり、資力も豐かであつたから、家康はこれを憚つて、豐臣氏を激せしめ、後水尾天皇の慶長十九年大阪冬の陣を起し、更に翌元和元年大阪夏の陣を起して、つひに豐臣氏を滅ぼした。

豐臣氏の地位

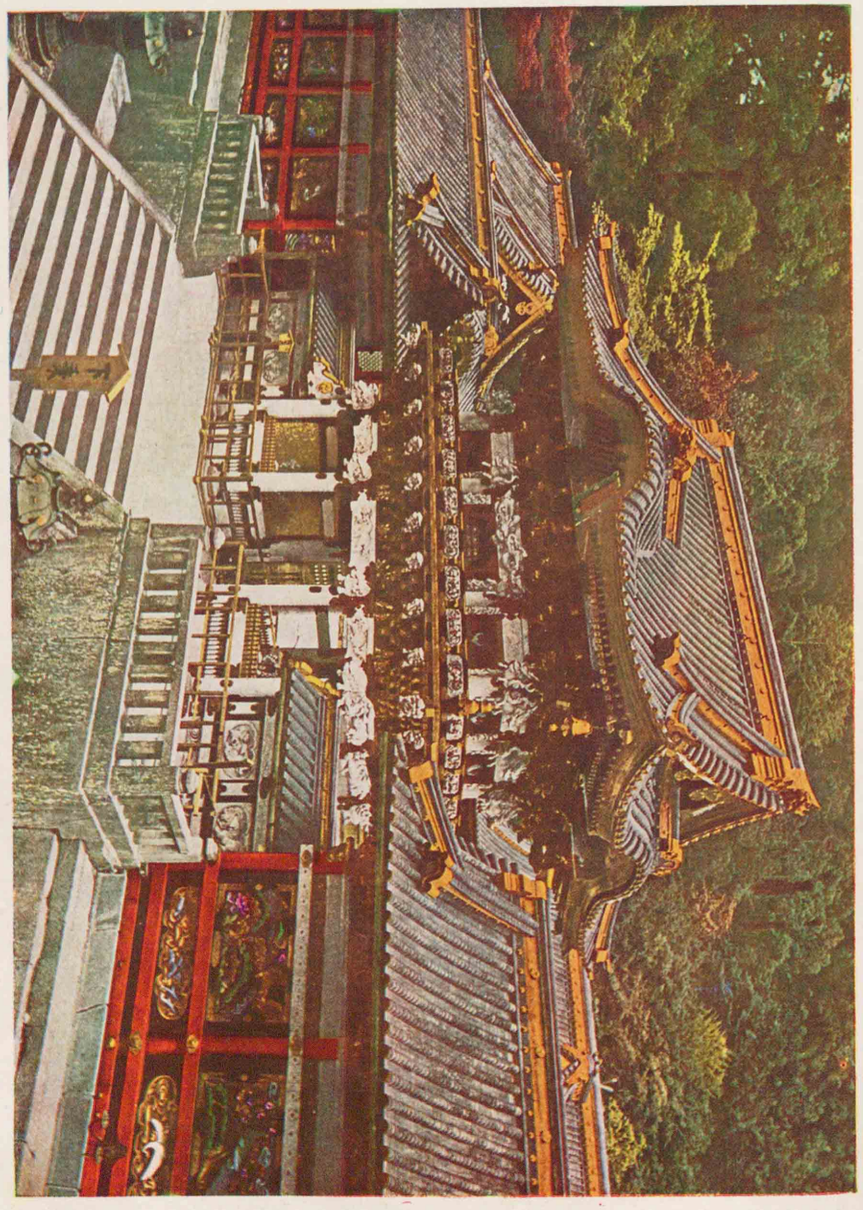


關ヶ原首塚
岐阜縣關ヶ原にある。西軍將士の首を埋めた塚である。

大阪冬・夏の陣



關ヶ原役要圖



東の光日（門明陽）宮照

江戸幕府

徳川秀忠
徳川家光

江戸城

江戸城及び諸侯の邸宅の位置を示したもので、慶長二年の原図による。天主閣のある本丸は將軍の居城、西丸は將軍世子の居城であつた。

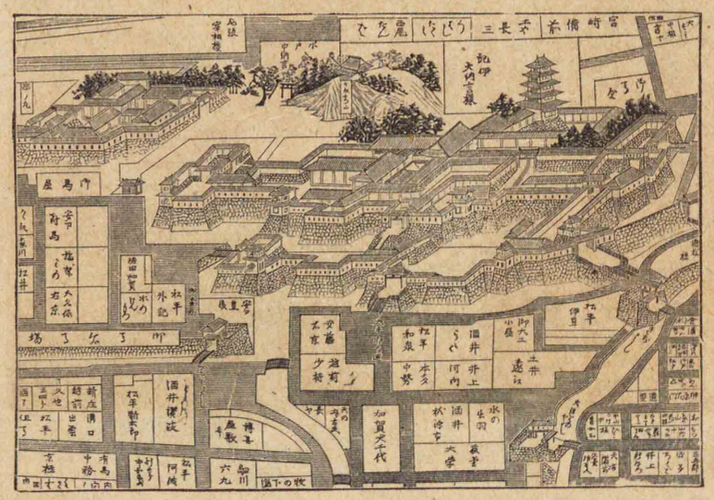
三役

江戸幕府の創立

これよりさき慶長八年、家康は征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開き、在職二年餘で、職を子秀忠に讓り、駿府（静岡市）に退いて、大御所（オホゴショ）としてなほ大事を決した。秀忠はよく父の業を守り、その子家光は英明果斷、祖父家康を深く尊信し、その墓を下野（栃木）の日光山にうつして、壯麗な東照宮をいとなみ、よく諸侯を威服し、幕府の基を固めた。

幕府の組織

幕府の重職には、大老・老中・若年寄（ワカドシヨリ）の三役があり、大老は大事を總裁するが、必ずしも常置の職ではなく、老中が主として政務を

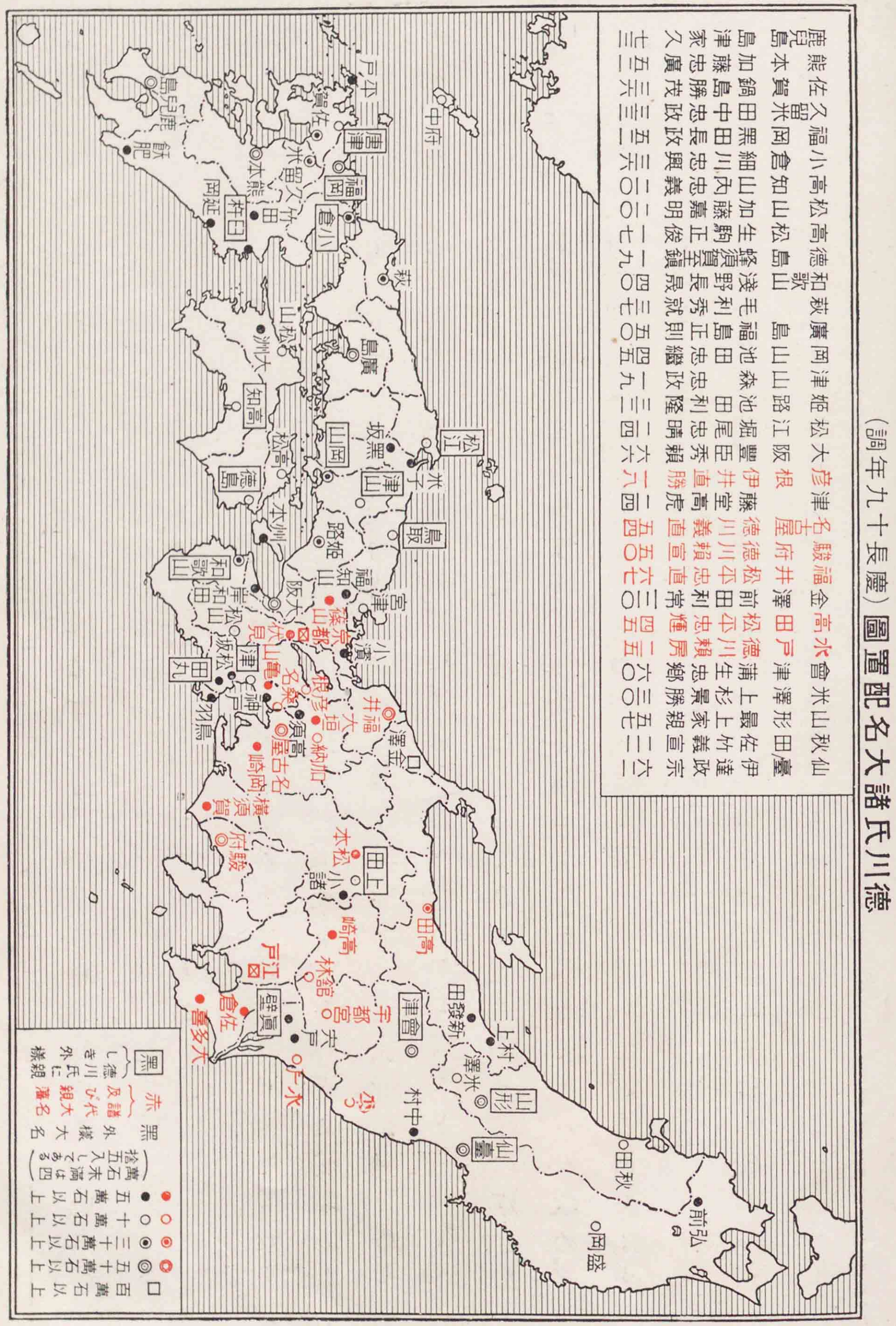


三奉行
所司代・城代
封建制度
種別
配置
武家諸法度
參勤交代

掌り、若年寄がこれを助けた。その下に寺社奉行・勘定奉行・町奉行などがあり、諸國の寺社の政務、幕府の財政、江戸の市政を分け掌らしめた。その他京都には所司代、大阪・駿府には城代を置き、要地を幕府直接の支配とし、地方の大部分は諸大名の領地とし、その領内の自治を許して、いはゆる封建制度をとつた。

諸大名に對する政策

諸大名は、尾張・紀伊・水戸の御三家を始め、德川氏の一族である親藩、井伊氏・本多氏等の如く三河以來德川氏の舊臣たる譜代、家康と共に秀吉に仕へた前田・伊達・島津・毛利諸氏の如き外樣の三種に分たれ、その配置が周到な注意の下に行はれ、外樣大名は領土が廣大であるけれど、江戸に遠い地方を治め、且つ幕府の重職にたづさはらなかつた。加ふるに武家諸法度を制定し、諸大名の築城や婚姻等に制限を加へ、江戸の邸宅に妻子を置かしめ、隔年に江戸につめさせる參勤交代の制を立て、嚴にこれを勵行



したから、封建の制をとりながらよく中央集權の實をあげた。

第二十九章 江戸時代の外交 鎖國

對馬の宗氏
慶賀使の來朝
慶賀使待遇の改正
明の滅亡

朝鮮との交通

文祿慶長の役後、朝鮮との國交は絶えたが、家康は對馬の宗氏を介し、これと交渉して國交を復し、朝鮮は後陽成天皇の慶長十年に至り、漸くその使者を來朝せしめ、家光就職の時から、新將軍の職につく毎に、慶賀使を來朝せしめることゝなつた。然るにわが國では、朝鮮の慶賀使をもてなすことあまりに厚きに過ぎたので、六代將軍家宣の時、新井白石が建議してこれを改め、將軍家齊以後には、事實對馬の宗家と朝鮮との交通の如き觀を呈するに至つた。

支那との交通

明とわが國との國交は、つひに回復しなかつたが、明は清のために攻められ、後西天皇の御代に至り、つひに滅亡し

清商の來航

オランダ

平戸の商館

オランダの商館を示すもの でモンクヌス日本誌による。石垣の一部はオランダ石垣と稱し現存す。

イギリス

平戸

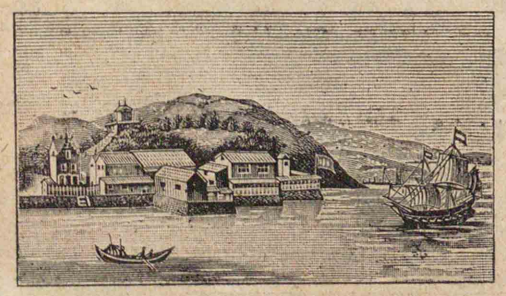
た。されば朱舜水・隱元など、明の遺臣のわが國に來り投ずるもの多く、學藝・佛教などに新味をもたらしたが、清の商人は、ひきつゞき長崎に來航して、白絲(生絲)絹織物・陶磁器等をもたらした。

オランダの來航

この頃、オランダも東洋貿易を營んだが、慶長五年、その商船が豐後に來着するや、家康はオランダ人ヤン＝ヨーステン・イギリス人ウリアム＝アダムス(三浦按針)等の乘組員を江戸に召し、外交上の顧問とした。かくて慶長十四年以來オランダは通商を許され、ついでイギリスも來航して平戸で貿易したが、間もなくイギリス人は退去し、ひとりオランダのみがひきつゞき來航した。

國民の海外發展

當時わが國民の間に、海外發展の氣運が大いに興り、薩摩の島津家久

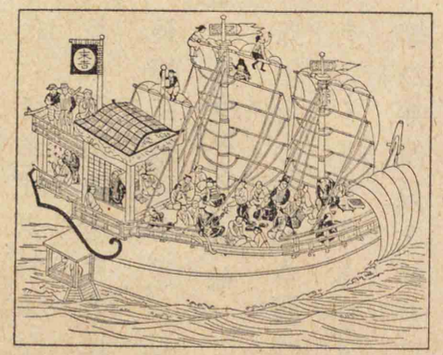


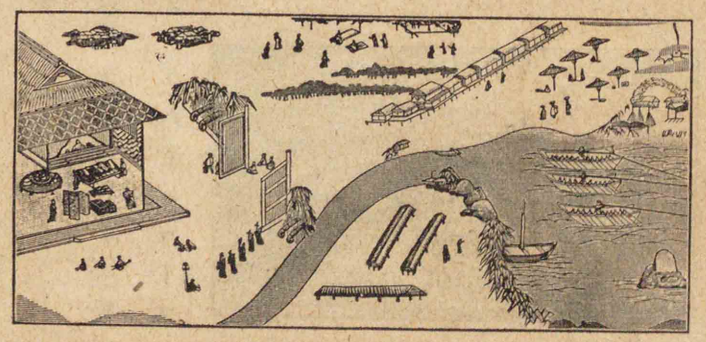
は琉球沖繩を服したが、長崎の末次氏、大阪の末吉氏、京都の角倉氏などの商人を始め、西國の諸大名・社寺等は、幕府から通商許可の朱印狀をうけ、御朱印船と稱する貿易船を遠く澳門・安南・シャム・ジャヴァ・ルソン等に遣はし、これ等の所には、日本町と稱する居留地の設けられたものもあつた。されば中には、外國に於て、威をかゞやか

朱印狀　德川家康が交附した今の佛領印度支那への渡航免許狀である。

日本町　交趾即ち今の佛領印度支那の日本町である。小船が着港した日本船を曳いて入港するのが例で、軒を並べて立つのが日本町、向つて左方は國王の邸宅、邦人が國王に進物を獻するところである。

御朱印船　京都市清水寺所藏の額面による。末吉船と稱せられるものである。船中或は書を讀み或は三味線をひいてゐる。





南洋貿易要圖

山田長政

濱田彌兵衛

支倉常長

支倉常長の像　ローマのアンゼロ圖書館所藏の銅版畫像による。

洋をよこぎり、ローマに使せしめたのも、この頃のことである。

天主教の禁

家康は秀吉の方針をつぎ、天主教を禁じたけれど、一方海外との通商を盛にしたので、充分にその目的を達しなかつた。家光に至り、貿易の利すものもあらはれ、駿河の山田長政は、元和の頃シャムに渡り、その國難をしづめて功を立て、寛永の初め、長崎の濱田彌兵衛は、臺灣にゐたオランダ人の專横をこらした。仙臺の伊達政宗が、支倉常長をして、太平・大西兩

徳川家光の禁教

踏絵と制札

踏絵は木・銅などでつくり耶蘇の像を刻み制札は宣教師及び教徒を訴へ出たものに對し賞金を與へる旨の掲示である。

宗門改

島原の亂

鎖國

島原などの信者は、幕府の壓迫をいきどほり、島原半島の原城によつて、幕府にそむいた。これを島原の亂といひ、信者の勢頗る強く、幕府は老中松平信綱をして、漸くこれを平定せしめた。この後幕府は一層教禁を固くし、天主教に關係なきオランダ人にのみ、長崎の出島にとゞまり貿易することを許し、いはゆる鎖國を斷行して、天主教の根絶につとめ、鎖國は祖法として、この後長く幕府の對外を失ふも、禁教の實をあげんとし、明正天皇の寛永十年頃から、次第にこれが取締を嚴にし、或は邦人の海外渡航を禁じ、或は宗門改を行ひ、キリストの像を踏ませなどして、信者を嚴刑に處した。されば天主教の最も盛に行はれた島原半島・長崎・天草諸

長崎の出島

ヒルト「日本史」による。前方の狹い水道は港口である。

保科正之

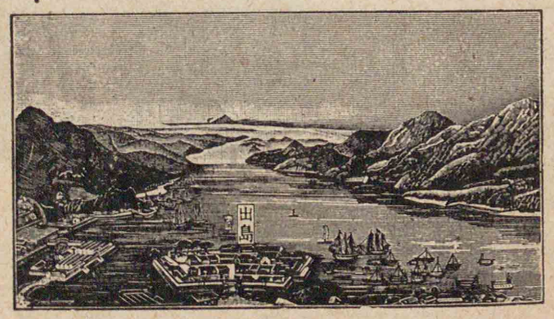
綱吉の初政

方針となつた。これがために政令・思想の統一等に成功したけれど、國民の發展的意氣を挫き、世界の大勢から孤立して、文明の交流から遠ざかることゝなつた。

第三十章　元祿の世相　經濟の發達

江戸幕府の守成

一二〇。後光明天皇の御代に徳川家光薨じ、その子家綱年少で職をつぐや、叔父保科正之等これをたすけ、よく政治をとゝのへて、守成の實を擧げた。然るにその晩年大老酒井忠清がひとり權をほしいまゝにし、幕政がやゝみだれた。ついで一二一。靈元天皇の御代、家綱薨じてその弟綱吉將軍となり、皇室を尊び、學問を好み、孝義をはげまし、政治に心を用ひたから、初政見るべきものがあつた。



江戸時代の工藝　花瓶　初代柿右衛門作

元祿の世相

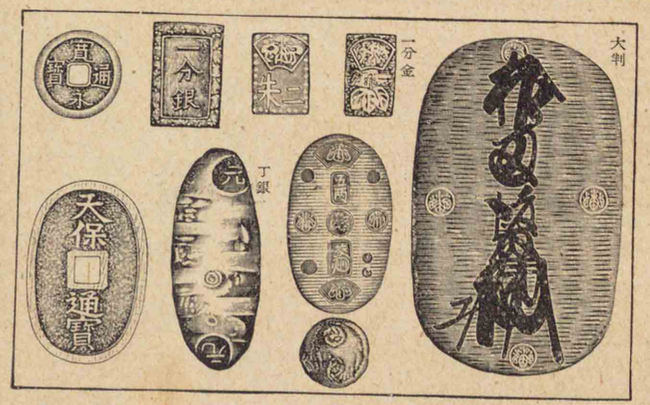
新井白石

幕政みだる

江戸時代の貨幣

慶長大判（上）、慶長一分金、天保二朱金、慶長一分銀、寛永通寶（下）、天保小判、甲州金、元祿丁銀、天保通寶

元祿風



然るに綱吉は程なく政治に倦み、諸政を寵臣柳澤吉保にまかせて遊樂にふけり、あつく佛教を信奉して、僧侶の說に惑ひ、生類憐の令を發し、また幕府の財政が乏しくなつたのを補はうとして、粗惡な貨幣をつくり、士民の生活を苦しめた。かく幕政がゆるんだ上に、太平が久しくつゞいたから、士民の質實剛健な氣風が漸ぐすたれ、華美を好む傾向が盛になつた。されば歌舞伎淨瑠璃などが大いに流行し、衣服調度も次第に華麗を競ふやうになつた。時に東山天皇の元祿年間であつたから、世にこの時代を元祿時代といひ、かゝる風尙を元祿風といふ。

綱吉薨じて、甥家宣、家宣の子

柿右衞門は肥前松浦郡の陶工、初代は慶長年間に創業して元和・正保の頃に至り、精巧な妙技を發揮して柿右衞門風なるものを起した。即ち主として花鳥虫魚を用ひ、配置巧みな構圖を案出し、うるほひ豐かな描法をあらはし、殊に色彩の調子が雅味に富み、明朗な印象を與へる。圖に示した花瓶は高さ約二一・五糎(七寸一分)、鹽原又策氏の所藏である。

幕政の改革

貿易の制限

産業の開發
交通の進歩

飛脚

飛脚とは急報を送る人夫で有方の二人は幕府の繼飛脚、中央は大急公用飛脚、左方は馬に乘つてゐるので東海道三度飛脚である。

家繼(イヘツグ)、相ついで將軍となり、博學で識見高き新井白石(アラヰハクセキ)を信任して、その議を用ひ、將軍綱吉の弊政を改めた。白石は心を盡して將軍を輔佐(ホサ)し、殊に皇子・皇女の多く佛門に入り給ふ風を改めんことを建議し、朝鮮の使者を待遇する法を改めて我が國の體面を重くしまた中御門(ナカミカド)天皇の正德五年、長崎に於けるオランダ・清との年々の貿易高を制限し、金銀の海外に流出することを防ぎ、國民經濟の基を固くした。

産業・交通の發達

江戸幕府は、農民保護のため土地の永代賣買を禁じ、水利を開き地味をしらべて、穀類・甘蔗・棉などの栽培(サイバイ)をすゝめ、各藩も自給自足の方針をとり、産業の開發につとめたから、米・繭などの農産が增加し、工業も染織を始め、陶磁器・漆器等の製造が盛に行はれ、産業・經濟

商業都市

の發達漸く見るべきものが多かつた。更に交通も頗るとゝのひ、東海道を始め江戸から全國各地に到る主要路が開かれ、飛脚が京都・大阪・江戸間を往來して通信の便もあり、河川や海上の水運も次第に發達し、また大判・小判などの貨幣が流通し、掛屋・札差等の金融業者も發生し、商業が發達した。されば大名の城下町や港市が愈々榮え、江戸・大阪は國内商業の二大中心をなし、從つて町人の金力が、社會上大いに重きをなすに至つた。

隱元

長崎市聖福寺所藏、喜多元規筆の畫像による。

第三十一章　文教の復興

佛教の地位

佛教　德川氏は、佛教を保護して、治教をたすけしむる方針をとつたが、法度を定めて、諸大寺をも嚴に幕府の支配に從はせた。島原の亂後、佛教の力により天主教を禁絶せんとし、佛教は國教のやうになつた。しかし明から隱元が來て、黃檗宗（禪宗の一派）を傳へた外は、別に新宗派を立つることもなく、一般に活氣を失ひ、人々を教化する力を失つた。

藤原惺窩と林羅山

向つて右は惺窩、左は羅山である。

家康と學問

中江藤樹

東京帝國大學史料編纂所所藏の畫像による。その書は通稱『與右衛門』を草體に書いたものである。（下）

學問・教育の復興　家康は自ら學問を好み、學校を建て、古書をあつめて保存出版をはかり、また藤原惺窩及びその門人林羅山（ラザン）などを重用した。時に京都に於ては、後陽成天皇がおはし、活字を以て有用の書を印刷せしめ給うたから、戰國時代この方すたれてゐた學問教育は次第に興隆の氣運に向つた。明正天皇の頃、近江に中江藤樹が

後陽成天皇

家光時代の學問

伊藤仁齋の像

東京帝國大學史料編纂所藏の畫像による。

綱吉時代の學問

荻生徂徠の像
東京市荻生傳氏所藏の畫像による。

聖堂

山崎闇齋
史料編纂所所藏の畫像による。

出て、世に近江聖人と稱せられ、その門人に熊澤蕃山があらはれた。同じ頃、京都に山崎闇齋・木下順庵が出で、闇齋は尊王思想の發達に寄與する所多く、順庵の門人には、新井白石・室鳩巣・貝原益軒などが出た。將軍綱吉も學を好み、江戸の湯島に聖堂を起し、羅山の孫林信篤を大學頭に任じ、これを管理して學生の教授に當らせた。これ後の昌平坂學問所である。

その後京都の伊藤仁齋・江戸の荻生徂徠などが出で、學問すぐれ門人も多く、東西名をひとしくした。

實用を主とする實學の發達は、江戸時代の一大特色である。元祿の頃、澁川春海は天文・曆學に通じ、關孝和は數學を起し、宮崎安貞は農學、稻生若水は本草學に精通した。

國學

芭蕉
三重縣上野町愛染院にある自作と稱する芭蕉の木像である。

平民文學

繪畫

近松門左衞門
原圖は東京市松山氏の所藏である。

狩野探幽
東京帝國大學史料編纂所所藏の畫像による。

美術工藝の進步

太平の世に美術工藝は大いに發達し、特に繪畫は最も進步した。狩野派には狩野守信・探幽が出で、海内一と稱せられ、土佐派には土佐光起が出てこれを中興し、平民の趣味に適する浮世繪は、岩佐又兵衞に始まり、菱川師宣が出で、當時の風俗をうつし、本阿彌光悅に起り、が出で、平民文學が大いに發達した。

國文學の發達

國文學は、元祿の頃に僧契沖が、古語を研究して國學を興し、同じ頃北村季吟は、歌文に長じて幕府に用ひられ、殊に小說に井原西鶴、戲曲に近松門左衞門、俳諧に松尾芭蕉など

尾形光琳が大成した彩色花やかな畫風は、蒔繪に用ひられた。

幕政の中興

享保の治

第三十二章　江戸幕府の中興

吉宗の中興

中御門天皇の享保元年、吉宗紀伊家から入つて將軍となり、英明で政治の刷新を斷行し、世に幕府中興の英主と仰がれた。即ち元祿以來の文弱華奢の風を抑へ、學問・武藝をはげまし、士風をひきしめ、公事方定書（御定書）をつくり、裁判・刑罰の標準を定め、室鳩巣に命じて平易な修身書をつくらしめ、これを寺子屋にくばり、一般社會の教化に力をつくした。また産業の發達をはかり、天主教に關係なき洋書の研究をすゝめ、荒地を開き、水利を起し、甘蔗・甘藷の植付をすゝめた。かくて治績大いにあがつたので、世に享保の治と稱せられる。この頃諸大名にも、領内の政績をあげる者多く、地方の文化が開け、産物も豐かになつた。

松平定信

松平定信

異學の禁

柴野栗山

東京帝室博物館所藏の畫像による。

寛政の治

吉宗職をやめ、子家重・孫家治相ついで將軍となつたが、この間田沼意次・意知父子が權を專らにし、幕政がまたみだれた。然るに光格天皇の御代、家齊將軍となるや、松平定信老中としてこれを輔け、享保の治にならつて、大いに改革を行つた。即ち勤儉・尚武を主義とし、京都の皇居が炎上したので、自ら造營の局に當つて、その規模を大にし奉り、また朱子學を正學として異學の禁を令し、柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里など、世にいはゆる寛政の三博士を教官とし、昌平坂學問所の根本方針を定め、諸藩に命じて備荒儲蓄を行はせ、米穀をたくはへさせた。されば財政の基礎も固まり、幕政また振つたから、時の年號に

伊能忠敬の像
東京帝國大學史料編纂所所藏の畫像による。

實學

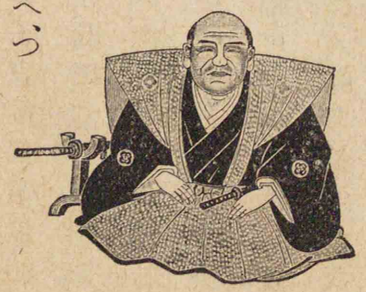
蘭學の先覺
向つて右が前野良澤、中央が大槻玄澤、左が杉田玄白である。日本醫學史（良澤・玄澤）及び史料編纂所所藏の畫像（玄白）による。

二宮尊德の像
靜岡縣掛川町報德社所藏の畫像による。

より世に寛政の治と稱せられる。

實學及び西洋の學術

將軍吉宗は、大いに實學を勸めたが、寛政の頃、伊能忠敬が、全國各地を測量して、精密な實測地圖をつくり、佐藤信淵の農業經濟の學、二宮尊德の報德の教など、西洋學術の傳來と相まつて、大いに利用厚生の道を開いた。西洋の學術は、鎖國のため傳來を妨げられたが、新井白石が書を著して、西洋人について聞いた所を傳へ、つ



蘭學
徳川家齊
國民文化の發達

いで將軍吉宗が、キリスト教に關係がない書籍の輸入を許し、青木昆陽をして、オランダ語を學ばしめたから、蘭學が始めて開けた。昆陽の門人に前野良澤・杉田玄白が出で、苦心して解體新書を譯し、ついで大槻玄澤は、オランダ語の文法書を著はし、蘭學の研究が大いに進んだ。かくて醫學・理科などの學問が輸入せられ、或は砲術・兵學を修めて、國防・用兵を研究し、世界の大勢も次第に明かになつて來た。

第三期

第三十三章　江戸幕府の衰運

文化・文政時代

定信退職の後、將軍家齊は政をみづからすること四十餘年、その身は從一位太政大臣に任ぜられ、江戸の繁榮が著しく、世に文化・文政時代といふ。特に國民文化の發達が目ざましく、文學では小說が盛んで、瀧澤馬琴・山東京傳・十返舍一九が知られ、

徳川家齊の像
徳川公爵家所藏の畫像による。

大鹽平八郎の亂
瀧澤馬琴の像
香川縣鈴木氏所藏の畫像による。

徳川家慶
水野忠邦

太田南畝（蜀山人）の狂歌など江戸特有の輕妙な滑稽趣味も行はれた。繪畫には、圓山應擧・谷文晁などが、各一派を開き、池大雅・與謝蕪村などが、支那風な文人畫を起し、司馬江漢は西洋畫を傳へたが、浮世繪は喜多川歌麿・葛飾北齋・安藤廣重などの名家により、ほゞ完成せられた。しかし奢侈・柔弱の風が著しく、士風がくづれ、幕府の財政も乏しくなつた。

されば仁孝天皇の天保年間に、凶作が續き、下民が頗る苦しんだのに、幕府はこれをかへりみなかつたから、大阪の人大鹽平八郎これを憤り、公然幕府を責めて亂を起し、つひに敗れて自殺したが、しかし何となく不穩の雲が全國にみなぎつたやがて家齊の子、家慶將軍となるに及び、老中水野忠邦

天保の改革
林子平の像
東京市大槻家所藏畫像による

幕府の衰兆

海防論
ロシヤ人の來航と北方の警備

外國船擊攘の令

濱松藩主

幕政の振作をはかり、いはゆる天保の改革を行つたが、却つて上下の不平を招き、忠邦もつひに職を退いた。時に内は尊王論が勃興し、外は諸外國がしきりに近海に迫り、江戸幕府の衰兆が漸く著しくなつた。

海防論とロシヤ人の來航

わが國が鎖國をつゞけ、太平の夢をむさぼつてゐる間に、西洋諸國は競うて力を東洋にのべようとした。寛政の初め、林子平（仙臺人）は、海國兵談等を著し、海防の急務を論じ、世をさわがすものとして罪せられたが、やがてロシヤ人が、今の北海道に來航したから、幕府も北邊の警備に力を注ぐことゝなつた。

即ち近藤重藏・間宮林藏をして、それぞれ北海道・樺太を探險せしめ、伊能忠敬をして精密な實測地圖をつくらしめ、松前奉行を置いて北海道を治め、ついで仁孝天皇の文政八年には、外國船擊攘を令し

開國論

渡邊崋山と高野長英

向つて右は崋山（史料編纂所畫像による）左は長英（坂内青嵐筆）である。

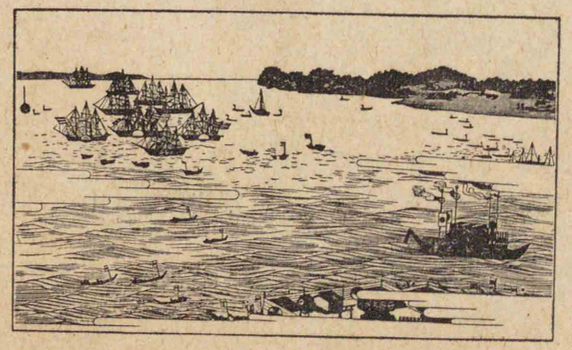
た。けれども鎖國の不利を説き、開國を主張するものもあらはれ、渡邊崋山・高野長英などの蘭學者は、書を著して攘夷の無謀を説き、ために各罪せられたが、幕府も時勢にかんがみ、天保十三年に至り、文政の擊攘令をゆるめた。

ペリーの來朝

さきに將軍家治の頃、アメリカ合衆國が獨立したが、ついでペリーを使者とし、船艦四隻をつけて、わが國に遣はした。孝明天皇の嘉永六年、ペリーは相模の浦賀に來り通商を開かんことを求め、ついでロシヤの使者プーチャチンも長崎に來たが、幕府はいづれ

米艦渡來

安政元年神奈川に來航した時の樣を描いたものである。



ペリー來る

プーチャチン來る

ペリーの像

海軍參考館所藏の畫像による。

ハリス

も回答の期をのべて去らせた。ペリーは琉球で年をおくり、翌安政元年再び神奈川（今の横濱）に來航したから、幕府はやむなく下田・函館の二港を開き、薪水食料を給することゝし、アメリカ合衆國と和親條約を結んだ。これを神奈川條約といふ。

通商條約の調印

安政三年、アメリカ合衆國の總領事ハリスが下田に來り、ついで江戸に入り、將軍家定に謁して、通商條約を結ばんことを求めた。老中堀田正睦は、海外の事情に通じてゐたから、ハリスと通商條約を議定したが、勅許を得ることができなかつたので、幕府はかかる難局を處理せしむるため、彦根藩主井伊直弼をあげて大老と

神奈川條約

井伊直弼

井伊直弼の像

井伊伯爵家所藏の畫像による。

安政の假條約

水戸藩の大砲

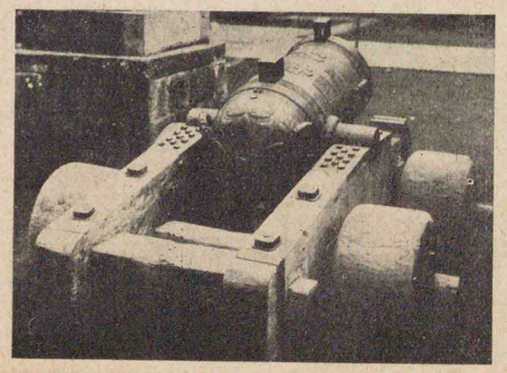
徳川齊昭が攘夷海防を唱へ寺院の鐘等まで沒收して鑄造した大砲である。

國論の不統一

した。直弼は、早く開國の意見をいだいてゐたが、内外の形勢が切迫してゐるのにかんがみ、國家の安危をうれひ、責を一身にひきうけ、勅許を經ないで通商條約に調印し、後朝廷に奏上した。これを安政の假條約といふ。ついでオランダ・ロシヤ・イギリス・フランスとも同じやうに通商條約をとりきめた。

幕府の專斷破る

これよりさきペリーの來朝するや、幕府は前例を破つて、これを朝廷に奏し、諸大名に開港の可否をはかつたが、ために國論が開港・攘夷に分れて定まらず、朝廷には攘夷の說が多く、諸藩にも水戸の德川齊昭をはじめ、攘夷國防の急務を論ずるものが



安政の大獄

櫻田門の變

公家諸法度

あり、國事をうれひて幕政の得失を論ずるに至つた。こゝに於て直弼は、家茂が紀伊家から入つて將軍となるに及び、異論を制し幕威を立てんとし、公卿・大名、以下多くの志士をとらへ、これを處刑した。世にこれを安政の大獄といふ。ために天下の人心大いに激し、孝明天皇の萬延元年、直弼は水戸の浪士のため櫻田門外で殺され、幕威が急に衰へ、その政治を專斷して來たならはしも破るゝに至つた。

第三十四章　尊王思想の勃興

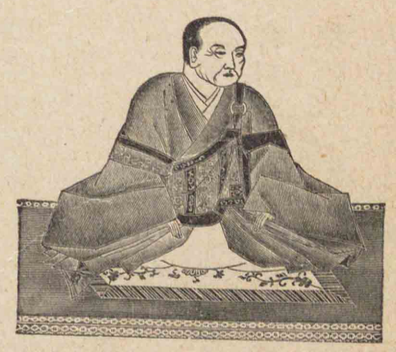
皇室と幕府

江戸幕府は、皇室に對して、或は皇居を修理し、或は御料を獻じ、或は御陵を修築するなど、崇敬の實をつくしたけれど、政治上の權はこれを幕府に保有せんとし、公家諸法度を定めて、事大小となく皇室に干渉し奉つた。後水尾天皇は、幕府のすゝめた

後水尾天皇

御法體として京都の御影の御影で市泉涌寺所藏の御畫像による。

後光明天皇



秀忠の女和子を納れて、中宮となされたが、後幕府のなすことを御憤りのあまり、皇女明正天皇に御讓位あらせられた。後光明天皇は、御英明にましまし、朝權回復の御志を抱かせ給うたけれど、早く崩御せられて果し給はず、人々も久しい間の武家政治になれて、深くこれを怪しまなかつたが、光格天皇が、閑院宮家から入つて皇統をつぎ給ひ、御父典仁親王に、太上天皇の尊號を奉らんとおぼしめされ、幕府に御諮りになつた所、老中松平定信等極力これをとゞめ奉り、つ

皇室御系圖（十四）

- 後陽成天皇
  - 後水尾天皇（一〇八）
    - 明正天皇（女帝）（一〇九）
    - 後光明天皇（一一〇）
    - 後西天皇（一一一）
    - 靈元天皇（一一二）
      - 東山天皇（一一三）
        - 中御門天皇（一一四）

光格天皇

京都市泉涌寺所藏御畫像による。

國史の編修

ひに御中止になつたが、當時學問の普及に伴ひ、わが國體に關する思想が、漸く明かになつたから、幕府の處置を憤るものも少くなかつた。

國史・古典の研究

江戸時代に於ける學問の興隆は、わが國史・古典の研究を盛にした。幕府に於ては、將軍家光の頃、林春齋羅山の子に命じ、本朝通鑑をつくらせ、水戸藩主德川光圀は、大義を明かにし、わが國體の美を知らしめんとして、大日本史の編修を起した。漢學者の中にも、山鹿素行は、中朝事實をあらはし、山崎闇齋は神道を說き、内

皇室御系圖（十五）

- 東山天皇
  - 中御門天皇（一一五）
    - 櫻町天皇（一一七）
    - 桃園天皇（一一六）
      - 後櫻町天皇（女帝）
      - 後桃園天皇（一一八）
  - 閑院宮直仁親王
    - 典仁親王
      - 光格天皇（一一九）
        - 仁孝天皇（一二〇）
          - 孝明天皇（一二一）

古典の尊重

徳川光圀
京都市高臺寺所藏の畫像による。

國學

山鹿素行
松浦伯爵家所藏の畫像による。

塙保己一
塙氏所藏の畫像による。

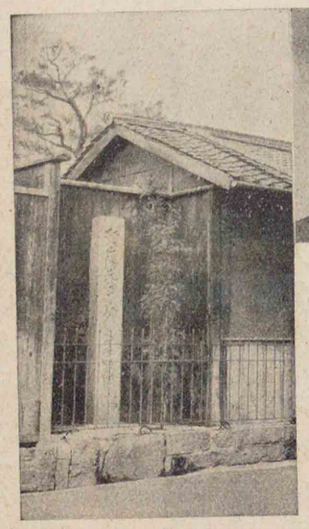
尊王家

外尊卑の別を明かにした。將軍吉宗の頃、荷田春滿は、僧契沖の風をうけ、わが古語古典にもとづき、古代の歴史・文化を研究する國學をとなへ、賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤など、相ついで國學を研究し、また塙保己一は、盲人でありながら、江戸に和學講談所を開き、國學を教へた。

尊王論起る

かくて學問興隆の結果、わが國體が明徴になり、尊王論が大いに起るに至つた。殊に闇齋の學説をついだ竹内式部は、桃園天皇の時、公卿の間に尊王の大義を説いて罪せられ、ついで家治の時には、その同志山縣大貳も、幕府に忌まれて刑せられた。けれども尊王論は次第に勢を得、光格天皇の御代、高山彦九郎（上野の人）は、皇威の衰へたのをなげき、これが興復を志し、諸方をめぐつて同志と交はり、蒲生君平（下野の人）は、御歴代の山陵が荒れたのを見かねて、山陵志を著した。また賴山陽（安藝の人）は、二十餘年の苦心をかさね、明快な筆をふるつて日本外史・日本政記等を著し、尊王の大義を鼓吹し、大いに人々に愛讀せられ、頗る人心を動かした。後に王政復古の大業が成つたのは、實にこれ等尊王家の心血をそゝいだ努力にもとづく所が

賴山陽舊邸
廣島市にある。規模や外觀は昔と異なるも山陽の父春水の居邸で向つて右方の小隅に圖の一のごとく机を置いた二疊敷の室が山陽幽居して日本外史を書いた所である。



蒲生君平の像
栗原信充の筆に成つたものである。（下）

王政復古の源

少くない。

第三十五章　大政奉還

和宮御降嫁

松平容保

公武合體

公武合體

幕府に於ては、井伊直弼の死後、老中安藤信正が、公武の親和をはかり、朝廷の御威光をかり奉り、幕府の立てなほしをしようとし、將軍家茂のため、孝明天皇の皇妹和宮親子内親王の御降嫁を仰いだが、かへつて尊王論者の怒を招いた。かくて京都には、尊王攘夷論者や浮浪の徒が集まり、大いにさわがしくなつた。こゝに於て薩摩の島津久光は、兵をひきゐて入京し、公武合體の實をあげんとし、勅使大原重徳を奉じて江戸に下り、幕政改革の事に盡力し、將軍家茂は勅旨を奉じ、徳川慶喜松平慶永をして幕政をたすけしむるなど、

幕府衰亡の大勢

三條實美の像

攘夷の令

朝議の一變

諸般の改革を行つた。殊に新に京都守護職を置き、會津藩主松平容保をこれに任じ、よく京都の治安を維持したけれど、幕府衰亡の大勢は、もはや抑へることができなかつた。

攘夷の實行

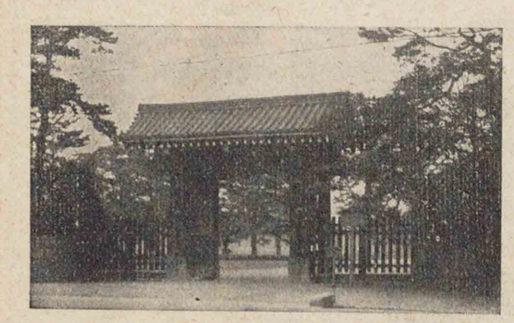
京都では、島津久光の歸國後、攘夷論者が勢力を得て朝議を動かし、三條實美が勅使として東下し、攘夷の決行を命ぜられることゝなつた。そこで幕府は勅を奉じ、文久三年五月十日を攘夷の期と定めて、諸藩に布告したから、期日に至り、攘夷論の急先鋒たる長州藩は、下關海峽を通過する外國船を砲撃した。されば攘夷論の氣勢大いにあがり、攘夷親征の議さへ起つたが、京都守護職松平容保は深くこれをうれひ、尊融法親王（後の久邇宮朝彦親王）により、親征を中止し給ふべきことを奏するや、朝議にはかに一變し、長州藩は宮門守衛の

任を解かれ、三條實美等は、參内をとゞめられて長州に奔つた。

四國艦隊の下關砲撃

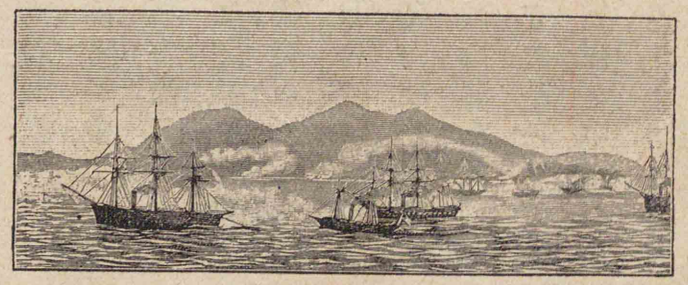
蛤御門の變

長州征伐　然るに長州藩の福原越後等、兵をひきゐて入京し、朝廷に訴ふる所ありと稱して、會津薩摩桑名の兵と蛤御門の邊に戰ひ、直に擊退せられた。こゝに於て幕府は、長州藩の罪をせめ、元治元年諸藩の兵を發し、長州を征したが、時恰も英佛米蘭等四國の艦隊が、下關海峽に來攻したので、長州藩はこれと和し、ついで幕府に罪を謝し、事が收まつた。然るに長州藩士高杉晉作等、藩論をくつがへして、



現在の蛤御門

長州征伐

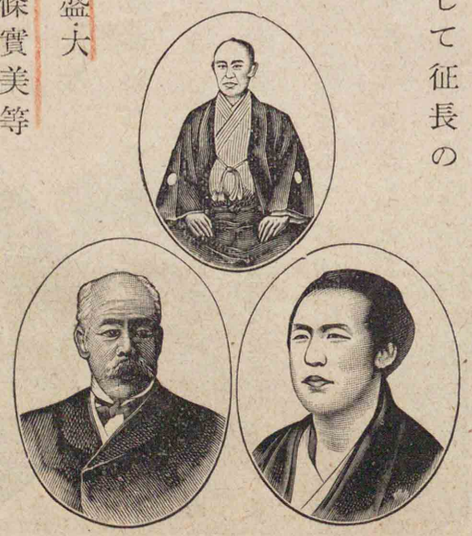


長州再征

孝明天皇崩御

兵をあげ、慶應二年幕府は再びこれを征したけれど、士氣甚だ振はず、將軍家茂が大阪で病死し、ついで孝明天皇も崩御あらせられ、明治天皇が皇位に御つきになり勅して征長の兵をとゞめしめ給うた。

大政奉還　幕府に於ては、德川慶喜が征夷大將軍となつたけれど、長州征伐のために無力をあらはし、幕政をすべる實權を失つたから、薩摩藩も討幕に傾き、西鄕隆盛・大久保利通等の藩士は、岩倉具視・三條實美等を通じ、長州藩の木戸孝允と結び、薩長聯合の力で、幕府を倒さうとはかつた。然るに土佐の前藩主山内豐信は、深く國事を憂ひ、その臣後藤象二郎等をつかはし、將軍慶喜に大政の奉還をすゝめた。



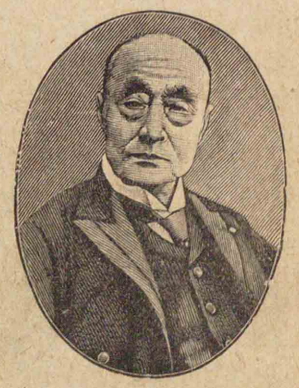
土佐藩の人々

上段は山内豐信、下段向つて右は坂本龍馬、左は後藤象二郎である。

討幕の企

大政奉還

慶喜も亦時勢を察し、平和に事を解決せんと心をくだいたから、大英斷を以て大政奉還を請ひ慶應三年明治天皇の勅許を得て、江戸幕府がこゝに滅び、武家政治がやんで、朝廷の御親政を仰ぐことゝなつた。江戸幕府は、家康が將軍に任ぜられてから、十五代二百六十五年で倒れた。



徳川慶喜の像

江戸幕府の滅亡

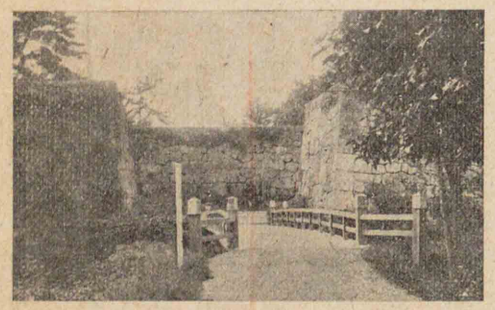
有栖川宮熾仁親王

鳥羽・伏見の戰

この時朝廷では、岩倉具視等が、薩摩藩と共に專ら事を用ひ、兵力をもつて徳川氏を抑へ、改新の功を收めようとした。幕府舊臣のうちには、薩長二藩の態度を憤るもの多く、慶喜を擁し、明治元年、兵を發して入京せんとしたが、官軍のために、鳥羽・伏見で破られ、慶喜等は海路江戸に逃げ歸つた。

慶喜の恭順

こゝに於て朝廷は有栖川宮熾仁親王を東征大總督となし、諸藩の兵を出して、江戸を攻めさせられた。慶喜は深くつゝしみの意をあらはし、勝安芳等をして罪を謝せしめ、ついで水戸にしりぞき、江戸城と軍艦・兵器とを朝廷にさげ、田安家の出なる家達その後をついで徳川氏を保ち駿河に封ぜられた。



若松城址

福島縣若松市にある。

明治戊辰の役

然るに舊幕臣のうちには、慶

官軍の東征

勝安芳と西郷隆盛

向つて右が安芳、左が隆盛で江戸開城に關する交渉の當事者である。

徳川氏に對する處分

彰義隊

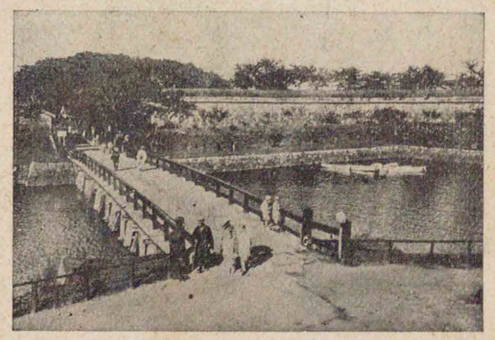
奥羽・越後諸藩の聯合

五稜郭址

函館市郊外にある

五稜郭の戰

喜の恭順をよろこばず、兵をあげて官軍に抗するものがあつた。即ち彰義隊は今の上野公園に據り、大鳥圭介は宇都宮に兵をあつめ、會津藩主松平容保は、奥羽越後の諸藩と同盟して、若松城に據り、榎本武揚は軍艦數隻をひきゐ、江戸をのがれて、これに應じた。けれども官軍は諸道から進んで、次第にこれを平定し、明治二年函館の五稜郭を攻め、大鳥圭介・榎本武揚を降すに及び、海内悉く平定した。世にこれ等の戰を總稱して、明治戊辰の役といふ。



近世史大要

關ヶ原の役後、王政復古まで、約二百七十年間を近世といひ、政治の中心が江戸にあつたから、これを江戸時代といふ。後陽成天皇から後光明天皇に至る間凡そ五十年、幕府では家康・秀忠・家光が、相ついで將軍となり、幕威が確立した。この後、仁孝天皇の御代に亘り、幕府では將軍家綱から家齊まで、凡そ百九十年間、江戸幕府の極盛時代であつて、前に元祿時代、後に文化・文政時代及び田沼時代など、綱紀がみだれ、弊政が行はれたこともあつたけれど、新井白石・徳川吉宗・松平定信などにより、屢々改革が行はれ、學藝大いに興り、産業交通も頗る開けて、天下は太平を樂しんだ。しかしながら奢侈柔弱の風も起り、士風がすたれ、幕府の財政が窮乏して、衰兆漸くあらはれ、内には尊王論が勃興し、外には邊境の警報次第にしげく、國民をして深い眠りからさますことゝなつた。この後將軍家慶から慶喜まで約三十年の間、幕府の勢は下り坂になり、國政をつかさどる實力を缺くに至り、内外の政局がいよいよ多難となつて、つひに王政の復古となり、長い間の武家政治が終を告げ明治新政の幕が開けた。

第五篇 現代

明治維新は何を目的とし、何が實現したか。

第三十六章 明治維新

王政維新

慶應三年、德川慶喜の大政を奉還するや、明治天皇はこれを許して、王政復古の大號令を發し、攝政・關白・征夷大將軍など、舊來の官職を廢し、新に總裁・議定・參與の三職を置き、有栖川宮熾仁親王を總裁とし、親王並びに諸臣中から議定・參與を任じ、天皇が萬機をすべられ、大小の政令悉く朝廷から出づることゝなつた。世にこれを王政維新または御一新といふ。

三職

天皇親政

五箇條の御誓文

ついで翌慶應四年（明治元年）三月、明治天皇は紫宸殿にのぞませ給ひ、天地の神々をまつり、五箇條の御誓文をのべさせられて、新政の大方針を御示しになつた。

新政の大方針

一 廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ。

明治天皇

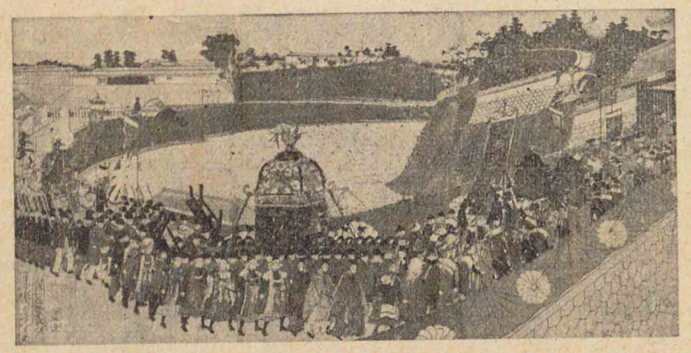
昭憲皇太后

官制

明治天皇の東京御遷幸

鳳輦のまさに宮城に入御せられんとする所で當時の錦繪による。

一世一元



一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸（ケイリン）ヲ行フヘシ。

一　官武一途庶民（ショミン）ニ至ル迄、各々其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス。

一　舊來ノ陋習（ロウシフ）ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ。

一　智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ。

ついで官制を定め中央政府に神祇・太政の二官、民部・大藏・兵部・刑部・宮内・外務の六省などを置かれた。

東京奠都　かくて明治天皇は、この年即位の大禮をあげさせられ、年號を明治と改め、一世一元の制となし、十月、始めて東京（さきの江戸）に行幸あらせられた。ついで間もなく京都に還幸せられ、藤原美子（ハルコ）を立てゝ皇后（後の昭憲皇太后）と定め、翌二年賢所を奉じ

東京を都とす

版籍奉還

廢藩置縣

て京都の皇宮を出でまし、まづ伊勢神宮に御親拜あらせられ、再び東京に行幸あらせられて、永くこの地を都と奠められた。

第三十七章　明治時代の內治・外交（一）

集權統一の政治

この時に當り、幕府が直接に治めた領地は、朝廷にかへつたけれど、各藩の領地は、もとのまゝであつたから、全國一統の政治を行ふことができなかつた。參與木戸孝允これをうれへ、諸藩主をして版籍を奉還せしむべきことを建議し、明治二年薩・長・土・肥の四藩主が、名をつらねてこれを奏請し、諸藩もこれにならつたから、朝廷では、舊藩主を知藩事として、その舊領を治めさせた。明治四年に至り、更に廢藩置縣のことがあり、新に地方官を任じて、縣治に當らしめた。されば封建の制亡び、集權統一の實があがり、維新の大事業も漸くその緒につくに至つた。

四民平等

學制

太陽曆

徵兵令

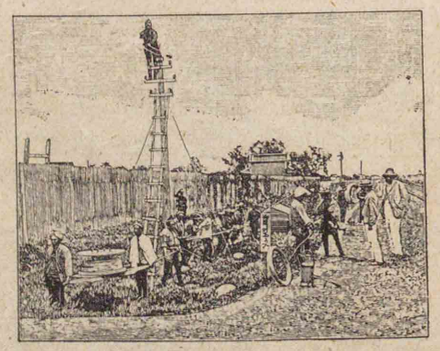
明治初年の電信架設工事

明治五年頃今の東京市品川附近の有樣、アーイースト誌による。

外國との和親

制度・文物の改善

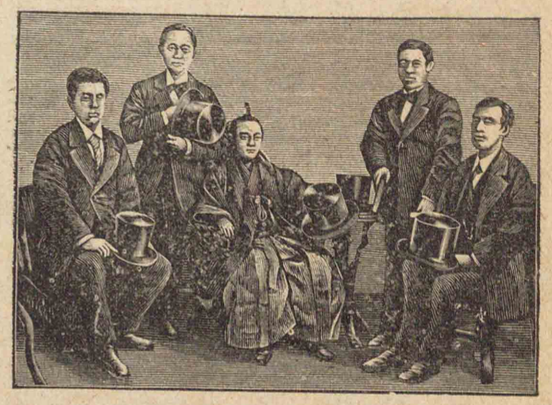
かくて士農工商の階級を廢して、四民平等とし、人材登用の途を開き、明治五年學制を定めて、國民教育の制を立て、曆法を改めて太陽曆を用ひ、翌年徵兵令を布いて、國民皆兵の制を定めた。その他郵便・電信を設け、鐵道を通じ、通信・交通の發達をはかり、大いに內治をとゝのへた。



開國和親

明治政府は、開國和親を以て外交の大方針となし、明治三年諸外國に公使をつかはし、翌年更に岩倉具視を全權大使とし、木戸孝允・大久保利通等を副使として、歐米諸國を視察せしめ、且つ諸外國と和親を重ねた。かくて明治四年、清國と修好條約を結び、明治七年には、わが漂流民を殺した臺灣の蕃民を征し、明治八年ロシヤと交渉して、これまで境界の確かでなかつた樺太を、千

東洋平和の保持



岩倉大使の一行

向つて右から木戸孝允・伊藤博文・岩倉具視・山口尚芳・大久保利通といふ順である。

征韓論

佐賀の亂

熊本・萩の亂

島と交換して、一意東洋の平和を保ち、國力の增進をはかつた。朝鮮に對しては、使を遣はして舊交を修めようとしたが、朝鮮が屢々外交上の禮を缺いたから、明治六年征韓論が起り、西鄕隆盛・板垣退助・江藤新平等は、その議が容れられないで職を辭した。その後明治九年に至り、漸く朝鮮との間に修好條約が成立した。

改新の反動

明治維新後、政治上・社會上の改革がはげしかつたので、國民中には、或は政府と意見を異にし、或は新政に不平を抱くものもあつて、地方の亂が絕えなかつた。即ち明治七年には、前參議江藤新平が、佐賀に亂を起し、同九年には、熊本及び萩にも亂が起つたが、まもなく平げられた。ついで明治

谷干城の像

西南の役熊本城の守將、晩年の肖像である。

西南の役

熊本城

加藤清正の築いたもの、西南の役多く兵火にかゝる。

伊藤博文

民選議院論

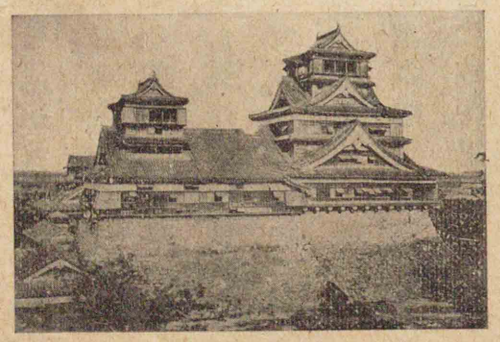
府縣會

十年、鹿兒島の不平の徒が、西鄕隆盛をいただいて兵をあげ、進んで谷干城（タテキ）の守る熊本城を圍んだ。朝廷では、熾仁親王を征討總督とし、交戰八箇月にしてこれを平定した。

世に西南の役といひ、中央政府の威權確立し、國力いよいよ進むに至つた。

立憲政治の確立

これよりさき板垣退助等は、民選議院設立の議を上つたが、明治八年元老院・大審院を設け、地方官會議を開き、ついで明治十二年には府・縣會が開設せられ、民間の政治思想も



内閣制度
憲法發布
帝國議會開設

次第に進歩した。そこで參議伊藤博文が、大命をうけて帝國憲法の起草に當り、明治十八年内閣制度が定められ、同二十二年に至り、國民歡呼のうちに帝國憲法が發布せられ、翌年帝國議會がはじめて東京に召集せられた。かくて立憲政體が確立し、その後帝國議會の協賛により、君意・民心相和して、民法・刑法等の重要な法律が制定せられ、名實ともに法治國として、教育・産業・軍備等の各方面にわたり、殆ど面目を一新するに至つた。

集權統一の完成

集權政治と政黨

この時代を通じて、政治上に於ては國家の中央集權が殆ど完成し、總ての組織は漸を追ひ天皇の御親裁を中心として統一せらるゝに至つた。しかし立憲政治の採用にともなひ、國民の協翼により政治が行はれたから、民意の影をやどす政黨が發達した。殊に明治時代の中頃から、政治・外交に關する國民の自覺も漸く著しく、政治上政黨が重きをなすに至つた。

政黨の發達

天津條約

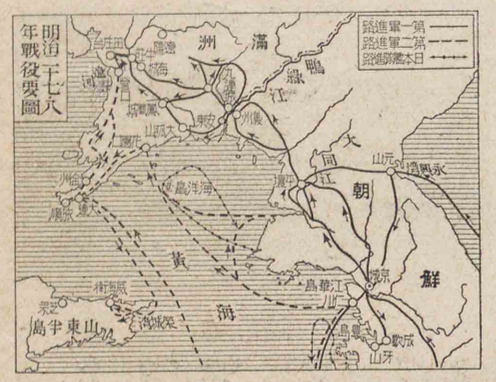
明治二十七八年戰役要圖

東學黨の亂

第三十八章　明治時代の内治・外交（二）

明治二十七・八年戰役

朝鮮と修好の約を結んでから、わが國はこれと交はりをあつくせんとしたが、朝鮮はとかく事大的精神がつよく、清國と結んで我を排斥し、清國も亦朝鮮を屬國あつかひにし、その内政にも干渉した。そこで明治十八年、わが國は清國と天津條約を結び、兩國は朝鮮に駐兵をやめ、將來これに出兵の必要あるときは、互に通知することゝした。然るに明治二十七年に至り、朝鮮に東學黨の亂起るや、當時わが國は、政府と帝國議會とが、政治上の意見を異にして、衝突することが少くなかつたから、清國は機乘ずべしと



廣島大本營址

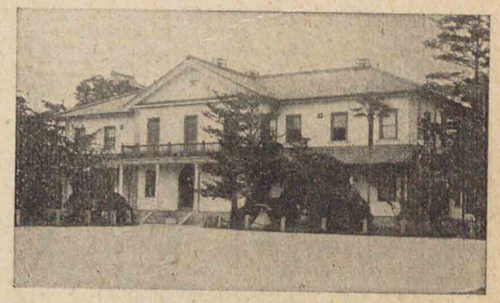
廣島市舊廣島城内にある。もと第五師團司令部の建物をそのまゝ用ひ給うたのである

日清の開戰

下關條約

威海衛と北洋水師司令官丁汝昌

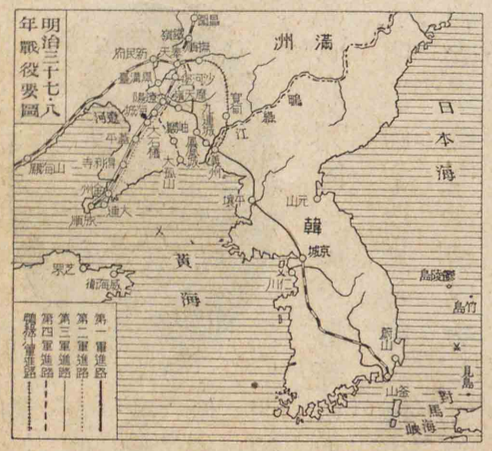
威海衛が我が軍の攻撃により陥落し北洋水師司令官丁汝昌は全艦隊を擧げて降り毒を仰いで自殺した。



なし、大兵を朝鮮に出し、協力して朝鮮の内政改善を助けようとするわが國の議をしりぞけ、かへつてわが國を威壓しようとした。こゝに於て兩國の和親破れ、明治天皇は、大本營を廣島に進めて、軍務を統べさせ給ひ、わが軍は海陸ともに奮戰して大勝した。そして清國は屈して、下關條約を結び、臺灣・澎湖島遼東半島を割き、償金二億兩を出し、朝鮮の獨立を認めた。しかしロシヤは、滿洲に南下せんとして、遼東半島の領有を望

三國干渉

明治三十七・八年戰役要圖



み、ドイツ・フランスの二國と協同して、これが還附（クワンフ）をすゝめて來たので、わが國は東洋平和のため、これを清國に還（カヘ）した。これを三國干渉といふ。ついで朝鮮は、國號を韓と改めた。

條約改正の成功

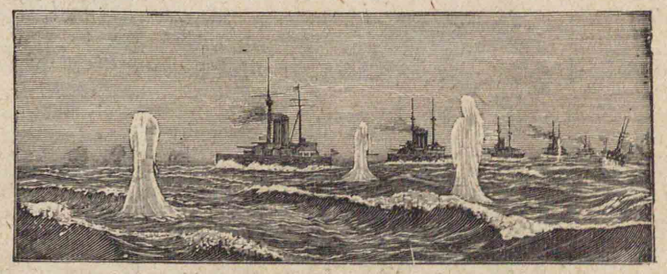
さきに安政五年歐米諸國と結んだ條約は、稅權や裁判權など我が國に不利なことが多く、我が體面を損ずることが少くなかつたから、明治四年岩倉具視等の歐米派遣以來、これが改正は上下多年の宿望であつた。然るにその後内治の整備、國力の充實に努力した結果、諸外國も漸く我が國の實力を認むるに至り、明治二十七年外務大臣陸奥宗光（ムツ　ムネミツ）は、まづイギリスと交渉して、從來幾度か試みて成功しなかつた條

條約改正の效果

日本海海戰と兩軍の長官

向つて右は聯合艦隊司令長官東郷平八郎、下は海戰中の我が艦隊、左方はロシヤの司令長官ウエンジエスキーである。

約改正に同意せしめたが、清國と戰ひ勝利を收めてから、諸外國も我が國の眞價を認め、新條約が相ついで成立し、明治三十二年から實施せられ、列國とほゞ對等の地位に立つた。ついで明治四十四年、外務大臣小村壽太郎は、更に條約改正の交渉に成功し、これを期として關稅法も國定稅率となり、內は產業の保護助成をはかり、外は列國との親善を進めて、大いに國民的發展を遂げることゝなつた。



北清事變

陸軍の總司令官と惡戰の跡

向つて右は總司令官大山巖、左はロシヤ側の總司令官クロパトキン、下は文字通り肉彈相うち血河、屍山を現出した旅順戰跡で一戶堡壘に於けるロシヤ軍の築いたる土囊の攻防線である。

明治三十七・八年戰役

清國が、わが國と戰つて敗れ、その無力をあらはすや、歐米諸國は、甚しくこれを壓迫し多くの利權を分けどりしたので、明治三十三年、北支那地方に、外國人排斥を目的とする大動亂が起つた。世にこれを北清事變といひ、列國聯合軍の手で平定せられたが、ロシヤは、これを機として、多年の宿望たる滿洲占領の歩を進めた。わが國は東洋の平和を保たんがため、明治三十五年、日英同盟を結び、越えて三十七年に至り、わが國の誠意をこめた交渉を無

ロシヤの滿洲占領

日英同盟

日露の開戰

ポーツマス會議

向つて右側中央が小村壽太郎、左側中央がウイッテである。

朝鮮總督府

ポーツマス條約

視し、韓國をも侵さうとしたロシヤと開戰した。かくて東鄕平八郎のひきゐる聯合艦隊は、旅順の敵艦隊を亡ぼし、更に日本海に太平洋艦隊を擊滅し、大山巖の指揮する陸軍は、到る處に勝利を得、難攻不落と誇つた旅順の要塞を陷れ、奉天に決戰して、敵軍を四散せしめた。かくて戰局の大勢さだまるに及び、米國大統領ルーズヴェルトの勸めにより、我が國は小村壽太郎等を遣はし、ロシヤのウィッテ等とポーツマスに會商せしめ、ロシヤは樺太の南半を割き、その經營にかゝる南滿洲の鐵道や旅順・大連一帶の租借權を我に讓り、韓國に於けるわが優越權を

韓國の保護

明治天皇の御不例當時二重橋外國民の熱禱

韓國併合

認めて局を收めた。されば、わが國の實力は、世界列强の認むる所となり、日英同盟は攻守同盟に擴張せられ、ロシヤ・フランスも、わが國と協約を結び、相互の地位並びに領土等を尊重し、東洋の平和を維持すべきことを約した。

韓國の併合

韓國は、戰後わが國と約して保護國となり、內政・外交ともに、わが指導をうけたが、多年の積弊は容易に改まらず、やゝもすれば東洋禍亂の源となるおそれがあつたので、明治四十三年に至り、兩國相互の幸福を進め、東洋永遠の平和を確保するため、韓國をわが國に併合し、これを朝鮮と改稱し、京城に朝鮮總督府を置いて統治することゝなり、東洋の平和が愈々確保せられた。

明治天皇の崩御

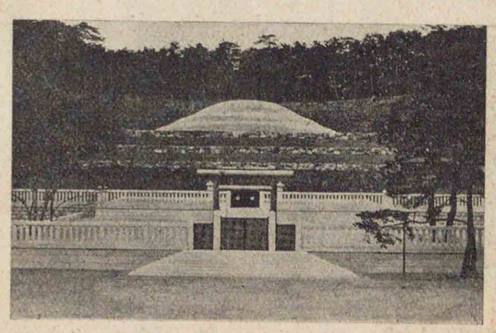
明治天皇は明治四十五年七

明治天皇の崩御

乃木希典及び靜子夫人

伏見桃山御陵

月はからずも御病にかゝらせ給ひ、國民こぞつて御全快をいのり奉つたかひもなく、つひに御年六十一歳で崩御遊ばされた。かくて偉大な御功業と御盛德とを仰ぎまつる國民の悲しみのうちに伏見桃山御陵にをさめ奉り、陸軍大將乃木希典夫妻の如きは、御跡をしたひまつつて、壯烈な殉死をとげた。



西洋風と國風保存

教育に關する勅語

福澤諭吉

大隈重信

學制

第三十九章　明治時代の文運の發達

教育勅語の下賜

維新以來わが國は、西洋文化をとり入れて、政治・社會の改新を進めたから、西洋風を喜ぶ傾向が甚だ強く、やゝもすれば、內外本末の別をあやまるものさへあつた。ために國風尊重の說も大いに起り、明治二十三年には、教育に關する勅語を賜はつて、國民の向ふ所を示し給うた。

教育・學術の發達

教育は、主として歐米諸國の風をとり、初め外國人教師をやとひ、洋書を譯して教科書に用ひ、普通教育・專門教育の各方面に亘り、多くの官公立學校が開設せられた。

農民の收穫天覽

學術研究

私立學校

坪内逍遙

文學

尾崎紅葉

かくて諸般の學術が大いに研究せられ、特に自然科學に於ては、世界的研究も發表せらるゝに至つたが、かへりみて國風にもとづく獨創的研究を盛にせんとし、この方面の開拓の必要がとなへられた。民間に於ける私立學校・研究所等も漸く見るべきものが多く、福澤諭吉の創めた慶應義塾、大隈重信の立てた早稲田大學などは、共に多くの人材を世に出した。

文藝の進歩

教育・學術の發達につれ、文學美術も著しく進歩した。外國文學の紹介では、坪内逍遙・森鷗外などが名高く、その結果、それ等の思想・内容は、わが文學に影響した。小説は寫實風になり、新體詩があらはれ、和歌・俳句

明治元年東京御遷幸の途上尾張國熱田驛の東、八丁畷に於て、明治天皇親しく鳳輦をとゞめて、農民の收穫狀況をみそなはせられ、深き勸農の御叡慮の程を御示しになつた。
圖は森村宜稻の謹寫にかゝる明治神宮聖德記念繪畫館壁畫によつたものである。

美術

正岡子規

金貨本位制

鐵道の國有

なども復興せられた。尾崎紅葉・正岡子規・夏目漱石などは、名高い文學者である。美術も初め西洋風を尊び、一時日本畫が衰へたが、國風尊重の論起るや、岡倉覺三等が出でてその復興をはかり、西洋の畫風をもとり入れて、新味を出すに至り、洋畫も黑田清輝等の手により頗る發達した。

經濟の發展

産業の發達・交通の進歩等、經濟の發展は目ざましいものがあつた。殊に明治三十年、貨幣法を改定して、金貨本位制を採用し、明治三十九年、主なる鐵道を國有とし、或は關稅の稅率を改め、また各種の補助金を與へて、國內産業の保護助長につとめたから、わが金融機關が整備し、大量生産の工業が勃興し、商業貿易も發展して、産業經濟の規模が世界的となり、大いに活況を呈するに至つた。

わが國の參戰

西園寺公望

シベリヤ出

第四十章　大正・昭和時代

世界大戰

明治天皇について大正天皇が即位せられたが大正三年、ヨーロッパを中心として、世界的大戰亂が起り、ドイツ・オーストリヤ等の同盟國と、イギリス・フランス・ロシヤ等の聯合國とが、相對立して前後五年にわたる戰爭が行はれた。開戰の初めドイツは、支那の膠州灣を根據地とし、東洋の平和を危くしたから、わが國は日英同盟の誼を重んじ、起つてこれを攻略し、南洋群島を占領して、太平洋上から、ドイツの艦隊を逐ひ拂ひ、また、ロシヤに革命が起り、シベリヤを通じて戰禍が東洋に及び來るや、列國と共同してシベリヤに出兵し、策謀の源をふさいで、つひに最後の勝利にみちびいた。かくて西

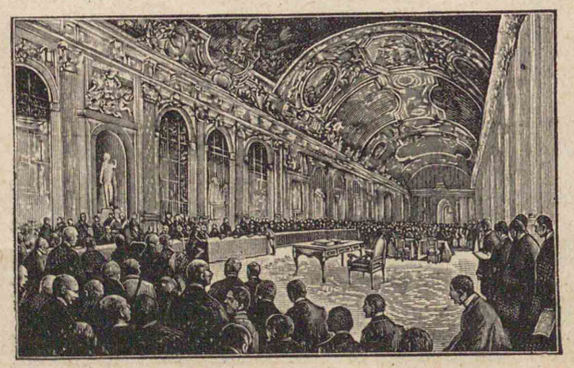
ヴェルサイユ條約

ヴェルサイユ條約調印

ヴェルサイユ宮の鏡の間で中央の机上に見えるのが條約書である。

國際聯盟

園寺公望等を全權委員として、各國の全權委員とフランスのパリーに會合し、大正八年ドイツとヴェルサイユ講和條約が成立し、わが國は膠州灣及び山東省に於けるドイツの利權を讓りうけ、赤道以北の南洋群島の委任統治權を得た。そして國際聯盟の成立を見るに至り、わが國はその常任理事國として、世界の平和をおびやかす大問題を解決し、人類の福利をすゝめることに力をつくした。



國運の興隆

かゝる世界的大戰亂の間に處して、我が國は獨力東洋の和平を確保し、商工業の發達をはかつたから、國運隆々としてあがり、名實ともに、世界的強國として、列國の間に重きをなすに

關東地方大震災

大正天皇御尊影

國民精神の作興

大震災の跡

東京市隅田川附近の破壊焼失の跡である。

陪審法

普通選擧制

至つた。されば大正十二年、關東地方に大震災が起つて、おびたゞしい損害をうけたにも拘らず、國民は、大正天皇の國民精神作興の御諭しを奉體し、敢然として復興に努力し、世界のおどろきのうちに、この大業をなしとげた。かく國運の興隆に伴ひ、內治・外交の規模は頗る複雜となり、國民の忠誠な協翼にまつことが一層多くなつて來た。しかも教育・文化の進歩は、國民の知德を向上せしめたので、大正十二年には、陪審法が公布せられ、裁判の上に新紀元をつくり、大正十四年には、普通選擧の制が布かれ昭和三年の衆議院議員總選擧から實行せられた。實に

今上天皇

今上天皇御尊影

君意民心相一致して、盛に經綸を行はせ給ふ大御心に外ならない。

昭和の聖代

大正天皇崩御せらるゝや、今上天皇が皇位につき給ひ、昭和と改元せられた。天皇は、まだ皇太子でおはした時、大正十年、國初以來の御盛事である御外遊を行はせ給ひ、イギリス・フランス・イタリヤ・ベルギー・オランダ等の諸國を御訪問あそばされ、到る所で熱誠な歡迎をうけさせられた。御歸朝の後、大命を拜して、攝政の重任に御就きになり、英明の御天資に加ふるに、ひろい御見聞と、ゆたかな御經驗とを積ませられたが、今や萬世一系の帝位を踐まれて、日夜政務に御勵みになるのは、まことに感激に堪へない所である。

國際平和への協力

かくてわが國は、世界の大國としてその一

ワシントン會議

不戰條約

ロンドン會議

中華民國の排日

舉一動が、ひろく國際的に大影響を與へるに至つたから、つとめて世界各國と協力して、國際平和の增進をはかつた。即ちこれよりさき大正十年アメリカ合衆國の首唱により、主として海軍軍備の制限及び太平洋に關する諸問題を議するため、ワシントン會議が開かるゝや、これに參加してわが海軍の主力艦を制限し、日英同盟をやめて、イギリス・フランス・アメリカ合衆國と四國條約を結び、太平洋上の相互の領土を尊重することを約し、別に支那に對する九ケ國條約を結び、その領土保全を約した。ついで昭和三年には、一切の國際紛爭を、戰爭に訴へて解決せざることを約した不戰條約に加盟し、同五年には、ロンドン海軍軍縮會議に參加し、更に補助艦の制限を約して、世界平和の增進のために、誠意をつくして來た。

滿洲事變

然るにわが國の平和を冀念する精神は、却つてその眞意を誤るものを生じ、殊に中華民國は、無暴な排日運動をつゞけ、

北大營

滿洲に於ける排日の策源地で奉天にあつた張學良軍の營舍である。

滿洲國の獨立

國際聯盟總會に於けるわが全權松岡洋右の演說

國際聯盟の脫退

遂に實力を以て、滿洲に於けるわが權益を奪ひ返さうとした。そこでわが國は、奮然起つて自衞の處置をとりこれに端を發して滿洲國の獨立となつた。由來この地方は、我が國との關係深く、その安定は、實に東洋平和の根本要件であるから、わが國は極力滿洲國の獨立維持、秩序の確立をたすけ、東洋平和の增進を期するに拘らず、列國は國際聯盟を通じてこれに反對し、わが國策の根本を否定せんとしたから、昭和八年やむなく國際聯盟を脫退し、毅然として正義の道を踏み、大義を世界に布くことゝなつた。

中華民國當路者の迷夢

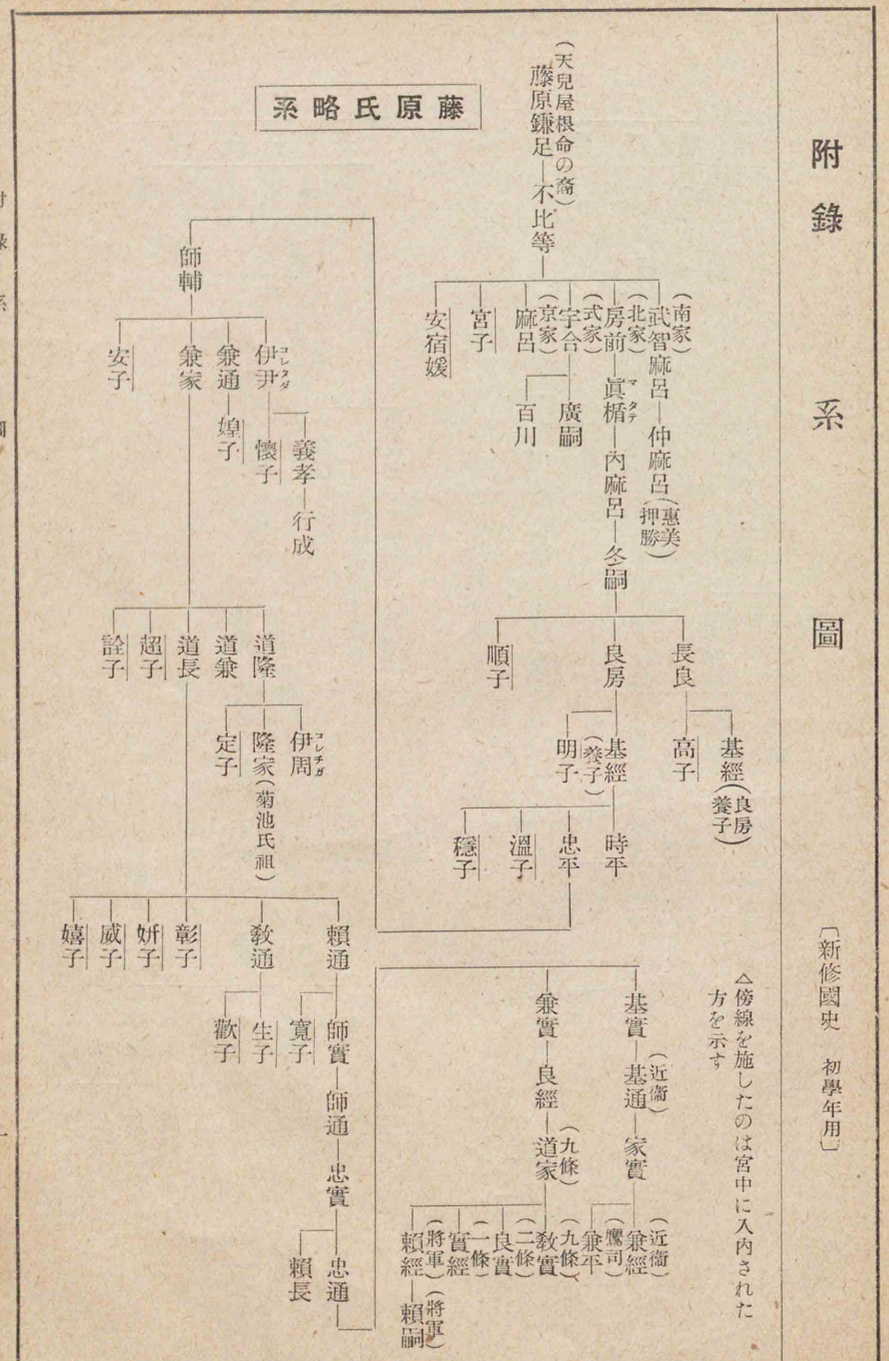
南京の陥落

支那事變　かくて滿洲國は、我が國の盟邦として、その後發達著しく、昭和九年三月帝制を布き、治安の確保、産業の開發、交通の整備など、漸次その歩を進め、東洋の和平を保つ上に、有力な地位を占むるに至つた。然るに中華民國の政府當路者は、日・滿・支一體となり、手をたづさへて東洋の安定をはかり、相互の福利を增進せんとする我が國の眞意を解せず、陰に陽に排日をとなへて軍備をとゝのへ、昔ながらの傳統的精神で、ひそかにヨーロッパ諸國の援助を期待し、我が國との間に成立した諸協定を無視し、昭和十二年夏、つひに我に向つて事を構へるに至つた。そこで我が國は、やむを得ず忠勇な將兵を北支及び揚子江流域等に派遣し、和平を妨げるこの種の暴惡を懲らすことゝなり、かゞやかしい戰果を收めて、首都南京を陷れた。されど民國當路者には、迷夢未ださめざるものが多く、事變の前途なほ遠かるべきを思はしめる。

國民の覺悟　かくの如くわが國は、上に萬世一系の皇室をいただき、絶えず國運が發展して、以て今日に及んだ。しかも明治以來の急速な進歩は、列國をして驚きの目を見はらしめ、國力の充實未だ全からざるに、早く既にそねみや誤解をうけ、やゝもすればわが國民を排斥せんとしてゐる。殊に最近列國對立の傾向が次第に著しく、各國その軍備・經濟並びに産業を充實せんとし、今や軍備制限條約も消滅して、それぞれ自强の道を講ずることゝなつた。殊に近く支那事變の勃發するあり、この非常重大の時機にあたり、わが國民たるものは、奮勵努力もつて皇國の精華を發揚し、國運伸展の源泉をつちかはなければならぬ。世界の平和と人類の幸福とに貢獻するの途は、實に皇國の隆昌を致し、皇道を四海に布くことに外ならないからである。

附錄系圖

藤原氏略系



△傍線を施したのは宮中に入内された方を示す

新修國史　初學年用〔實業學校用〕終

平氏略系

- （桓武天皇御曾孫）平高望
  - 國香
    - 貞盛
      - 維衡
        - 正度
          - 正衡
            - 正盛
              - 忠盛
                - 清盛
                - 重盛
                - 維盛
                - 宗盛
                - 知盛
                - 重衡
                - 德子
                - 經盛
                - 敦盛
                - 敦經
                - 通盛
                - 教盛
              - 忠正
                - 忠度
  - 良將
    - 將門
    - 將平
  - 良文
    - 忠頼
      - 忠常（千葉氏の祖）
    - 維將（北條氏の祖）

源氏略系

一・二・三は將軍就職す示を序順の職

- （清和天皇御孫）源經基
  - 滿仲
    - 頼光
      - 頼國
        - 仲政
          - 頼政
    - 頼信
      - 頼義
        - 義家
          - 義親
            - 爲義
              - 義朝
                - 義平
                - 頼朝
                - 頼家
                - 一幡
                - 公曉
                - 實朝
                - 範頼
                - 義經
              - 義賢
                - 義仲
              - 爲朝
              - 行家
          - 義國
            - 義重（新田氏の祖）
            - 義康（足利氏の祖）
        - 義光

北條氏略系

一・二・三は執權就職す示を序順の職

- （平維將の裔）北條時政
  - 政子（頼朝の室）
  - 義時（二）
    - 泰時（三）
      - 時氏
        - 經時（四）
        - 時頼（五）
          - 時宗（八）
            - 貞時（九）
              - 高時（一四）
                - 時行
          - 宗政
          - 師時
    - 朝時（名越氏の祖）
    - 重時
      - 長時（六）
        - 義宗（赤橋氏）
          - 久時（一六）
          - 守時
      - 業時
        - 時兼
        - 基時（一三）
        - 仲時
    - 政村（七）
      - 時村
        - 爲時
          - 熙時（二）
            - 茂時
    - 實泰（金澤氏）
      - 實時
        - 顯時（一五）
          - 貞顯
            - 貞將
        - 實政
  - 時房
    - 朝直
      - 宣時（大佛氏）
        - 宗宣（一二）

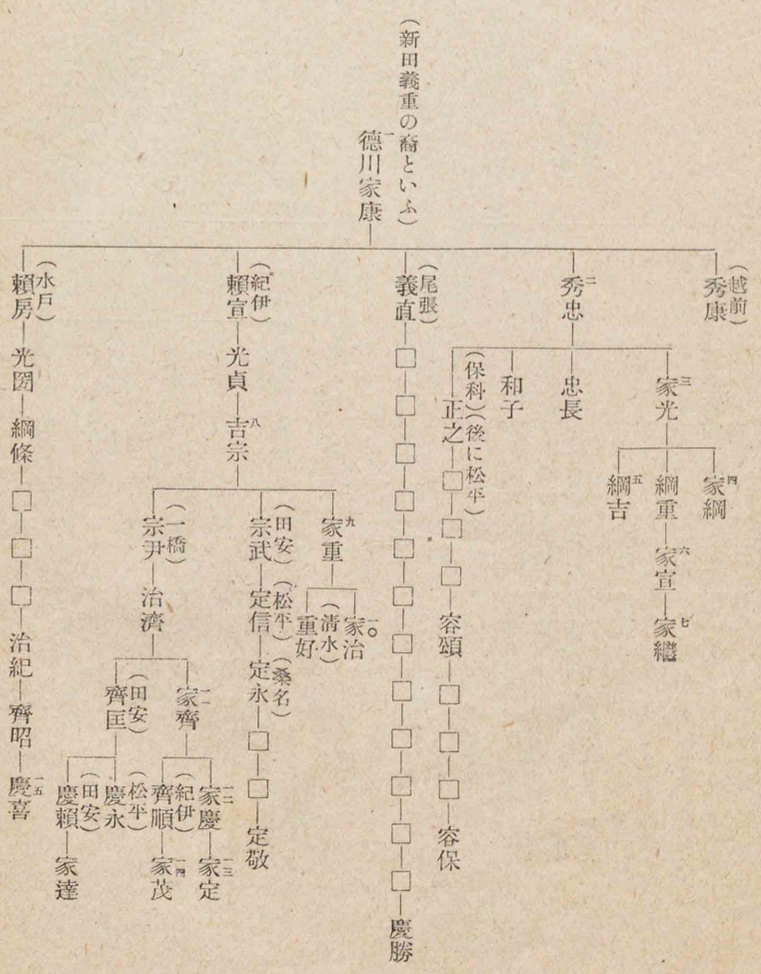
足利氏略系

一・二・三は將軍就職す示を序順の職

- （源義康の裔）足利尊氏
  - 義詮
    - 義滿（一）
      - 義持（二）
        - 義量（三）
      - 義勝（五）
      - 義教（四）
        - 義政（七）
          - 義尚（七）
        - 義視
          - 義稙（八）
        - 政知（堀越公方）
          - 茶茶丸
          - 義澄（九）
            - 義晴（一〇）
              - 義輝（一一）
              - 義昭（一三）
            - 義維
              - 義榮（一二）
  - （關東管領）基氏
    - 氏滿
      - 滿兼
        - 持氏
          - 春王
          - 安王
          - （古河公方）成氏
            - 政氏
              - 高基（小弓御所）
                - 晴氏
                - 義氏
              - 義明

德川氏略系

一・二・三は將軍就職の順序を示す



附錄 國史年表

〔新修國史 初學年用〕

御代	重要事項	支那	御代	重要事項	支那
1 神武天皇 (元—七六)	元 橿原宮に御即位 四 皇祖を鳥見山中に祀る	周	9 開化天皇 (五〇三—五六三)	鏡劍を笠縫邑に遷し給ふ 四道將軍の派遣	五六九 五七三
2 綏靖天皇 (八〇—一二三)			10 崇神天皇 (五六四—六三二)	始めて人民に租稅を課す 新羅建國	五七五 六〇四
3 安寧天皇 (一二三—一五〇)			11 垂仁天皇 (六三二—七三〇)	高句麗建國 任那始めて入貢す 百濟建國 皇大神宮を伊勢に遷し祭り給ふ 殉死を禁ず	六二四 六二八 六四三 六五六 六五九
4 懿德天皇 (一五一—一八四)			12 景行天皇 (七三二—七九〇)	熊襲御親征 武内宿禰東北視察 日本武尊の熊襲御征伐 日本武尊の蝦夷御征伐 日本武尊薨去 天皇東國御巡幸	七四二 七五五 七五七 七七〇 七七三 七八三
5 孝昭天皇 (一八六—二六八)			13 成務天皇 (七九一—八五〇)	武内宿禰始めて大臣となる 國縣邑里の制を整へる	七九三 七九五
6 孝安天皇 (二六九—三七〇)		秦	14 仲哀天皇 (八五一—八六〇)	熊襲親征 同 神功后皇の新羅御親征	八五三 八五九 八六〇
7 孝靈天皇 (三七一—四四六)					
8 孝元天皇 (四四七—五〇三)					

15	應神天皇	(八六〇—九七〇)	八六〇　神功皇后攝政の始め
			九四三　百濟縫衣女を貢す○弓月君歸化す
			九四五　王仁來朝し論語千字文を獻ず
			九四九　阿知使主等來朝歸化す
			九六六　阿知使主等を吳に遣はす
16	仁德天皇	(九七三—一〇五九)	九七三　難波(大阪)に都したまふ
			九七六　諸國三年の租稅を免じたまふ
			一〇五一　高句麗廣開土王(好太王)卽位
17	履中天皇	(一〇六〇—一〇六五)	
18	反正天皇	(一〇六六—一〇七〇)	
19	允恭天皇	(一〇七二—一一一三)	
20	安康天皇	(一一一三—一一一六)	
21	雄略天皇	(一一一六—一一三九)	一一三〇　機織の工女吳より來る
			一一三八　伊勢外宮の起り
22	淸寧天皇	(一一三九—一一四四)	
23	顯宗天皇	(一一四五—一一四七)	

三國	24	仁賢天皇	(一一四八—一一五八)
西晉	25	武烈天皇	(一一五八—一一六八)
東晉	26	繼體天皇	(一一六七—一一九一)
	27	安閑天皇	(一一九一—一一九五)
	28	宣化天皇	(一一九五—一一九九)
南北朝	29	欽明天皇	(一一九九—一二三一)
	30	敏達天皇	(一二三二—一二四五)
	31	用明天皇	(一二四五—一二四七)
	32	崇峻天皇	(一二四七—一二五二)

一一八二　司馬達等來る

一二一二　百濟佛像經論を獻ず

一二一四　百濟曆醫易等の博士を貢す

一二二二　任那の日本府亡ぶ

南北朝

33	推古天皇	(一二五二—一三六八)	一二五三　聖德太子攝政となる○四天王寺を建つ
			一二六三　冠位十二階を定む
			一二六四　憲法十七條を定
			一二六七　小野妹子を隋に遣はさる○法隆寺を建つ
			一二六八　隋使來る○留學生派遣
			一二八〇　國史の編修成る
			一二八二　聖德太子薨す
34	舒明天皇	(一三八九—一四〇一)	一二九〇　始めて使を唐に遣はす
			一二九二　唐使來る
35	皇極天皇	(一四〇三—一四〇五)	一三〇三　蘇我入鹿山背大兄王を害し奉る
			一三〇五　蘇我蝦夷・入鹿誅に伏す
36	孝德天皇	(一四〇五—一四一四)	一三〇五　年號の始、改新の大業始まる
			一三〇六　改新の四大事を宣したまふ
			一三〇九　八省百官を置く
37	齊明天皇	(一四一五—一四二一)	一三一八　阿倍比羅夫蝦夷及び肅愼を伐つ
			一三二〇　新羅等百濟を攻めてその王を降す
			一三二一　新羅征討のため九州行幸
38	天智天皇	(一四二二—一四三一)	一三二三　唐、新羅、聯合して百濟を滅ぼす
			一三二七　都を近江に遷す
			一三二八　唐、高句麗を滅ぼす○近江令制定
			一三二九　藤原鎌足薨す
			一三三〇　庚午年籍を作る
			一三三一　大友皇子始めて太政大臣となる○漏剋を用ふ

隋　唐

39	弘文天皇	(一四三二—一四三二)	
40	天武天皇	(一四三三—一四四六)	
41	持統天皇	(一四四六—一四五七)	
42	文武天皇	(一四五七—一四六七)	一三六一　大寶律令成る
43	元明天皇	(一四六七—一四七五)	一三六八　和同開寶を鑄る
			一三七〇　奈良奠都
			一三七二　太安麻呂古事記を上る
			一三七三　諸國に風土記を上らしむ
44	元正天皇	(一四七五—一四八四)	一三七六　吉備眞備・阿倍仲麿等唐に留學す
			一三七八　藤原不比等に命じて大寶律令を修正せしむ
			一三八〇　日本書紀成る
45	聖武天皇	(一四八四—一四〇九)	一三八七　渤海始めて來朝す
			一三八九　藤原光明子を立てゝ皇后となしたまふ
			一三九〇　施藥院悲田院を置く
			一四〇一　國分寺を諸國に建てしむ
			一四〇三　開墾地の私有を許す
			一四〇七　東大寺の大佛を鑄る
46	孝謙天皇	(一四〇九—一四一八)	一四一二　大佛開眼の式を擧ぐ
			一四一四　唐僧鑑眞來朝す

唐

47 淳仁天皇 (一四一八—一四二四)	一四二五	僧道鏡を太政大臣禪師となす	
48 稱德天皇 (一四二四—一四三〇)	一四二九	和氣清麻呂宇佐八幡の神教を奏しついで大隅に流さる	
49 光仁天皇 (一四三〇—一四四一)	一四三〇	道鏡を下野に貶し清麻呂・廣嶋を召還す	
50 桓武天皇 (一四四一—一四六八)	一四四八	僧最澄比叡山に延暦寺を創む	
	一四五四	平安奠都	
	一四六一	田村麻呂蝦夷を平ぐ	
	一四六四	最澄・空海入唐す	
	一四六五	最澄歸朝して天台宗を傳ふ	
51 平城天皇 (一四六八—一四七九)	一四六六	空海歸朝して眞言宗を傳ふ	
52 嵯峨天皇 (一四七九—一四八三)	一四七〇	藏人所を置く	
	一四七六	空海高野山に金剛峯寺を創む	
	一四八一	藤原冬嗣勸學院を建つ	
53 淳和天皇 (一四八三—一四九二)	一四八七	經國集成る	
54 仁明天皇 (一四九三—一五一〇)			
55 文德天皇 (一五一〇—一五一八)	一五一七	藤原良房太政大臣となる	
唐			
56 清和天皇 (一五一八—一五三六)	一五一八	藤原良房攝政となる	
57 陽成天皇 (一五三六—一五四四)			
58 光孝天皇 (一五四四—一五四七)			
95 宇多天皇 (一五四七—一五五七)	一五四七	藤原基經關白の詔を賜はる	
	一五四九	高望王平姓を賜はる	
	一五五四	遣唐使の派遣をやめたまふ	
60 醍醐天皇 (一五五七—一五九〇)	一五五九	藤原時平を左大臣、菅原道眞を右大臣としたまふ	
	一五六一	菅原道眞貶せらる	
	一五六三	道眞薨ず	
	一五六五	古今和歌集成る	
	一五八七	渤海亡ぶ	
61 朱雀天皇 (一五九〇—一六〇六)	一五九五	新羅亡ぶ	
	一五九六	高麗の朝鮮半島統一	
	一六〇〇	平將門誅に伏す	
	一六〇一	藤原純友誅に伏す	
62 村上天皇 (一六〇六—一六二七)	一六二一	經基王源姓を賜はる	
63 冷泉天皇 (一六二七—一六二九)			
北宋	五代	唐	

64 圓融天皇 (一六二九—一六四四)			
65 花山天皇 (一六四四—一六四六)			
66 一條天皇 (一六四六—一六七一)	一六五三	菅原道眞に正一位太政大臣を贈らる	
67 三條天皇 (一六七一—一六七六)			
68 後一條天皇 (一六七六—一六九六)	一六七六	藤原道長の攝政	
	一六七九	刀伊入寇す	
	一六八二	法成寺成る	
	一六八七	藤原道長薨ず	
	一六八八	平忠常叛す	
69 後朱雀天皇 (一六九六—一七〇五)	一六九九	始めて延暦寺の僧兵强訴	
70 後冷泉天皇 (一七〇五—一七一八)	一七一三	鳳凰堂成る	
	一七二二	前九年の役終る	
71 後三條天皇 (一七一八—一七三一)	一七二九	新置の莊園をやめたまふ○記錄所を置く	
72 白河天皇 (一七三一—一七四六)			
北宋			
73 堀河天皇 (一七四六—一七六七)	一七四六	白河上皇の院政始まる	
	一七四七	後三年の役終る	
74 鳥羽天皇 (一七六七—一七八三)			
75 崇德天皇 (一七八三—一八〇一)	一七八四	平泉の金色堂成る	
76 近衞天皇 (一八〇一—一八一五)	一八一二	平清盛嚴島神社の社殿を造りかへる	
77 後白河天皇 (一八一五—一八八八)	一八一六	保元の亂	
78 二條天皇 (一八八八—一八二五)	一八一九	平治の亂	
79 六條天皇 (一八二五—一八二八)	一八二七	平清盛太政大臣となる	
80 高倉天皇 (一八二八—一八四〇)	一八三二	平清盛の女德子入内す	
	一八三三	平清盛の兵庫築港	
	一八三五	僧源空淨土宗を開く	
	一八三七	藤原成親等の陰謀	
	一八三九	平重盛薨ず	
81 安德天皇 (一八四〇—一八四五)	一八四〇	源頼政兵を擧ぐ○源頼朝・義仲起る○頼朝侍所を鎌倉に開く	
	一八四一	平清盛薨ず	
宋	南宋	北宋	

		一八四三	平氏西奔○義仲入京
		一八四四	義仲敗死○一ノ谷の戰○頼朝公文所・問注所を鎌倉に設く
		一八四五	屋島の戰○壇ノ浦の戰
82 後鳥羽天皇 (一八四五—一八五八)		一八四五	頼朝守護地頭を置くことを許さる
		一八四九	頼朝の奥州征伐
		一八五一	榮西宋より歸朝し臨濟宗を傳ふ
		一八五二	頼朝征夷大將軍に任ぜらる
		一八五三	範頼殺さる
83 土御門天皇 (一八五八—一八七〇)		一八五九	將軍頼朝薨ず
		一八六二	頼家將軍となる
		一八六三	北條時政執權となる○將軍頼家廢せられ實朝將軍となる
		一八六四	頼家害せらる
		一八六五	北條義時執權となる
84 順德天皇 (一八七〇—一八八一)		一八七九	將軍實朝弑せらる○藤原頼經鎌倉に下る
85 仲恭天皇 (一八八一)		一八八一	承久の亂○六波羅探題を置く
86 後堀河天皇 (一八八一—一八九二)		一八八四	北條泰時執權となる○親鸞眞宗を開く
		一八八六	頼經將軍となる
		一八八七	道元宋より歸朝し曹洞宗を傳ふ
87 四條天皇 (一八九二—一九〇二)		一八九二	貞永式目を定む
	南		
88 後嵯峨天皇 (一九〇二—一九〇八)		一九〇四	將軍頼經廢せられ頼嗣將軍となる
89 後深草天皇 (一九〇八—一九一九)		一九〇六	北條時頼執權となる
		一九一二	將軍頼嗣廢せられ宗尊親王將軍となる
		一九一三	日蓮日蓮宗を開く
90 龜山天皇 (一九一九—一九三四)		一九一六	將軍宗尊親王廢せられ惟康親王將軍となる
		一九二八	蒙古の國書幕府に達す○北條時宗執權となる
		一九三一	〔蒙古國號元と定む〕
91 後宇多天皇 (一九三四—一九四七)		一九三四	元軍來寇す(文永の役)
		一九三六	時宗異國征伐を企つ
		一九四一	元軍大舉して再び來寇(弘安の役)
92 伏見天皇 (一九四七—一九五八)		一九四九	將軍惟康親王廢せられ久明親王將軍となる
93 後伏見天皇 (一九五八—一九六一)	宋		
94 後二條天皇 (一九六一—一九六八)		一十六八	將軍久明親王廢せられ守邦親王將軍となる
95 花園天皇 (一九六八—一九七八)		一九七六	この頃北條顯時金澤文庫を建つ
	南		元

96 後醍醐天皇 (一九七八—一九九九)		一九八四	日野資朝・同俊基捕へらる
		一九九一	笠置御潛幸○楠木正成義兵を起す
		一九九二	隱岐御遷幸
		一九九三	六波羅及び鎌倉陷落○北條氏亡ぶ○天皇還幸せらる
		一九九四	建武中興
		一九九五	北條時行の亂○護良親王弑せらる○足利尊氏反す
		一九九六	多々良濱の戰○湊川の戰○正成戰死○天皇吉野御遷幸
		一九九七	金ケ崎城の陷落
		一九九八	北畠顯家・新田義貞戰死○尊氏擅に幕府を開く
97 後村上天皇 (一九九九—二〇〇八)		二〇〇一	尊氏始めて天龍寺船を送る
		二〇〇八	四條畷の戰○正行戰死○天皇賀名生御遷幸
		二〇一二	官軍京都を復す○足利義詮に復京都を奪はる
		二〇一四	北畠親房薨す
		二〇一八	尊氏歿し義詮家をつぐ
		二〇二七	義詮歿し義滿家をつぐ
98 長慶天皇 (二〇八—二〇四三)		二〇五一	義滿山名氏清を滅ぼす
99 後龜山天皇 (二〇四三—二〇五三)		二〇五二	後龜山天皇神器を後小松天皇に傳へ給ふ○李成桂の朝鮮建國
100 後小松天皇 (二〇五三—二〇七二)		二〇五四	征夷大將軍足利義滿職を辭し子義持つぐ
		二〇五七	義滿金閣を建つ
		二〇五九	應永の亂、義滿大内義弘を滅ぼす
		二〇六一	義滿好を明に通ず
		二〇六八	義滿薨ず
		二〇七九	義持明と交を絶つ
		二〇八三	義持退隱し子義量將軍となる
		二〇八五	義量卒す
		二〇八八	義持薨ず
	元		
101 稱光天皇 (二〇七三—二〇八八)		二〇八九	義持の弟義教將軍となる
		二〇九二	義教明と通交を復す
		二〇九八	永享の亂起る(翌年足利持氏自殺)
		二一〇一	嘉吉の亂、赤松滿祐義教を害す
		二一〇二	義教の子義勝將軍となる
		二一〇三	義勝卒し弟義政家督をつぐ○宗氏朝鮮と通商條約を結ぶ
		二一〇九	足利成氏關東管領となる○義政將軍となる
		二一一五	義政成氏を討たしめ成氏古河に走る
		二一一七	太田道灌江戸城を築く○足利政知堀越に赴く
102 後花園天皇 (二〇八八—二二四)		二一二七	應仁の亂起る○雪舟明に渡る
		二一三三	山名宗全・細川勝元卒す○義政退隱し子義尚將軍となる
		二一三七	應仁の亂終る
		二一四三	銀閣成り義政之に移る
103 後土御門天皇 (二二四—二二六〇)	明		

		二一四九	義尙薨す
		二一五〇	義政薨す○義視の子義植將軍となる
		二一五一	伊勢長氏伊豆を略す
		二一五三	義植出奔、翌年政知の子義澄將軍となる
		二一五五	長氏小田原を取る
104 後柏原天皇 (二四七—二八六)		二一六八	義澄近江に奔る○義植入京
		二一八一	義植復京都を出奔す○天皇卽位の禮を行ひ給ふ（踐祚後二十二年）○義澄の子義晴將軍となる
105 後奈良天皇 (二八六—三二七)		二一九六	天皇卽位の禮を行はせ給ふ（踐祚後十年）
		二二〇三	葡萄牙人種子島に漂着し鐵砲を傳ふ
		二二〇六	義晴退隱子義輝將軍となる
		二二〇九	宣教師フランシスサヴイエル鹿兒島に來る
		二二一一	大內義隆其の臣陶晴賢に害せらる
		二二一五	川中島の戰（以後屢々交戰あり）○嚴島の戰
106 正親町天皇 (二三七—二四六)		二二二〇	桶狹間の戰
		二二二五	松永久秀將軍義輝を害す
		二二二八	義輝の從弟義榮將軍となる（ついで阿波に奔り卒す）○信長義昭を奉じて入京す
		二二二九	南蠻寺創立
	明		
107 後陽成天皇 (二四六—二七一)		二二三〇	信長皇居を修理す○姉川の戰
		二二三二	三方原の戰
		二二三三	義昭逐はれて足利將軍家亡ぶ○武田信玄死す
		二二三五	長篠の戰
		二二三六	信長安土城に移る
		二二三七	秀吉中國征伐
		二二三八	上杉謙信卒す
		二二四二	武田氏亡ぶ○本能寺の變○山崎の戰○大友・有馬・大村の三氏使者を羅馬に遣はす
		二二四三	賤ケ嶽の戰○秀吉大阪城修築
		二二四四	小牧・長久手の戰
		二二四五	秀吉四國平定○秀吉關白となる○五奉行を置く○檢地を始む
		二二四七	秀吉九州を平ぐ○秀吉聚樂第に移る○禁敎令○使を朝鮮に送る
		二二四八	天皇聚樂第に行幸せらる
		二二四九	再び使者を朝鮮に送る
		二二五〇	秀吉小田原城を拔く○家康江戸城に入る
		二二五二	文祿の役始まる○イスパニヤのルソン太守に書を送る
		二二五三	小西行長明人沈惟敬と和を議す
		二二五四	秀吉伏見城を築く
		二二五六	秀吉明使を大阪城に引見す
		二二五七	慶長の役始まる
		二二五八	秀吉薨去
		二二六〇	關ケ原の戰○アダムス等江戸に入る
	明		

		二二六三	家康征夷大將軍に任ぜらる
		二二六五	家康退隱秀忠將軍となる○朝鮮との修交成る
		二二六九	幕府和蘭人の通商を許す○島津家久琉球を服す
108 後水尾天皇 (二三七—二三八九)		二二七三	幕府英人の通商を許す○伊達政宗使を羅馬に遣はす
		二二七四	大阪冬の陣
		二二七五	大阪夏の陣○豐臣氏滅亡○諸法度の頒布
		二二七六	家康薨ず
		二二八〇	秀忠の女和子入內す○政宗の使歸朝す
		二二八三	秀忠退隱し家光將軍となる
		二二九〇	禁書の令を發す
		二二九五	參勤交代の制定まる
		二二九六	海外渡航の禁
		二二九七	島原の亂
		二二九八	切支丹宗の禁を嚴にす
		二二九九	和蘭の外西洋諸國との貿易を禁す
		二三〇一	オランダ人を長崎の出島にうつす
109 明正天皇 (二三八九—二三〇三)		二三一一	家光薨去家綱將軍となる
110 後光明天皇 (二三〇三—二三一四)		二三一七	江戸大火○德川光圀大日本史編纂の業を起す○林羅山歿す
111 後西天皇 (二三一四—二三二三)		二三三四	狩野探幽歿す
112 靈元天皇 (二三二三—二三四七)		二三四〇	家綱薨去綱吉將軍となる
		二三四七	生類憐みの令を發す
	清		
113 東山天皇 (二三四七—二三六九)		二三五〇	綱吉聖堂を湯島に興す
		二三五二	光圀湊川に楠公の碑を立つ
		二三五五	貨幣改鑄
		二三六〇	光圀薨す
		二三六二	赤穗義士の復讐
		二三六九	綱吉薨去家宣將軍となる
114 中御門天皇 (二三六九—二三九五)		二三七〇	閑院宮家を立てらる○金銀貨の改鑄
		二三七一	朝鮮使節の待遇を改む
		二三七二	家宣薨去
		二三七三	金貨の改鑄○家繼將軍となる
		二三七五	長崎貿易の制を定む
		二三七六	家繼薨去吉宗將軍となる
		二三八〇	禁書の令を弛む
		二三八二	養生所を設けて貧者に施療せしむ
		二三九〇	田安家起る
115 櫻町天皇 (二三九五—二四〇七)		二四〇〇	一橋家起る
		二四〇二	公事方定書成る
		二四〇五	吉宗退隱家重將軍となる
116 桃園天皇 (二四〇七—二四二三)		二四一九	竹內式部追放○清水家起る
		二四二〇	家重退隱家治將軍となる
117 後櫻町天皇 (二四二三—二四三〇)		二四二七	山縣大貳・藤井右門等罪せらる
118 後桃園天皇 (二四三〇—二四五九)		二四三二	田沼意次老中となる
119 光格天皇 (二四五九—二四七七)		二四四三	諸國饑饉
		二四四六	家治薨去
	清		

120 仁孝天皇（二四七七—二五〇六）

二四四七　家齊將軍となる○松平定信老中となる
二四四八　京都大火皇居炎上
二四五〇　異學の禁
二四五二　林子平罪せらる○露艦根室に來る
二四五三　林子平歿す○高山彦九郎自盡○定信江戸近海を巡視す
二四五八　信江戸近海を巡視す
二四六〇　伊能忠敬蝦夷地の測量
二四六一　本居宣長歿す
二四六四　ロシヤのレザノフ長崎に來る
二四六七　露人蝦夷に寇す
二四六八　間宮林藏樺太に到る○英船長崎を驚かす
二四八五　外國船擊攘令を下す
二四九二　賴山陽歿す
二四九四　水野忠邦老中となる
二四九七　家齊退隱家慶將軍となる○大鹽平八郎の亂
二四九九　渡邊崋山・高野長英罪せらる
二五〇一　天保の改革始まる
二五〇二　外國船擊攘令を弛む
二五〇五　忠邦職を罷めらる
二五一三　米使ペリー渡來○家慶薨去○ロシヤ使プーチヤチン來る
二五一四　米・英・露・蘭（翌年）と和親條約を結ぶ○家定將軍となる
二五一六　米使ハリス下田に來る

清

121 孝明天皇（二五〇六—二五二六）

二五一八　老中堀田正睦上京○井伊直弼大老となる○米・蘭・露・英・佛との假條約に調印す○家定薨去し家茂將軍となる
二五一九　橋本左内・吉田寅次郎等罪せらる
二五二〇　櫻田門外の變
二五二一　和宮降嫁せらる
二五二二　坂下門外の變○島津久光・毛利元德入京○勅使大原重德東下○生麥の變○幕制の改革
二五二三　家茂入京○下關の外國船砲擊○薩英艦と戰ふ○七廷臣の長門下向
二五二四　蛤御門の變○長州征伐○佛・米・蘭・英四國の聯合艦隊下關を砲擊す
二五二五　長州再征○假條約勅許
二五二六　家茂薨去慶喜將軍となる
二五二七　慶喜大政を奉還す○王政復古の令
二五二八　鳥羽・伏見の戰○五箇條の御誓文を宣し給ふ○戊辰の役
二五二九　函館戰爭（維新の戰亂終結す）○東京奠都○版籍奉還
二五三一　廢藩置縣○岩倉大使一行歐米視察
二五三三　太陽曆實施○岩倉大使一行歸朝○征韓論の議破る○徵兵令實施
二五三四　佐賀の亂○臺灣征伐
二五三五　江華島事件○千島・樺太の交換
二五三六　熊本の亂○秋月の亂
二五三七　西南の役
二五三九　府縣會開かる

清

二五四一　明治二十三年國會開設の詔下る
二五四五　京城條約○天津條約○內閣官制の制定
二五四九　帝國憲法の發布
二五五〇　國會開設○教育勅語下賜
二五五四　朝鮮東學黨の亂○清國と戰端を開く
二五五五　清國との講和條約（下ノ關條約）成る
二五五七　朝鮮國號を韓と改む
二五六〇　北清事變
二五六二　日英同盟成る
二五六四　露國と戰端を開く
二五六五　露國との講和條約（ポーツマス條約）成る○韓國に統監府を置く○日英攻守同盟成る
二五六七　日佛・日露新協約成る
二五七〇　韓國併合
二五七一　日英同盟條約改訂
二五七二　明治天皇崩御

123 大正天皇（二五七二—二五八六）

二五七四　昭憲皇太后崩御○對獨宣戰の布告○青鳥陷落
二五七五　卽位の禮を擧げ給ふ○日支交涉行はる
二五七八　シベリヤに出兵す
二五七九　獨逸との講和條約成る
二五八〇　尼港事件起る
二五八一　皇太子裕仁親王の御外遊○皇太子攝政に御就任○ワシントン會議
二五八三　關東地方大震災
二五八五　ソヴイエト聯邦との修好成る○普通選擧法制定
二五八六　大正天皇崩御

中華民國

清

124 今上天皇（二五八六踐祚）

二五八六　御踐祚
二五八七　ジユネーヴに軍縮會議開かる
二五八八　不戰條約成立
二五九〇　ロンドンに軍縮會議開かる
二五九一　滿洲事變起る
二五九二　上海事變起る、滿洲國承認
二五九三　國際聯盟脫退　皇太子殿下御誕生
二五九四　ワシントン軍備制限條約廢棄通告
二五九五　滿洲國皇帝御來訪
二五九六　ロンドン軍縮會議脫退
二五九七　支那事變起る

中華民國

昭和十四年十一月六日
文部省檢定濟
實業學校歷史科用

昭和十二年八月一日 印刷
昭和十二年八月三日 發行
昭和十三年二月廿五日 訂正再版印刷
昭和十三年二月廿八日 訂正再版發行
昭和十四年十月五日 訂正三版印刷
昭和十四年十月十日 訂正三版發行

著作權所有

不許複製

新修國史 初學年用 (實業學校用)

定價 金壹圓

著作者 及川儀右衛門

發行者 星野敬一 京都市上京區丸太町通堀川西入西丸太町百七十一番地

印刷所 同朋舍 京都市下京區五條下ル

發行所 京都市丸太町烏丸西入 星野書店 電話上(8)四九一三・四九一四・一五〇二番 振替口座大阪四九四九一番

MB
新本巖

広島大学図書
2000072700